

1LDKの女王モルガン

粗茶Returnees

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢の中で頻繁に出会う女性がいた。

夢から覚めるとその記憶はいつも曖昧で、彼女のことばんやりとしか憶えていない。

そんな生活をしていたある日、起きたらなぜかその女性が家にいた。

「金銭感覚の違いを理解してくれないと家計が！」

※細かい理屈とかどうでもいいから現代で平和に過ごしてモルガンが見たい

目 次

1 話目	モルガンと料理	1
2 話目	モルガンと学校	7
3 話目	モルガンとお出かけ①	18
4 話目	モルガンとお出かけ②	26
5 話目	モルガンと衛宮家	34
6 話目	モルガンと聖杯戦争——のお話	42
7 話目	モルガンとアインツベルン	48
8 話目	モルガンとフリーマーケット	56
9 話目	モルガンと独占欲	65
10 話目	モルガンとクリスマス①	73
11 話目	モルGANとクリスマス②	80
12 話目	モルGANと娘	90
13 話目	モルGANと娘とお出かけ	98
14 話目	モルGANと親子①	105
15 話目	モルGANと親子②	113
16 話目	モルGAN親子と年末年始	122
17 話目	モルGANと娘の絆	131
18 話目	1LDKの女王モルGAN	139

1話目 モルガンと料理

週末をどう過ごすか。どこかの部に入っている人なら、部活動に励んでいるだろう。友人とどこかに遊びに行つたり、ゲーム三昧だつたり。各々が自由に、何割かは自堕落に過ごすことだろう。

「ヤマト、この玉ねぎというものはどこまで剥けばよいのですか？」

「茶色のどこだけでいいけど？」

「？ 皮を剥くと言つたではないですか」

「説明が悪かつたです。はい」

ヤマトと呼ばれた少年は、にんにくサイズにまで皮を剥かれ続けた玉ねぎを見て唸る。まな板の上には、乱雑に剥かれ続けた他の皮たち。茶色の部分を捨てて、その他の残骸を集めれば、どうにかなりそうだ。どうせこの後小さく切ることになる。

下手に玉ねぎを所々潰しているせいか、女性の目には涙が溜まっている。本人は「何事もありませんが？」とシラを切りたいようなので、少年も指摘しない。

茶色の皮を集めたらそれを捨てる。残った部分を、重ねられるところは重ねて、その塊を何個か用意。これから作るハンバーグの中にはじ込む予定だ。

「これを細かく切つていって」

「わかりました」

「……なんで包丁を掲げてるんですかね？」

「斬るのですよね？」

「そうだけども！ まな板すら切りそうな勢いだよね！」

「この板は斬れないようになつてているのでは？」

「耐久性があるだけ！ てか包丁が先に折れそうだな！」

女性が1回その高さから振り下ろした。叩きつけるように。薪割りぐらいの勢いで。

——バキッ！

「あ」

振り下ろしたはずの包丁が宙を舞っている。綺麗な縦回転。10回転ほどしてからその切つ先は床に突き刺さる。そのまま横では、包丁が折れたことにショックを受けた少年が膝から崩れ落ちていた。

「……脆い」

「脆いじやねえわ！　使い方つてものがあるの!!」

飛びつく勢いで起き上がった少年が、女性の顔や手をペタペタ触つて確認。人形のように、身動きせず女性は疑問を口にする。

「どうされたのですか？」

「いや……包丁の破片とかでどこか怪我してないかなって。ガラスもだけど、金属の欠片つて危ないし」

「そうでしたか。ご安心をヤマト。防げますから」

「普通料理にそれ用の魔術は使わないんだけどな？」

「当たり前ですよ」みたいにくすりと笑う女性に呆れて、少年はため息混じりにツツコんだ。そのため息には、安堵の意味も籠っていることを女性は察している。

「掃除するから、ちょっとここで動かずに立つといて。いいか、一歩も動くなよ」

「それは振りというやつですか？」

「ガチの心配です！」

「ふふっ。大げさですねヤマト」

裏のない言葉。心からの心配。それがひどく胸に染み込んで、女性は言われた通り動かずに少年を見つめた。まずは大部分を拾つてそれを何重もの紙で包み、袋の中へ。それを玄関に持つていったら、掃除機を持ってきて、あるかも分からぬ破片の掃除。最後に、フローリングの隙間に破片がないか目視でチェックし、それっぽいものがあれば小さな箒で取り除く。

「これでよしと」

「魔術を使えばその手間はいらなかつたのでは？」

「魔術は極力使わないって話をしたろ？」

「この程度なら問題ないと思いませんが」

「いいんだよ。使わずに済むのなら使わない。それより買い物にいか

ないとな。包丁がないと料理ができない」

ジーツと女性と視線が重なり合い、数秒後にふいと逸らされた。自覚はちゃんとあるようだ。

作りかけの料理は、大皿やボールに入れておいてラップで包んでおく。火元の確認も済んだら、マイバッグと財布を用意。財布の中身を確認し、お金を下ろす必要があることを確認。

出かける準備を済ませると、視線を感じてそちらを向いた。

「私も同行しましよう」

「…………服装をどうにかしてくれ」

「どこに問題が？」

「全部かな！」

付けていたエプロンを外した彼女は、胸元だけでなくお腹まで露出している。ドレスのような衣装ではあるのだが、脚を隠す布地にはスリットが入っているどころではない。際どいというかほぼアウトではなかろうか。動作次第では……というやつだ。

それは彼女にとても似合っている。その美貌を、美しさを際立たせている。だが、現代日本での格好は大変目立つ。コスプレもいいところだ。確定で注目を集めることになるし、少年としてはそんな注目を浴びたくない。

よつて、彼女には留守番を頼むことになる。

「つまらないです」

「そうは言うけども……。いや、服を買えば解決なんだけどさ」

「ではついでに買ってきてください」

少年は言葉を詰まらせた。言いそうだと思っていたし、自分でもそれは考えた。しかし問題がある。大問題がある。

——年頃の少年が女性用の服を1人で買う

この絵面が少年にとつて大変厳しい。女装癖があるだなんて思われたくないし、そうならなくても「変態だこいつ」と思われる。そんなことがあつた日には、もう外を出歩けない。

しかもだ。服を買うとなると、下着も必要となつてくる。服以上のハードルの高さだ。年頃の少年にそれは過酷が過ぎるというもの。

そんなこんなで、服を買つてくるという選択肢が取れない。なんか理由をつけて、やんわりと断りたい。はつきり言うなんて、照れと恥ずかしさと諸々で無理だ。

「サイズとか……」

「採寸すれば問題ないでしよう?」

絞り出した答えが速攻で潰された。彼女はなんとも思っていないようで、「どんとこい」みたいな顔をしている。両手を広げ、寸法される準備は万全だ。

これはこれで少年にとつてハードルが高い。鋼の心を持つと自負しているものの、彼女のスタイルは抜群だ。出るところは出て、引き締まるところは引き締まっている。

ありていに言えば、巨乳である。ボインである。その魅力と破壊力を理解してほしいと思いつつ、少年はそれをなんとか断つた。

「メジャーがない。ひとまず、服は通販でどうにかしよう。1式を一通り揃えられたら、それで出かけられるようになるし」

「……いいでしょう。その提案を許可します」

「ありがたや~」

少年は気づいていない。通販のやり方を教えることになることを。それはつまり、一緒に彼女の服を選ぶだけでなく、下着まで選ぶことになるということも。それに直面して赤面するのは、数時間後の話だ。

ひとまず説得が終わり、少年は包丁を新調しに外出。それだけを買うのも味気ないなと思って、帰りにはコンビニによつてデザートを購入。留守番をさせることのお詫びだ。そもそも、外出の原因を作つたのは相手方なのだが。

「ただいま~」

「おかえりなさいヤマト。てれびが壊れたのですが」「ちよつと何言つてるとか分かりたくないな」

「ヤマトに教わつたとおり、このりもこんの赤いボタンを押しました。これでてれびが点くのですよね?」

「そうなんだけど……。誰が陥没させるまで押せと？」

「押し込まないのですか？」

間違つてはいない。押し込むと言えなくはないのだから。しかしそれは、力をこれでもかと籠める程じやない。ましてや、赤いボタンに触れられないような陥没のさせ方は論外である。

少年は頭を抱え、どう説明するか悩んだ。一度やり方を見せてはいたが、それだけでは駄目だつたらしい。改めて説明するとして、それはリモコンを買ってからにしよう。

「新調したらまた教えるよ。とりあえず、リモコンがイカれたくらいなら問題ない。テレビ本体で点けたらいいだけだし」

「その手もあるのですね」

「……怖いからやるなよ。それはおれだけがやるから」

やらかしたばかりだ。これには彼女も頷くしかない。

気を取り直して、少年は新調した包丁を持って台所へ。彼女もエプロンを着けてその隣に並んだ。最後までやり切るために。

「包丁の使い方を教えます」

「威力は加減しますが？」

「威力つて時点でアウトだ！ つたく」

少年は彼女に包丁を握らせ、後ろから手を重ねた。また折られたら今度は心も折れちゃうから。

「包丁は軽い力でも食材を切れるようになつてるんだ。左手は猫の手にして」

「ねこ？ ねこ、ですか？」

「…………もしかして」

「どういう生命なのですか？ ねこというものは」

「……はい。それは後で見せてやるから。手を軽く丸めてくれ」

どの程度かは、少年が実践して見せる。彼女もそれを真似て手を丸め、これでいいのかと振り返りながら聞いた。身長差はほとんどなく、振り返れば自然と目が合う。彼の視界に映るように、丸めた手を頬の横辺りでくいくいと動かす。

「これでいいのですか？」

「う、うん」

「？ どうかされましたか？」

「なんでもないです」

きよとんと純粹な表情をして、猫の手を作った彼女が可愛らしく見えた。美しいという言葉が似合う女性なのに、あどけなさを感じさせるそれはポイントが高い。

「それができたら、食材をこの手で抑える」

「こうですか？」

「そうそう。それで、包丁の腹を指に当てて安定させて、そのまま引きながら腕を下ろす」

「！ 本当に簡単に切れるのですね」

「だろ？ これぐらいの力でいいんだよ。それで、切るときの厚さも抑える手で調節していくんだ。今回は、今切った厚さにしていくつくれ」

「わかりました。ありがとうございますヤマト」

「どういたしまして」

やり方を教えたら、少年も少年で調理を再開。1人でやらせて本当に大丈夫なのか。その不安はまだあるから、チラチラと横目に様子を見守る。

「……綺麗に切るんだな。全部同じ厚さにができるし」

「これぐらい当然では？」

「いやいや。器用だよこれは」

「そうですか」

自分にとつては当然のこと。それを褒められてもあまり響かないが、多少なりとも嬉しさを感じなくはない。

それよりも彼女の印象に残っているのは、先程まで感じていた少年の温度。背中越しに感じていた、リズムの早い彼の鼓動。鋼の心(笑)を持つていようとも、年頃の反応は示してしまうのだ。

そのことに彼女は静かに微笑んだ。愛らしい少年だと。

それが魔術師である少年こと京坂大和と、ひょんなことから住み着くことになつたモルガン・ル・フエの同棲生活の一幕である。

2話目 モルガンと学校

週が明ければ当然平日。平日とは、ほぼすべての人間が出勤だつたり通学したりする日だ。当然ながら、大和も例外ではない。今年の春から高校生になつた少年は、制服の袖に腕を通して着替えを済ませた。彼の通う学校は学ランタイプ。冬服には、黒ではなく茶色の制服が採用されている。

「ヤマトの正装ですか」

「正装というか制服だけど……、制服も一応正装になるんだつけ。あれ？ どうだつけ？」

冠婚葬祭儀式等。制服での参列が可能なことを考えると、正装の1つではある。

「どちらへ？」

「学校。……話してなかつたな」

「学校ですか。知識としては与えられています。同年代の者たちを箱庭に集め、つまらぬものを詰め込む場でしたね」

「聖杯つてもしかして学校嫌いなのか？」

「アレに好き嫌いなどないでしよう」

「それもそうか。え、じゃあ偏見で語つた？」

「分析した結果ですよ。詰め込むだけで賢くなつたと錯覚する。無駄に時間を浪費しているに過ぎません」

「授業の受け方次第で改善されたりは？」

「無駄から非効率的にランクアップします」

「そつかー」

暗記するだけして、それを社会で使うのかと言われたら首を傾げるものばかり。人生にとつての通過点に向けてのピンポイントの勉強。なるほど、たしかにそれはモルガンに酷評もされよう。為政者の1人として、その辺りの考え方があるから。

「とりあえず、生徒である以上学校には行くよ。入学してから半年だし、3年通つてちゃんと卒業したいし」

「何時に帰ってきますか？」

「部活はやつてないから、授業終わってなんやかんやで……16時くらい？」

「駄目です」

「なにが!?」

「私の昼食をどうするつもりですか！」

「たしかに！」

料理初心者のモルガンに、自分で昼食を作れなど不可能な要求だ。無理難題だ。たとえインスタントだらうと、機械が相手というだけでポンコツさを見せるモルガンには、難しいことのはずだ。……魔術さえ絡めば、機械だらうと解析できると豪語しているが、大和はその話をそこまで信じてない。

昼食を抜くのは大問題だ。通販で買った服も届いていない以上、モルガンは外出もできない。今日も一日この家で過ごすことになる。テレビのリモコンも昨日壊した。

退屈という地獄の耐久。それをするなら、昼食という気分転換の価値は大きい。

「今から準備したら学校に遅刻するし……、出前か？ いやでも服装問題がな」

「ヤマトの服では胸が苦しいですからね」

「うん。……え？ 試したことないよな？」

「あなたが眠っている間に。現代ではカレシャツという文化があるのでしょうか？」

「ん、っ!! ああ、あるけども……!」

「なぜ動搖しているのですか？」

「なんでもないです！」

おそらくモルガンは意味を分かつていない。思春期少年にそれを説明する気力もなく、熱くなつた顔をパタパタと手で扇いだ。

「ふうーー。で、その服どうしたの？」

「今あなたが着てます」

「ふにやつ!?」

まさかの制服のシャツでのチャレンジだった。たしかにボタンがあることを考えれば、こちらの方が試しやすいだろう。なぜかボタンが外れている箇所があつたのも、これで原因判明である。

しかし今はそれどころではない。再度動搖した大和に、モルガンが詰め寄っているから。

「ヤマト今良かつたのでもう一回」

「何言つてるの!?」

「私にもくるものがありましたから。もう一度お願ひしたいのです」「理由を聞いてるんじやなくて！」

おもちゃを見つけた子供のように、純粋な目でお願いしてくるモルガンを、大和は遅刻しちゃうからという理由の一点張りで強引に突破。逃げるように家を飛び出すのだった。

「……靈体化すればついていけますね」

閃いてしまった。

京坂大和が住まうのは、日本の地方都市の1つである冬木市。10年前には原因不明の大規模火災が発生し、数百人の死者を出した土地だ。今ではそれが冬木大災害と呼ばれ、その復興を遂げて今では活気づいている。

大和が通う学校は、その冬木市にある穂群原学園。そこの1年生である。なお家から学校までの所要時間は徒歩5分である。

「ギリギリセーフ！ つと、おはよう間桐」

「おはよう京坂くん。廊下と教室は走っちゃダメだよ」

「歩いてたら遅刻したよ」

「早めに来ないから。でも珍しいね。いつもは余裕を持って登校してくるのに」

「朝からドタバタしてたもので」

話しながら鞄の中にある荷物を引き出しの中へ。そうこうしていると、朝のH.R.の時間を告げるチャイムが鳴った。担任の先生はまだ来ない。毎週月曜日は数分遅れて来るのだ。

それを踏まえると、教室まで歩いてきてもよかつたのかも知れない。京坂は一時的に上着を脱ぎ、下敷きを団扇代わりに使う。

「ほえー。窓開けてもいいかな？」

「クラスのみんなは寒いと思うよ？」

「だよな」

今は冬である。教室に暖房があるわけでもない。室温 자체も少し低めだ。これなら上がっている体温も、1限目までには戻ることだろう。

横から新たに感じる風。左は窓で、そちらは閉めている。風は右からで、そちらは人工的なもの。生み出しているのはその席に座つている生徒。先程から会話している間桐桜が、こちらも下敷きを使つて扇いでくれている。

「先生が来るまでね」

「いや助かるよ。ありがとう」

何人かから羨ましそうな視線と哀れみの視線が送られてくるが、それらはすべて無視である。

間桐桜は、この学園の中でも指折りの人気を誇る少女だ。顔がよく穏やかな性格。これだけでも男子から人気が出るというのに、制服の上からでも分かる豊かな胸。夏服の期間にどれだけの男子から視線を集めたことか。

学年単位では「間桐桜と同じクラス」という点で羨ましがられ、クラス単位では「間桐桜の近くの席」という点で羨ましがられる。今月の席替えで大和は彼女の隣になつたので、男子からブーリングが送られた。

ではでは、「人気がある＝モテる」なのかというとそうでもない。なにせ、1つ上の学年にいる「穂群原のブラウニー」先輩が、間桐とほぼ毎朝登校しているからだ。さらには、彼女が通い妻らしき行動をしていることも判明している。

「これもう付き合つてんだろ」と周囲が判断するのは当然のことだ。つまり、哀れみの視線を送る者は、ブラウニー先輩と間桐桜が付き合っている派。羨望の視線を送る者は、まだ付き合っていないと信じ

ている派なのだ。

(まだ付き合つてないとしたら、外堀から埋めてんだよな間桐)

あのお人好しが服を着て歩いているような先輩のことだ。ここから詰め方次第ではくつつくだろう。

「(最後列の窓際。これが主人公ポジというものですか)」

「!」

脳内に直接響く声に大和は戦慄した。滝のように冷や汗が流れ始め、「扇ぐのが弱かったかな」と勘違いした間桐が必死に下敷きを扇ぎだした。そこまでされると寒いと言うか悩むと、担任教諭が登場。間桐も扇ぐのを止めて、前方へと向き直る。大和も上着たる学ランを着た。

「(もしかしてすぐ側にいる?)」

「(はい。靈体化しているので誰にも気づかれませんよ)」

「(安心したけどそうじゃない……!)」

この場で現界でもされようものなら、大騒ぎになる。同行されたいと思うと、大和の心中は穏やかではないが。主に緊張で。

「(家の戸締まりはしてる?)」

「(鍵は開いてますが、結界は張つてあります。賊が忍び込もうものなら炎上しますよ)」

「(アパートまで焼けるよな!)」

自身の部屋は結界で守られても、他の部屋がそうじやない。大和はそのセキュリティを取り下げてもらい、もつと穏やかなものへと変えてもらう。

あとは、こちらでの心配ぐらいか。

「(現界はしないでくれよ)」

「(仕方ありませんね。……人目がないところなら)」

そのチャンスがあるとすれば昼休みだろうか。だが今日は弁当を用意していない。ひとり暮らしが突然ふたり暮らしになつたのだから、冷蔵庫の中身がほぼなくなっているのだ。お昼を学食で済ませて、帰りに買い出しに行くつもりである。

(持ち帰り形式にして屋上に行けばいいか)

あそこは人の立ち入りが禁止されている。鍵も職員室で保管されていて、その使用許可が下りることは滅多にない。卒業写真を撮るときには許されるくらいだ。

だが魔術を使つてピッキングしてしまえばどうということもない。屋上に入れるし、帰るときも閉め忘れなければ無問題。あとは行きど帰りの人目を注意するだけ。

(あああとは、放課後に先輩に相談に行つとかないとな)

担任の話を聞き流しながら、チラリと横を見る。姿勢正しく、眞面目に聞いている姿は優等生のそれ。

彼女に相談ができれば最適だったのだろうが、生憎とそれをするわけにもいかない。モルガンの説明をいつたいどうしたらいいのか分からぬし、変な奴だと思われるのも面白くないから。

「待たせちまつて悪いな。一成に今朝頼まれてたやつだから先に修理しどきたくて」

「いえいえ、急にお願いしたのはこちらなので」

「それで、俺にどんな相談なんだ?」

そんなこんなで放課後。

大和は生徒会室へと足を運び、「穂群原のブラウニー」と衛宮士郎に会っていた。彼は頼まれれば断らないお人好し。家事やら家電の修理やら、便利なスキルも多い人物だ。元は弓道部に所属していたが、とある事情とその流れから退部している。

「ブラウニー先輩つて間桐と仲良しじゃないですか」「俺の名前のどこにブラウニーがあるのさ……」

「衛宮・ブラウニー・士郎でしょ?」

「ミドルネームを持つたことはないぞ」

「京坂。人の名前で遊ぶのは感心せんな」

「ああいや。別に本気で嫌つてわけじゃないんだ一成。いつもこんな感じだから」

「衛宮がそう言うのであればいいが……」

衛宮士郎がこの部屋にいる時、基本的にセットでいるのがこの学園の生徒会長、柳洞一成である。衛宮の料理によつて胃袋を掴まれた人物であり、嘘か本当か「衛宮の味噌汁なら毎日飲みたい」と言つたという噂がある。一部の女子の手により薄い本が作られた。

「話が逸れちまつたな。俺と桜はまあ、たしかに仲良くさせてもらつてるな。妹がいたらこんな感じかなつて時々思うよ」

「間桐も大変だな」

「桜がどうしたつて？」

「ああいえ。……衛宮先輩つて間桐と買い物とか行きます？」

「食材の買い出しなら手伝つてもらうことが多いな」

「服とかは？」

「服？ いや、それはないけど。女性の服がどうした」

「はっ！ まさか京坂はそちらの道に!?」

「そこに行くのは柳洞先輩じゃないですかね」

「スカートはたしかに脚周りがスースーするな。冬は寒そうだ」

眼鏡をクイッと上げながら言い放つた。

「え……？」

「冗談だ」

衛宮と大和が席を立つて後ずさる。

「冗談だと言つたろう。待て 距離を取るな私が悪かつた！」

軽い絶望に落とされたかのような顔をされでは、衛宮もそれ以上下がれない。冗談が分かりにくいでと文句を言いながら、彼は椅子に座り直した。柳洞からさらに1席開けて。

「京坂も座れよ。何かあれば俺が時間稼いでやるから」

「待て衛宮。さてはまだ疑つているな？」

「ははは。何を言つてるんだ一成」

「柳洞先輩はインテリな見た目しといて運動神経悪くないですからね。すぐ逃げられるようにしちります」

「(その時は私が彼を眠らせます)」

大和は静かに椅子に座り直した。柳洞から可能な限り離れた位置の椅子に。モルガンの「眠らせる」が怖いから。

「そもそも服って、男性用と女性用で違うじゃないですか。おもにフロント部分」

「ま、まあそうな」

「その手の話を生徒会長の前でするかね……」

「真剣な悩みなので見逃してください」

「真、剣……？」

事情を知らない者にとつては、ふざけているようにしか思えない。だが大和の目は真剣そのものだった。

「女性の胸つて個人差あるじゃないですか」

「桜の前振りはこれか……」

「そうです。胸でかい人つてやっぱそれ用のサイズを探さないとダメですよね？ 男だとほぼ服のサイズだけでいいんですけど、女性つて身長が同じでも……ってパターンあるし」

「そうなんじやないか？ 僕も知ってるわけじゃないけど」

「間桐と服を買いに行つたことはないんですけど？」

「まあな」

「えー。衛宮先輩なら1回くらいあると思つてたのに」「そう見えるか？」

「見えますよ。ね？ 柳洞先輩」

柳洞に話を振つてみるも、彼は念仏を唱えて集中していた。あまりダイレクトな話にはしていないので、それを話題に出すだけで防衛手段に入るようだ。

「衛宮×間桐は生徒間じや鉄板ですよ」

「否定するのも桜に悪いし……行動を改めるか？」

「それやると間桐が傷つく気がするのでこれまで通りで」

「そうだよな。固まつちまつたイメージは、そういうもんとして受け止めとくしかないか」

うまいこと距離を取るとかできなさそうな人物だ。間桐自身も聰い子である。昨日の今日で変化が起きてしまうと、確實に後日詰め寄られることになる。大和はそれを回避した。

「それにしても急にどうしたんだ京坂。お前さんひとり暮らしだろ

？」

「そうだったんですけどね。なんか急に住人が増えたもので。しかも持参した服の数が乏しいと来た。言語のこともありますし、中継役をやるつもりですけど、事前に把握できることはしどきたいじやないですか」

「殊勝な心掛けだな」

デジヤヴを感じたけど、衛宮はそれを胸の内に留めた。

「協力できることならしてやりたいが、その問題は俺も手伝えないからな……」

「衛宮先輩から間桐に聞いてくださいよ。胸でかい人はどこで服を買うのかって」

「あのな」

受け答えをしながら、衛宮は他の手がないか考える。困っているのは伝わっているから、可能な限り助力をしたいのだ。

ずっと話していると口も渴く。淹れておいたお茶を衛宮は啜った。

「もしくはこっちでもいいですよ」

「こつちつて？」

「何カップなのか

「ブハッ！」

啜つたお茶を吹き出した。柳洞は黙つてポケットからハンカチを取り出し、お茶がかかった場所を拭いた。

「わ、悪い一成……」

「構わん。京坂が悪い」

「あのな京坂。いくら仲がいいからって、全部を知ってるわけじゃないんだ。ましてやプライバシーなんて」

「藤村先生なら知つてそう」

「そつちも知らな……待てまさか！」

「衛宮先輩ありがとうございました！ 相談を聞いてもらえただけでも良かつたです！ あとは何とかします！」

「待て京坂！」

生徒会室を出て颯爽と職員室に向かう大和を、衛宮が焦つた顔で追

いかける。衛宮士郎と京坂大和は知り合つてまだ半年。あくまでこの学園の先輩と後輩。だが、ひとり暮らしをしている者同士話が合つた。苦労話から何まで話ができるし、どちらも互いの家に遊びに行つたこともある。

だからこそよく知っている京坂大和が藤村大河に話を振るとさのやり口を。

「藤村先生 しますか！」

一
行
下

息を上からせた状態で生徒2人が職員室へ、扉を開けるのに勢いをつけ過ぎたせいで、派手な音も出てしまつた。何事かと職員たちはそちらに目を向け、呼ばれた藤村はため息をつきながら立ち上がる。た。

一
二

「先生に聞きたい」とかあります。徳宮先輩が知らないなら藤村先

「しろ……衛宮くんが知らなくて私の知つてること?」

11

顔を引きつらせながら後輩を退出させようとする先輩。それに抗つて職員室に留まろうとする後輩。この構図と話の内容がどうにも噛み合わない気がして、藤村は謎掛けをされている気分になる。「大したことじやないなら今言つちやいなさい。わからなかつたらわからんないつて言うから」

「藤村先生ならそう言つてくれると思つてました！」

生徒思いだなあと付け足しておいて、藤村の機嫌を良くしておく。これで衛宮の制止は利かない。あとはアクセルを踏むだけ。

面白がつて耳を傾けていた教員たちが一斉に仕事に戻った。音楽

プレイヤーを持つている人たちはイヤホンやヘッドホンを装着。中には職員室から退出する人も。

「葛木先生」

「なんだ藤村先生」

「私の机の一番上の引き出しにあるものを取ってください」

一部の生徒からは鉄仮面と呼ばれる葛木宗一郎は、藤村に言われたとおり中に入つていたものを取つてそれを手渡す。

藤村はそれを手に打ち付けて鳴らしながら、にこにこと笑顔を浮かべて京坂と衛宮に向き直つた。目は一切笑つていなが。

「教師の私が生徒のプライバシーを流すわけないじゃなくい。しかもデリカシーが皆無だし」

「衛宮先輩が知らなかつたもので。藤村先生なら知つてるかと。てか知つてるんですね」

「ふふつ。ふふふふふ。あなた達、ちょーっと廊下に出ましようね」「え、俺まで!? なんでさ!」

「当然よ士郎。桜ちゃんを守れないので正義の味方は名乗れないでしょ」

「うぐつ……」

とぼとぼと衛宮が廊下に出て、京坂は藤村にぎるぎると引きずられて外へ。職員室の扉がピシヤリと閉まり、その数秒後。藤村特性ハリセンが綺麗な音を鳴らすのだつた。

「これはオフレコなんだけど、桜ちゃんつてEカツプなんだつて！」

「おい教師」

その夜。モルガンにカツプとは何かと聞かれた京坂は衛宮に説明を投げつけた。

3話目 モルガンとお出かけ①

通販で買った服が届き、それを着たモルガンが部屋の中でぐるりと1回転。軽く身体を動かし、その着心地を確かめる。

服装自体はいたつてシンプルだ。サーヴァントとしての服装を参考に、足首まで丈のあるスカートは黒色。シャツは白色にして、その上からカーディガンを羽織っている。髪型はポニーテールにして、髪を束ねるのはおなじみ黒のリボン。

「悪くはないですね。実物を見ずに買うのはどうかと思いましたが、サイズも特に問題ないです」

「ならよかつた。これでモルガンも外出できるな」

「そうですね。胸周りが少々……窮屈に感じますが、そういうものでしたね」

「え？…………つ、はい……そうです」

「？なぜ照れているのですか？」

「追及はしないでください」

言葉にするのも躊躇われる。ましてやそれを、自身の名義で買ったとなれば秘密にもしたい。できれば記憶から消したい。しかも、本人と一緒に買ったという事実が、少年の心にグサリと刺さっていた。刺激が強過ぎるどころじゃない。

「他にも服は買うつもりだけど、それは今度から直接店で買えるし、好きなの選んでいいよ。……予算は守ってほしいけど」

「資金が少ないのでしたね」

「うぐつ！…………はい」

「ご安心をヤマト。私に考えがあります」

「考え？ 強盗はやめてよ？」

「なぜ私が賊の真似事をするのですか」

「ごめんなさい」

心底嫌だったようで、ガチトーンで言われた。冗談でもそれに近いことは言わないようにして、大和は固く誓う。

「資金のやりくりなら心得があります。為政者たる者、自分の懐事情は豊かにするのが最低限の仕事です」

「最低限が早速難しいような……」

「それができぬ者が上に立つてどうするのですか？」

「返す言葉もございません」

歴史を振り返れば、それができていなかつたとされる諸侯や王がゴロゴロいたのだが、それを言つても彼女は鼻で笑つて一蹴するのだろう。そういう者が治めるから滅ぶのだと。

大和の資金難の原因はモルガンなのだが。モルガンもまた、それを理解しているから打開策を打ち出す。

「働く気？」

「私はヒトを使う立場であつて使われる立場ではないです」

「だよね」

「それをしなくても資金の増やし方はあるでしょう？」

「……ギヤンブル……」

「いいのですか？ 私がやるとすべて当ててしまりますよ？」

「絶対やらないで」

「はい」

そんなことが起きてしまうと、全国でのニュースで報道されてしまうし、警察が動いて不正がなかつたかの調査も始まりかねない。いろんな意味で嫌だつた。

モルガンはそんな賭け事に手を出さない。大和の意向を汲んで、騒がれずに済むやり方で安定的に収入を得るつもりだ。

「株をやります」

「株もギヤンブル性あるよな!?」

「それは素人がやるからです。ご安心を、私なら外しません」

「……高校生つて株買えたつけ？」

「え？」

戸籍上では存在しない。それがモルガンたちサーヴァントだ。買いい物程度ならまだしも、契約を交わすようなやり取りではボロが出る。そうなると、やはり名義は大和のものを扱うしかない。だが、高

校生で株に手を出せるのかを、大和もモルガンも把握していなかつた。（高校生でも可能である）

話は一旦保留となり、気を取り直して外出。2人並んで町中を歩くのは、なんだかんだで初めてだ。なんとなくむず痒くて落ち着かない気持ちを、大和は考え方をすることで抑え込む。

たとえば、服を買って外出できるようにしたはいいが、1つ達成するとすぐにその次に出てくる問題とか。

「私のファッショń……ですか？」

「うん。女性つて鞄とか小物も含めてファッショńらしいし。ほら、あそこの人とか」

大和が指を差した方向では、大学生くらいの女性が友人たちと集まっていた。見ればたしかにそれぞれ小物を持っていて、アクセサリーを付けている者もいる。

モルガンはそれを一瞥だけして、興味を示さなかつたのかすぐに目を逸らした。

「私は気にしませんよヤマト。買い物程度なら、あなたが今持つているマイバッグがあれば十分ですし」

「いやでも財布とか」

「それもそこに入れればよいでしょう？　たとえあなたが学校に行つていようと、そのバッグは家に置いていくのですから。……そうですね。強いて言えば、その時用の財布が1つあればよいですね」

「なるほど。モルガンのやり方は無駄がないよな。合理主義つてやつ？」

「ええ。ですが、私の統治下であろうと娯楽は認めますよ。私の支配が揺るがない程度なら」

揺らぐなら、それを徹底的に破壊するだろう。冷たい目で、薄つすらと笑いながらそれを言う彼女に、大和は静かに納得した。彼女の人がなりを少し分かつた気がするから。

そんな大和にモルガンは半歩近づき、覗き込むように顔を近づけて告げる。

「ですから、あなたも他の女性やサーヴァントに靡かないように。ヤ

マトは私のマスター夫なのですから

「う、うん。それはもちろん」

顔を近づけられて照れた大和は、こくこくと頷きながら僅かに距離を開けた。それを勘違い——するわけがないが——したことにして、モルガンは少年の腕を掴んで引き寄せる。腕を絡ませれば、少年の腕に彼女の柔らかな体が触れる。少年はそれで顔を赤くし、身体を強張らせた。

「ふふつ、愛らしいですね」

「かんべんしてください」

少年の素直なギブアップ。そこが限度だと分かつてているモルガンは、腕を離して少し距離を取つた。それは最初よりも近い距離で、肩が触れるか触れないか程度。

大和はそれに気づけないほどテンパつていて、モルガンはそれを見越してこうしている。作戦通り。

「ヤマト。あなたに頼みたいことがあります」

「頼みたいこと?」

先程までの緊張も全て追いやり、大和はモルガンの話に耳を傾ける。その復帰の速さをモルガンは評価しているし、こういう時は面白くないとも思つてている。

「外出中や他に人がいる時、私の名前は伏せておいてください」「あーなるほど。それならなんて呼べばいい? ヴィヴィアン?」

「いえ、それでは隠しきれません」

クラス名を提案しないのは、大和がモルガンのことをそれで呼びたくないから。美しい女性だと思っていて、そんな人をバーサーカーなどどうして呼べようか。会話ができないレベルで狂っていたら、あるいはそう呼んだかもしれないが。

「トネリコとお呼びください」

「トネリコ?」

「はい。その名前なら真名にたどり着けません。もつとも、顔でバレることはあるかもせんが。顔バレというやつです」

「覚えたての言葉を使いたがるのかわいいな」

しかも軽くドヤ顔も入れているのだ。かわいいと思うのは仕方ない。普段の凜々しい姿とのギャップが強い。

かわいいと言われたモルガン本人は、きよとんと目を丸くしていった。そんな褒め方をされたのは、記憶にない。

「……ヤマトほどではありませんよ」

「うーんすごい複雑」

かわいいと言われるよりかっこいいと言われたい。そんな気持ちがあるので、モルガンにとってはその葛藤すらかわいらしく見える。まだまだ幼いと思えてくる。

「今日は買うものが多いのでしょうか？ 早く行きますよ」

先を歩いた。ほんのりと熱くなつた頬は、大和には見えない。

「先に服屋でもいいけど」

「それは後日で構いません。荷物が増えては大変でしょうから」魔術の使用を控えているのであればなおさらだ。

「……それなら尚更、服を先に買おう」

「ヤマト？」

「極力不便な思いはさせたくないから」

「……まつたくあなたは……」

不便を感じたことはないし、不憫を感じさせているのは自分だ。召喚されるはずのない存在を召喚して、本来なら不要な警戒をさせてい る。そうだと いうのに、大和はその事に何も不満を示さない。文句を言わない。それよりも、モルガンの生活を優先して気を配っている。その事に別の意図がないことは、モルガンの持つ『妖精眼』で分かつていた。他人に冗談を言つたとしても、モルGANにだけは誠実である。心の機微を隠そうとするのは、愛嬌として見逃すが。

本音と建前を乱立しまくる人間たちは、『妖精眼』を持つモルGANにとって「気持ち悪い存在」として映る。けれど、すぐにそういうものだと認知したから、期待値だつて存在しない。ゼロはゼロだ。

「ヤマトがそうしたいのなら許しましょう。ですが夕飯はどうするのですか？」

大和は少し、特別だ。

「藤村先生が、時間ある時に遊びに来いって言つてたからそれで解決。いつでもいいって言つてたし」

「あの指導者の家ですか？」

モルガンは僅かに警戒心を生み、

「いや衛宮先輩の家」

自覚する前にそれを霧散させた。

「あの者の家に？ 呼んだのはフジムラですよね？ まさか同じ家で生活を？」

「先生は先生の家があるよ。細かいことは知らないけど、衛宮先輩が弟分なんだってさ。独り身になつた先輩の後見人つて立ち位置らしいよ」

「そういうことですか」

最低限の情報を得たモルガンは、それならいいと賛同を示した。先に連絡を済ませておこうという話になり、大和は携帯電話で衛宮に連絡を済ませる。

「先輩も歓迎だってさ。なんか居候ができるて、その人の紹介もしときたかつたとかなんとか」

「居候？」

「衛宮先輩の家でかいしな。部屋ならわりと余つてるだろうし。……そのうちホームステイ先とかになりそう」

「ヤマトは広い家に憧れでも？」

「ずっとそこに住みたいかと言われると微妙だけど、ちょっとくらいは住んでみたいかな」

「そうですか」

ふむと唸つてモルガンが思慮にふける。その様子に何かを察した大和が、今の生活でも満足していると慌てて付け加えた。

「今度城を建てます」

「建てなくていい！」

「一晩で建てられます」

「人の話を聞いてる!?」

「……すごいの建てますよ?」

「うつ……、せめて高校卒業してからでお願ひします」

「卒業……あと2年半ほどですか。すぐですね」

体感がバグつていると思つたが、彼女の生きた年齢を思い出せば、そんな感覚にもなろうと想像がつく。

大和にとつては長い期間で。モルガンにとつては瞬きの間。
その感覚の違いは、けれど何かに支障をきたすわけでもない。その違いを少し寂しく思うくらいだ。

それを隠すように大和は話題を服に変えた。これから買うのだから、その選択も自然なものに見える。

「トネリコはどういう服装が好み？」

それを隠せるわけもなく、けれど知らないフリをしてモルガンもその話題に乗る。

「特に好みはありませんが、そうですね。あまり派手過ぎないものが好みいですね」

「つてなると、今の服もわりと良さげ？」

「はい。なにせ自分で選んだ服ですからね」

「言われてみればたしかに！」

女性用のを買つてしまつたという衝撃ばかり氣にして、そのことがすっかり抜け落ちていたらしい。数ある中から、本人が選んで決めた服なのだ。そりや好みの服装にもなる。

「ドレス調のものもいいですが、それはヤマトが困るのでしよう？」

「それを着て参加するパーティーがあればいいけどね。そういうのないし」

「コスプレに見えてくると。遺憾です」

「そうなつちゃつてるんで」

「そうこう話していれば、目的地に到着した。

モルガンは当然ながら初見であり、大和も慣れないなりに誘導してレディースコーナーへ。どういうものがあるのか、一通り見てから考えることとなり、モルガンと共に店内を回つていく。男一人で残るなど、大和には耐えられない。鋼の意志はこの手のことに無力なようだ。

「柔らかな色合いのものが多いですね」

「色合いで女性らしさつてのも出るからね」

「言わんとすることは分かりますが……」うまで色の近いものばかりあると呆れてしまいます」

「幅広い色というより、極端だもんな。店は他にもあるから、ここじゃなくてもいいぞ」

「では他の店も見ましようか」

そう言つて店を出ようとすると、ちょうどビレーディースコーナーの端で大和は知り合いと顔を突き合わせてしまつた。

それが知り合いだと認識した瞬間笑顔が固まり、ぎこちない動きになる。

「あらあなたこの前の」

「これはどうも寺と結婚された方」

「そんなものとはしてないわよ！ 宗一郎様ともまだだけど！ あなたこそ、とうとう女装癖に目覚めたのかしら」

「目覚めてねえよ！ 悪趣味キヤスターさん！」

「誰が悪趣味ですつて！ 客観的に見れば否定はできないけれど」

この女。真名はメディア。ギリシャ神話に登場する魔女の1人であり、大魔術師としても魔術界隈で名高い。クラスはキヤスターである。

当然ながら、モルガンにも分かることがある。

「（ヤマトこの女、サーヴァントですよ）」

「（え？ いやこの人はキヤスターさんで……キヤスターな
のか）」

4話目 モルガンとお出かけ②

キヤスター。それは聖杯戦争における7つのクラスのうちの1つ。セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、バーサーカー。そしてキヤスター。この7つのクラスに合わせて、それぞれ1騎ずつ英靈が召喚される。誰がどのクラスになるのか。それは基本的に逸話や伝承を元に決まっており、例外はバーサーカーだ。狂化させちゃえば誰だつてバーサーカーになる。お手軽だね！

その中でもキヤスターというのは、言うまでもなく魔術師がなるクラス。神話や逸話で魔術に長けていたとされる者がなるクラス。

「あらそちらの女性は？ どんな手で洗脳したの？」

「まるで『お前にパートナーができるはずがない』みたいな言い方だな」

「ごめんなさいね。そう言つたのよ」

「はーん？ 葛木先生に、キヤスターさんがイカれた服を買つてたとでも言つてやろうか」

「宗一郎様があなたの戯言を真に受けるわけがないでしょう」

絶対的な信頼を葛木に置いているメディア相手に、脅迫まがいの言葉は通じない。精神的に優位に立つていてるメディアは、手料理がうまくいったとき並の笑みを浮かべている。

そんな小さな諍いを一通り見届けたモルガンは、話を切るためにも会話に割つて入つた。

「彼は私が夫^{マスター}と認めた存在だ。あまり貶めないでもらおうか」

「……そう。これは失礼なことをしたわね」

夫つて階段をすっ飛ばし過ぎじゃないだろうか。そんな事を思いはしたが、大和の相手がそう言つたのなら受け入れるしかない。どんな相手であれ、パートナーができることは喜ばしいことだから。葛木宗一郎という男に運命を感じたメディアが、それを否定するわけにもいかない。

互いに買い物の途中ということもあり、後腐れのないように何度も

言葉を交して別れた。話していた場所も場所だつたため、他の客や店員にとつても困つたものだつただろう。

「あの者に何も仕掛けぬのですか？」

「必要ないでしょ。おれもトネリコも、聖杯が欲しいわけじやない。

だろ？」

「ええまあ。あれにかける願いなど、持ち合わせてはいませんから」何か1つでも挙げるとするなら、あの子の幸せだ。

「だから放置でいいわけ。それに、真っ昼間からドンパチするのもね」「夕方ですが？」

「……はい。あの……人が多い時にやるのは一つてやつです」

ファイーリングで話していたらツッコまれた。お笑いのようなツッコミではなく、冷静な間違いの指摘なので、指摘された大和は目を泳がせている。モルガンはそのことを気にも止めず、浮かんだ疑問を口にした。

「何時に目的地に着けばよいのでしょうか？」

「うん？　あー、遅くとも19時頃には着いといてほしいって話だから、ざつとあと2時間半ぐらいかな。移動時間とか考えれば、6時半には向かいたいね」

「早めの到着を心掛ける文化でしたか。とても好ましいですね」

「そう言つてもらえると嬉しいよ。この文化がない国の人たちにとつてこれは、拘束感があつて窮屈らしいから」

「ふむ……」

傍から見る分には、外野の視点であれば、それは素晴らしいものとして映るのだろう。時間を守るということは、それだけ相手との時間を重要視しているのだから。奉仕の精神に近いものとして、見えることもあるかもしれない。

だがその輪に入つたとしたら、意見は変わるだろう。時間を重要視すると、時間に追われることになるのだから。『個人』を重視する文化圏の人たちにとつて、それは異質だ。優先順位が狂つているのだから。

「人によつて捉え方は変わるだろうけどね。トネリコならどう思うら。

？」

「好ましいという評価は変わりません。時間という絶対的な概念。それによる統制の仕方は効率がよいですか？」

「そつか」

統治する者にとつて、分かりやすい基準というものは欲しくなるものだ。「何時から誰がどうする」という、この指示出しの仕方はスケジューリングにも役立つのだから。

もつとも、それはあくまで統治する立場であればの話。今のモルガンはサーヴァントであり、ブリテンの支配者ではないし、ましてやこの国の支配者でもない。やろうと思えば乗っ取ることなど容易いが、やるなら日本ではなくブリテンだ。

「さてと、トネリコが欲しがる服があればいいんだけど……。出発まで2時間しかないしな……」

「今日のところは、一着でも見繕つておけば十分です」

「え？」

「今日で何着も買う必要はありません。なにより、後日に回せば、またあなたとこうして出かけられるでしょう？」

「……」

ぽかんと口を開けて固まつた大和に、モルガンは僅かに頬を緩めて手を伸ばす。男の子らしい硬めの手を握つて、それを軽く引っ張れば、スイッチが入つたロボットのようにビクリと反応した。

硬直が解けようと、やつぱりまだ大和は呑み込めていない。なにせモルガンにとつて、自分のサーヴァントであることは退屈だと思つていたから。

「認めましょうヤマト」

それに気づいてはいないモルガンだが、彼女は大和の靄をひと思いに払拭した。

「私は思いの外、あなたとの時間を楽しんでいます」

「え……あ……。……つと……そ、それはよかつた。……うん」

「ですからヤマト」

握った手を、両手で包み込んで胸の高さにまで引き上げる。それ

を、大切なものを扱うように抱えて。彼の目を見つめながら紡いでいる。

「どうかあなたも楽しんで。それとも」

言葉を区切って、ちょっと意地悪っぽくしかける。

「私とでは楽しめませんか？」

「いやそんなことは――！」

思わず大声を出してしまい、大和は慌てて口を閉じた。その声に反應した人たちも、すぐに目を逸らしていく。

「ふふつ、そこまで慌てずともよいものを」

「誰のせいだと……」

「あなたが油断しただけですよ。私は、魔女ですから」

どこか誇らしげに言う彼女に、ぶつけるような言葉は出てこなかつた。彼女になら、騙されても嵌められてもいいと。不思議とそう思えたから。

そんな彼女が胸の内を明かしてくれたのだ。ならば自分も明かさないとフェアではない。

「正直に言うとさ」

「はい」

「戸惑いのほうが大きかつたんだ。突然の出来事だし、予想外のことばっかりだし」

「はい」

「でも不快感はないんだ。おれも、トネリコといいる時間が楽しいんだと思う。友達と遊ぶのとはまた違う感覺だけど。おれは……おれはこの時間も好きだ」

「……そうですか。では、これからもあなたの時間を私が支配しましょう」

包まれている手に軽く力を入れた。彼女の手を握り返すために。

内心の整理ができたことで、吹っ切れるものもあつたのだろう。彼の方からこのように動くことは、今までになかった。「包丁の使い方を教えるため」といった具合に、何かしらの理由がある時に触っていた。

けれど今は理由がない。その事にモルガンは、慈しみを込めて微笑む。まるで成長を喜ぶ母親、あるいは姉のように。

「それでは服を見繕いましょうか」

「そうだな」

片手は放して。片手は繫いだままで、モルガンは大和の隣に並んだ。指を彼の指の間に割り込ませ、絡めて握る。

さすがにこれには応えたようで、大和はビクリと反応を示し、さらには耳まで赤く染めるのだつた。

買い物を済ませたら2人は衛宮邸へ。何着かの試着を繰り返し、組み合わせも試し、モルガン自身が納得のいくものを無事に見つけることができた。

その最中、大和は毎回感想を求められ、初めてのシチュエーションに緊張しながら頭をフル回転。何度かやれば細かな部分も言えるようになり、そうなると初めの方に試した服装の再評価も求められた。

まだ16歳の少年にとつてそれは試練で、なんとか乗り越えた頃には気疲れしていた。その疲れも、モルガンのささやかな喜び顔を見れば吹つ飛んだが。

長い年月、ただ恐怖で支配を保ち続けた彼女は、満面の笑みのやり方を思い出せない。その笑顔を、浮かべることができない。そもそも、感情の起伏だって乏しい。いわゆる負の感情。そちらばかりだ。

「相変わらずでつかい屋敷」

「この建築様式は、この国独自のものでしたか」

「そうそう。今じや珍しい方だよ」

神社や寺、京都や鎌倉の町並み。そういった「貴重だから残そう」と定められた場所以外では、この様式をほとんど見ない。指定地域以外であれば、「旧くて危ないから建て替えようね」といった流れで姿を消している。

そんな中でも、衛宮邸は立派に残っていた。綻びを見つける方が難しいほどに、柱や屋根もしつかりしている。単純にこの建物の歴が短いだけだが、いつからあるのかを知らない者には、「立派に形を保つて

いるな」と思えるわけだ。

「この敷地面積も珍しいのですか？」

「まあね。これぐらいの大きさでこの辺りで知られてるのは、遠坂邸と間桐邸ぐらい。森を進んでいった所にある城は例外」

「城……ですか？」

「そう城。次の週末にでも見に行こうか」

予定を立てたところで、大和はインター ホンを押した。

『どうぞ』

機械越しにでも伝わる元気さ。その明るさと声に、大和はくすりと笑つて敷地の中に入る。敷地内に入るための門。それを抜けば広い庭と広い屋敷。離れには蔵もある。

「いらっしゃい！ ちょうどそろそろ来るんじゃないかなーって話してたところなのよー！ ってあれ？ その人は？ ……ははーん？」

「何1人で勝手に納得してるんですか藤村先生」

「べつに〜？ っていうか、学校の外じゃ先生じゃないの。オフだから先生って呼ばないでって言つたじゃない」

「間桐は先生付きで呼んでますよね？」

「桜ちゃんはいいのよ。そういう呼び分けに戸惑う子だから」

〔顎眞だ〕

細かいことは気にするなど高らかに言う藤村を見て、妙にテンション高いなと思つた大和はその理由に察しがついた。
この女性。すでに酒を飲んでいる。

衛宮なら止める気もするが、「1缶だけ」と言って押し切る姿も想像がつく。それでコレなのだろう。

「それでー。大和はいつの間に綺麗なガールフレンドを作っちゃつたのかしら〜ん？」

「かしらんつて……ん？ ガールフレンド？」

「違うとは言わせないわよー。だつて、恋人繋ぎしてるじゃない」

「…………つ?!」

「真っ赤になっちゃつてかつわいいー」

慌てて手を離そうとするも、モルガンがそれを許容しない。むしろさらに力を込めている。大和は驚愕してモルGANに視線を向け、離してほしいと目で訴えかける。

「恋人というのは違いますが、手を離す理由もないでしよう？」

「ううえ……」

「おおー。堂々としててかつこいいわね。大和も見習いなさい」「……なんか穎然としない……」

「藤ねえいつまで玄関で話してゐるのさ。上がつてもらわないと」「そうだつたそだつた！ごめんね私つてば盛り上がりつちやつて」「一週間禁酒で手を打ちます」

「あははそれは釣り合わないで——」

「おついいなそれ」

「冷蔵庫にあるお酒処分しどきりますね」

「——ちよつ!?」

間桐がリビングへと引っ込み、藤村が慌ててそれを追いかける。仕事後の楽しみを奪われるのは、何がなんでもやめさせたいようだ。「はあ。悪いな来てそういう騒がしくて」

「藤村先生のノリには慣れました」

「ははっ。そう言つてもらえると助かるよ。で、ええつと……」

衛宮が言葉を詰まらせ、困った様子で頬をぽりぽりと搔いた。その理由にすぐに思い当たつた大和は、モルGANを紹介しようとして未だに手を繋がれていることを思い出す。

衛宮が困つたのは、こちらも理由だつたようだ。

「あの……」

捨てられた子犬の如き目で見られ、モルGANもようやく手を離した。それが叶つたことはひとまず嬉しいけども、大和はどこか引っかかりも覚えた。繋ぎ続ける理由もないはずだから。

けれどそこは今は考えない。衛宮に紹介しないといけないのだから。もちろん自分ともう1人来ること自体は、先の電話で話している。

「電話で言つたうちのめつちや遠い親戚。トネリコさんです」

「ご紹介にあずかりましたトネリコです。此度は夕飯にご招待いただき感謝します」

「ああいや、これはご丁寧に。衛宮土郎です」

すっと衛宮は手を伸ばした。握手のためのそれを、モルガンは少し考えてから手を伸ばす。大和と繋いでいたのとは反対の手で。

衛宮はそれに疑問を抱かない。「こつちが利き手だつたか」ぐらいにしか思わない。そつち方面には相変わらず鈍い男である。

「客人ですかシロウ」

玄関から家に上がつてもらい、リビングへと案内しようとしたところで、ちょうどその人物と鉢合わせした。

凛々しい顔立ち。美しい金髪。エメラルドの双眸は真っ直ぐと衛宮たちを見ていた。

「ちょうどよかつた。こちらは電話で話した、しばらくうちに住むことになつた――」

彼女こそ、滅びに向かうブリテンの最後の栄光を守り続けた王。モルガンの異父姉妹――

「――セイバーだ。仲良くしてくれると助かる――
――アルトリア・ペンドラゴンである。」

5話目 モルガンと衛宮家

アルトリア・ペンドラゴン。それはかのアーサー王伝説にて登場するアーサーの名前だ。物語では男性として描かれているが、実は女性である。当時の世俗的にもアルトリアは男装して、アーサー王を名乗る他なかつた。そういう事情だ。

アーサー王伝説は、それに登場する騎士や魔女の物語も編纂した物語である。アーサー王の最後が変わつてしたり、マーリンのなんやかんや。ガウエインやトリスタンの物語に、モルガンだつてその都度役回りが変わつている。その結果、モルガンは三重人格だとされたり、アーサー王が死んだりと色々である。

「セイバー。こつちは俺の後輩の京坂大和と、その遠い親戚のトネリコさんだ」

「よろしくお願ひしますセイバーさん」

「ええ。よろしくお願ひします。ヤマト」

アルトリアが大和の名前を呼んだ瞬間、モルガンがピクリと眉を動かした。それをアルトリアは見逃さなかつたが、何がいけなかつたのかは見当がつかないらしい。彼女は観察するようにモルガンを見つめ、モルガンはそれに悠々と言葉で返す。

「私がどうかしましたか？ セイバー」

呼ぶときに、妙に力が籠つていた。セイバーは困惑し、けれど何も返さないわけにはいかないと口を開く。

「いえ……。どこかで会つたことがある気がしたので」

「私とあなたは初対面のはずですが？」

そうだなど大和はモルGANの隣りで同意した。なにせこのモルGANは、アーサー王の知るモルGANではないのだから。

つまりはアルトリアが汎人類史の英靈で、モルGANが異聞帶の英靈ということ。そうであるからこそ、モルGANの言う通り初対面なのである。

「そう、ですね。世界にはよく似た人物が3人いるという話をシロウ

から聞きました。おそらくそれなのでしよう。失礼しました」

「構いません。あとで少々、話をしてみたいですが」

モルガンの放つ重たい空氣に、大和と衛宮は顔を見合っていた。この2人は、仲良くできないのかも知れないと。そしてそれ以上に、今の空氣から逃げたかった。女の諍いに男の出番などないのだから。「え、えーっと。一応紹介もできたことだし、夕飯にするか」

「しろーー」

「……藤ねえもあんな調子だし」

「はい。ところでタイガはなぜ元気がないのですか?」

「桜に負けたんだろ」

「?」

唯一事情を知らないアルトリアは首を傾げ、衛宮に続いてリビングへ。それを見届けながら、大和はモルガンの様子を伺う。機嫌が悪い彼女を見るのは初めてだから。

「やつぱりセイバーさんは嫌い?」

「……いえ。汎人類史こちらの私はまだしも、私は彼女とは面識がありませんから。知識として知っているだけ。好きも嫌いもありません」

「そのわりになんか機嫌悪くない?」

「それはセイバーが……。いえ……。私たちもリビングに行きましょう。待たせると不審に思われますから」「……そうだな」

露骨なまでの黙秘。それを追及するのはよくないのだと、大和は感覚的に察した。何より、物事をはつきりと言うモルガンが伏せたのだ。それは突かれたくないことだろう。

(……なぜ……)

大和の後ろに続いて歩く。その背中を見つめながら、モルGANは自分の中のつづかりに戸惑っていた。
(なぜ私は……、私だけが彼の名前を呼びたいと、そう思うのでしよう。特にアルトリアには……)

それは京坂大和が自分の夫だから。真っ先に浮かんだのはその理由だが、どうにもこれはしつくりこない。答えのひつかりすらな

く、何も見えない深い靄の中を、手探りで小さな宝を探しているようだつた。

「冬場は冷え込むからな。京坂が来るつてのもあつて、今日は鍋にすることにした」

「鍋ですか。みんなでつつきながら食べられるし有りですね」「だろ?」

「先輩の料理ならなんだつて美味しいんですけどね!」

「それは言い過ぎだつて。俺もまだまだ半人前だ。今じや洋食は桜の方が上だからな」

「いえそんな。……先輩の教えが分かりやすいですから。私一人では上達なんて……」

「目標があると成長しやすいよなー」

間桐が衛宮から家事を教わり始めたのは、わりと近年である。その短な期間だけで成長し続け、洋食においては衛宮を抜いたのだ。元から向いていたものもあるかもしれないが、それだけの熱意がなければどのみち成長しなかつたはずだ。

「目標か。たしかにそれがあるとないとでは違うな」「そうそう——」

「食べさせたい相手がいるならなおさら」と続ける前に、間桐がつっこりと笑顔を浮かべて大和を見た。大和もそれで笑顔を固め、何事もなかつたように口を閉じる。

そんな会話を見守りながら、アルトリアと藤村がまだかまだかとそわそわしていた。早く食べたいらしい。特にアルトリアの視線が鍋の具材から微動だにしていない。衛宮家のエンゲル係数は大きく変動していることだろう。

「もう待てないわ！ セイバーちゃんとトネリコちゃんの来日を祝つて！。かんぱくい！」

慣れている衛宮、間桐、大和はそれに遅れることなくグラスを手に持つてコツンと当て合う。それに遅れたのがアルトリアとモルガンで、それぞれは隣にいる衛宮や大和と静かに乾杯した。

「ふはくく！ 麦茶が美味しい！」

「あ、今晚のお酒も取られたんですね藤村さん」

大和が藤村を先生呼びしない時、代わりにさん付けである。

「誰かさんのせいですね。でもいいのよ。私は麦茶でも酔える！」

「それもう狂人だよ」

「ヤマト」

「ん？」

「なべというものは、どういただくのですか？」

「ごめん説明が必要だつたな」

モルガンの過ごした世界に、鍋の存在がなかつたわけじゃない。同じような器はあつたし、それを活用していた時もあつた。けれどそれは主にシチューを作る時、あるいは魔術に纏わるもの。似て非なる文化なのだから、食べ方も違うかもしれない。

そこの確認を取るモルガンに、大和は鍋の説明をした。鍋の種類の話をすると長くなるので、今回は衛宮たちが用意したこれの食べ方だけ。といつても、難しいことは何らないのである。わいわい食べましょうというだけだ。

「そういうものですか」

「そういうものです。おれがトネリコの分も取るよ。どれがいい？」

「そうですね……。せつかくですから1つ1つ食べてみたいですね」「りょーかい。一気に取つても仕方ないし。……まずはこんなもんかな？」

「ありがとうございますヤマト」

「どういたしまして」

モルガンの分を取れば、今度は自分の分を取る。具材を取るために上げていた腰を下ろしたところで、大和は衛宮の視線に気づいて首を傾げた。

「どうしたんですかエミー先輩」

「誰がエミーだ。……いや。この前言語の問題がどうこうって言つてたからさ。思つてたより流暢に、というか完璧に話してたから驚いてな」

「ああ。おれも本人から不安だつて聞いてたんですけど、何も問題な

かつたですね」

「お箸の使い方も様になつてますね。セイバーさんもそうですが、海外では流行つてたりするんですか？」

「私は貴方方のを見て修得しました」

「器用だなセイバー……」

「私はヤマトに教わつて覚えましたね」

初めて使つた時はやりにくそだつたのに、次の食事の時には完璧に使いこなしていた。大和も驚嘆したものである。

「トネリコちゃんはどこ出身なの？」

「オークニーという島です」

「オークニー……うーん。聞いたのにごめんね。全ツ然分かんない。土郎はわかる？」

「俺も心当たりがないな……セイバーは？」

「オーケニーですか。……聞いたことがあるようないような」

考え込む間も口に食べ物が運ばれていく。特徴的なアホ毛がぴよこぴよこと左右に揺れ、食べ物を飲み込むと同時に萎れた。

「すみません。知つている気はするのですが、どうにも思い出せません」

「ん」

「たしかイギリスにある島、でしたよね？」

ブリテン島出身のアルトリアでも分からぬいか、と話が終わりそつなところで、間桐が記憶を遡りながら繋いだ。予想外の人物が正解を言い当てたことに、大和と衛宮は目を丸くした。

「桜知つてるのか？」

「テレビで見たことがあるという程度なので、詳しくは知らないんですけど……。中世以外にも、先史時代の遺跡が多く残つてるとかなんとか……」

「よくぞ存知で。言つてしまえば田舎、ということになりますが、その分残つているものもあります。そういう島です」

「海もきれいっぽいから行つてみたいな」

「波は穏やかではないですよ。ですが、ヤマトと里帰りするのも悪くないです」

仲いい人への地元紹介。衛宮とアルトリアにはそう見えたのだが、藤村と間桐には別の構図に見えた。

「桜ちゃん桜ちゃん。これもしかしてアレじゃない？」

「はい。京坂くんには失礼で意外ですけど、たぶんソレです」

「藤ねえと桜は何をコソコソしてるのさ」

「コソコソ何をしている！」

「コソコソお話をしてるのよ。ね～桜ちゃん」

「はい」

「うーん神経の図太い女ども」

「実は猫を被るのが苦手なのよね～」

猫を被るどころか、自由気ままな性格を鑑みれば猫そのものだ。相手をし続けると疲れることは目に見えていて、大和はそれ以上何も言わなかつた。衛宮もアルトリアとの会話に逃げている。

だがそこで見逃すような藤村ではない。話していた相手がいきなり黙ると、ちよつかいをかけたくなる。間桐談によると、衛宮や大和相手には特にその傾向が見られるとか。

「大和も、トネリコちゃんの故郷に行くときには、シャキッときなさい」

「別に今だつてネチネチしてませんが？」

「そういうことじやなくて。ほら、ご挨拶もあるでしょ？」

「ご挨拶つて……！」

ニヤアと笑う藤村に、間桐と衛宮はため息をついた。いくらなんでもそれは先走り過ぎだし、踏み込み過ぎてている。やはりしばらく禁酒させるのは、正解なのかも知れない。

「藤村さんいいんですか？」

「なにが？」

そんな藤村に大和は反撃した。

「たしか相手いないでしょ」

「どぎついストレートで。」

「ふつ。ふふふつ。ふふふふふ！」

殴られたようなリアクションを取った藤村は、顔を伏せた状態で壊

れたように笑った。反撃の内容がクリティカルヒットしたからかもしれない。

なにせ弟分である衛宮士郎には、彼を密かに好いている間桐桜がいるし、何やら関係良きげなアルトリアもいる。気にかけている生徒である京坂大和にも、いつの間にかモルガンがいた。

どちらも付き合っているわけではないが、この場で関係性で区切つていくと独り身なのは藤村大河だけなのだ。

「京坂くんちよーっと先生とお話ししようか？」

「学校外では先生じゃないとかいつも言つてなかつたですかね！」

ゆらりと距離を詰めてきた藤村が大和の肩をがつしりと掴む。その力の強さに大和は引き笑い。

「あなたがトネリコちゃんのご家族にあつた時に失礼を働くかないように、みーつちり教えないといけないでしょ？」

「間桐と言ひ藤村さんと言ひ笑顔が怖いなあ！」

「タイガ、でしたか。その必要はありません。私に家族はいないので」「え……」

さらりと流れた重い情報に藤村は固まり、大和の肩を離してぎこちなく周囲を一周した。衛宮も間桐もアルトリアも、失言をした藤村をジーツと見つめている。このことを知っていた大和だけは、視線を逸らしていた。

きつちり5秒。

ぎこちない動きで視線をモルガンへと移した藤村は、それをもう実際に鮮やかでキレのあるジャンピング土下座をした。

「大変失礼なことをいたしました!!」

「いえ……あの、ヤマト……。これは？」

初めて見る謝罪の仕方に困惑したモルガンは、隣にいる大和に説明を求めるのだつた。

「セイバー」

「どうされましたかトネリコ」

「今後ヤマトのことを名前で呼ばないようにならう」

「？」

「でないとあなたを、呪つてしまします」

「ええ……」

帰宅前にそんなやり取りがあつたとか。

6話目 モルガンと聖杯戦争——のお話

高校生のひとり暮らしで1LDKと聞けば、一般的には裕福な家庭だと思われるだろう。全国のひとり暮らし大学生の多くが、その事に羨ましがること間違いないし。

そのはずなのが、大和はそう思わない。仲のいい先輩こと衛宮士郎は屋敷暮らし。学校で有名人である遠坂凜も、広い家でひとり暮らしをしている。そのどちらの共通点も、身内の不幸なのだから下手に触れられない。もう1つは、どちらも魔術師であるということ。

遠坂といえば冬木のセカンドオーナー。魔術師としても名を知られるほど。聖杯戦争においては御三家の1つだ。対して衛宮は有名ではない。知る人ぞ知る、くらいのものだ。

「魔術師殺し。それが衛宮先輩を引き取った人の異名」

「分かりやすい異名ですね」

「魔術を扱う者としては異端で、現代兵器を平然とバンバン使う。まあ既に故人だから置いといて。そんな人だから資金の調達手段をいろいろ持つてたのかな。衛宮先輩にあの家と暮らしていくお金

を残せたくらいだし」

「その者がどうかされました？」

「その人は10年前の聖杯戦争に関わってる」

「ほう？」

「アインツベルンと関係を持つてたみたいで、アインツベルンは遠坂と並ぶ御三家の1つ。魔術師の戦いにジョーカーを送り込むつてやり方、ありそうでしょ？」

「そうですね。本気で勝ちに行くのなら、その者を取り込んで送り込むのは有効な手です。ですが、アインツベルンとやらの狙いは叶わなかつたと」

聖杯戦争は60年周期で行われていたとされる。だが、第四次聖杯戦争が10年前で、現在すでにサーヴァントは7騎召喚されている。その周期の乱れが示すことは。

「聖杯の不完全な顕現」

「10年前に起きた大災害も、それが原因だ」

「不完全な顕現による大災害ですか……。ヤマト、この土地の聖杯は真つ当なものではありませんね」

「やつぱり？」

「私が召喚されていることが、その証になります」

「そうかもしれないけど……、その言い回しは好きじゃないや」

聖杯戦争で英靈が召喚されるのは7騎までだ。7つのクラスに合わせて1つずつ。例外はエクストラクラスと呼ばれるルーラーであったり、アインツベルンが過去に召喚したアヴェンジャーだったり、魔術師であるキャスターが召喚する英靈だつたり受肉した英靈……例外が多い。

それはさておき、大和はモルガンの言葉に不満を感じた。彼女が言つたことは間違つていない。召喚されるはずのない異聞帯のサーキュアンントで、そもそも異聞帯というものは世界の剪定によつて消えていく幻想。どちらの意味でも、このモルガンの召喚はあり得ないのだ。

だが、それが起こつていることと、聖杯が真つ当ではないことが、イコールの関係になるのかは、まだ判断できない。

「聖杯というのは、もしも○ツクスではありません」

「どつからその知識得てるの？」

「あれは膨大な魔力の塊。それを魔術師が用いることで、できることが格段に増える。そういう意味での、万能の願望機なのです。ですから、使用者が願つたのであれば、その大災害とやらは勝者が引き起こしたものですね」

「……そうじゃないなら？ というか、不完全な顕現でスパンも10年つてことを考えたら、誰かが願つたわけではないよね？」

「はい。さらに調べないことには断定できませんが、こここの聖杯戦争は7騎だけではないのやもしそれません」

「それってどういう……」

「それについては今後次第です。それよりもヤマト。1人でここまで

調べていたのですね」

憶測で話を進めすぎては身動きが取りづらくなる。それを避けたモルガンの考えに大和も遅れて乗つかり、逸れた話題についていく。「（）の聖杯戦争について調べるのがおれの仕事だから。そのためには”家”から派遣させられたんだよね」

「それは何のために？」

「そこは知らない。”家”的雰囲気は合わなくて居心地悪かつたから、派遣されてよかつたよ」

家。大和はそういう言い方をしているが、それは一家という括りではなく、一族という単位である。言うなれば実家は本家みたいなものだ。広大な敷地を持ち、基本的に一族が丸ごとそこに暮らしている。当然建物も大きい。豪邸である。

大和が豪邸のような家にあまり住みたがらないのは、その辺りが関係していたりする。ただし、差別的な扱いや迫害を受けていたわけではない。そういうのは一切なかつた。

「あの”家”的魔術はおれが一番長けてるから、他の誰かが派遣されるわけがなかつたけど」

「そういうえば、ヤマトの魔術を私はまだ聞いていませんでしたね。汎用的で基礎的なものを扱えるのは知つていましたが。独自のものはまだ」

「まあ……人に見せられるものでもないし、使い勝手がいいわけでもないからね。使い道がピンポイントなんだよ」

「話さなくとも構いませんよ？」

「……うーん、ざつくりとした言い方でいい？」

「はい。無理に聞きたいわけでもありませんし」

「夢魔にほんの少し、似てる魔術だよ」

その単語にモルガンはピクリと反応したものの、瞳を閉じて一言

「そうですか」と言うだけだった。大和が夢魔というわけではない。それは分かりきつていることだから。魔術がちよつびり、夢魔に近いだけ。あの悪夢^{マーリン}とは違う。

「それが調査に役立つんだ。今回は……調べさせてくれたって表現が

適してるけど

「協力者ですか」

「協力者……って言つていいのかな。何か企んでそうなんだよなあの

麻婆大好き神父さん」

「……もしその者が、ヤマトを利用して何かを成そうというのなら、その時は私が対処しましょう」

「ははは、うん。情けない話だけど、その時はよろしく」

「情けなくなどありませんよ。ヤマトはマスターで私はサーヴァント。当然の在り方です」

それが道理だと理解はしていても、任せきつてしまふのも気が引けた。真っ当な魔術師であれば、そんなことはないのだろう。あつさりと割り切つて、それがお前の仕事だと言つて、前線に出させるのだろう。

それを躊躇う大和は、魔術師として未熟なのだ。たとえ一族で誰よりも長けていようとも。

「それよりもヤマト」

「ん？」

「マー・ボーというものは何ですか？」

「それか。麻婆っていうのは料理の1つだよ。麻婆茄子とか麻婆豆腐とか。他にも何個がある。しばらく食べてなかつたし、明日の夕飯に麻婆豆腐でも作るかな。モルガンはそれでもいいか？」

「構いません。あなたと食べるもののなら、なんだつて」

それは言い過ぎだろと大和が苦笑するが、モルガンはわりと本気でそう思つている。

今食べているグラタンだつてそう。そもそもサーヴァントは、食事を取る必要がないのだから。それでも吃るのは、大和が一緒だから。

「そいいえば、この前衛宮先輩の家に行つた時、セイバーさんと何か話してたみたいだけど何話してたんだ？」

「そのことですか。……大したことではありません。どういうわけか、彼女は私を正しく認知できていないので、そう思つただけで

す

「大したことでは？」

対面したというのに。異父とはいえ姉妹だ。顔を見ればわかる関係だ。認知した上で初対面だと振る舞う。それならまだ分かるが、正しく認知していないとはこれいかに。

モルガン自身が魔術で誤魔化したわけでもない。思い返せば、顔のよく似ているアルトリアとモルガンが同じ空間にいたのに、誰もそのことには触れなかつた。顔面風王結界（インビジブル・エア）である。

考えるほどに疑問が湧いていく中、モルガンは一旦流す。調査はするとして、認知がズレるのならありがたい。面倒事を避けやすい。

「アルトリアのことで、気になつたことがまだあるのですが」

「そうなの？ もしかして、あの体のどこにあれだけの食べ物が入つていくのかって話？」

「いえそちらではなく。聖剣の効力で不老となつた以上、あれはどれだけ食べようと変化が起きませんから」

「なるほど」

異次元の腹袋は、そんな便利な機能で守られていたらしい。不老でも太りはするんじやねと思わなくはないが、そもそもがサーヴァントだ。宝具などによる体の変化があつたとしても、食事1つで変化が起きることはない。その理論でいくと、モルガンも大食漢になれるわけなのだが、それをされると家計が厳しくなるので大和は言及を避けた。

「私が思つたのは、アルトリアのアホ毛についてです」

「どこ気にしてんだよ」

「ヤマトは気にならなかつたのですか？ あのアホ毛。アホ毛なのに器用に動いていましたよ」

「髪の毛を動かす術でも身につけたのかな。なんの役に立つか知らんけど」

「私は思いました」

「アホ毛ほしいとか言わないでよ」

「言いませんが？」

違つたらしい。冷たい目をされた。

「あのアホ毛、着脱可能なのでは？」

「何言つてんの？　え、何言つてんの？」

なぜさも確証があるような調子でそんな事を言うのか。

さつきまでの眞面目な話と空氣もどこへやら。されどモルガンは真剣だ。真剣に、アホ毛のことを考えている。實に天才アホらしい。

「私の配下には、角を抜くことで本能を溢れ出させる者がいます。それに近い何かが、あのアホ毛にはあるのではないかと」

「いやモルガンの眼を疑つてるわけじゃないけどさ。セイバーは騎士王でしょ？　アーサー王にそんな伝承なかつたと思うんだけど」

「そうなのです。ですが、……それでは私が感じたものはいつたい……」

「頭の片隅にでも入れておこう。さつきも言つたけど、モルガンの眼を疑つてるわけじゃないんだ。モルGANにしか見えないものがある。それが時には、おれにとつて突拍子のないことに思えるだけ」

モルGANの持つスキルの1つが『妖精眼』だ。人には見えないもの、本音と建前だつたり、そのさらに根幹部分が見えるもの。

それを持つモルGANが言うのだ。あのアホ毛に何かあるのだろう。アホ毛なのに。

「ええ。ヤマト、今度にでも、アルトリアのアホ毛を抜いてみます」

「アホ毛を片隅に入れようつて話じゃないんだわー！」

モルGANをアホ毛の話から離れさせるのに、20分を要した。

7話目 モルガンとアインツベルン

冬木市にて行われる聖杯戦争。その御三家と呼ばれるうちの1つ。それがアインツベルンであり、彼らは遠坂や間桐と違つて基本的に日本にいない。冬になれば辺り一面が真っ白になるような、そんな白銀の雪の世界に居城を構え、聖杯戦争の時期になれば代表を送り込む。それが10年前であれば、雇われた正義の味方衛宮切嗣と、その妻でありホムンクルスでもあるアイリスフイール・フォン・アインツベルンだ。

その2人の間には1人の娘がおり、その名をイリヤスフイール・フォン・アインツベルン。第五次聖杯戦争に参加する魔術師の中では、一線を画す存在。マスターとしても、誰よりも——黒桜は知りません——優れている。

「リズ、シロウをここに連れてきて」

「誘拐でいい?」

「んー。抵抗するなら許可するわ」

「許可しないでくださいイリヤ様! リーゼリット! あなたもそんなことすぐに口にしない!」

「セラうるさい!」

「うるさ……!? それはあなた達が——!」

そんなイリヤなのだが、ホムンクルスと人間のハーフだ。本家の者たちによつて体も調整され、魔術師として優れている代わりに、体の成長は止まっている。本当なら衛宮士郎よりも年上なのだが、今の彼女の見た目は高く見積もつて中学生。妥当なのが小学校高学年というものの。

その彼女の使用人なのが、こちらもホムンクルス。口煩い母親のような姉のような、そんな存在がセラ。対象的に軽い言動が目立つ方が、リーゼリットである。セラはイリヤの教育係であり、リーゼリットはイリヤの護衛役だ。どちらもイリヤが大好きである。

「じゃあセラがシロウを連れてきて」

「はい!? なぜ私がそのようなことを……!」

「穩便なやり方がいいなら、セラのやり方でやればいいでしょ? シロウなら絶対話し合いができるし」

「それは……そういうなのでしようが……」

「じゃあよろしくねセラ」

「……はい」

小悪魔の笑みと共に押し切られ、セラはがつくりと肩を落とす。そんなセラを一瞥したイリヤは、弾かれるように窓の外に視線を向けた。今いる城だけでなく、周囲の森さえも範囲にした結界。そこに反応があつたからであり、セラとリーゼリットも意識を切り替える。

「……ああ。セラ。外に出る時にバーサーカーも連れていきなさい」

「バーサーカーを、ですか?」

肩の力を抜いてやれやれと首を振った主人の言動に、セラは戸惑いを顕にする。イリヤのその反応は、「大したものでもない」と判断した時のもの。しかしそれなら、自身のサーヴァントであるバーサーカーを、ギリシャの大英雄たるヘラクレスを連れて行けとは言わない。

「そう。そつちの方がいいから。シロウを連れてくるのは違う日にしてましょう」

「え?」

「イリヤ?」

「退屈な時間を潰せそうになつたから、今日はいいの」

180度意見が変わつたものの、イリヤは主人だ。セラとしても、衛宮士郎を迎えて行かなくていいのは万々歳である。ホムンクルスだからこそなのか、彼女は人間が好きじやないから。そう思つていたのに……。

「あなたですか……京坂大和……」

「歓迎されてないね」

「あなたを客人として扱うかどうか……。判断が難しいので」

「セラさんつて、衛宮先輩と話す時より言葉柔らかいのに遠回しに失礼だよね」

「彼は今関係ないでしよう」

「これがツンデレというものですか」

「誰がツンデレですか誰が！ つと失礼しました。私はイリヤ様に仕えるメイドのセラと申します。あなた様のお名前を伺つてもよろしいですか？」

「ええ。私の名はトネリコ。今日はヤマトに頼んでこちらに来ました。事前の連絡もなく訪れたことにお詫びを」

メイドの宿命なのかセラの性質なのか。彼女は目の前にいる人物が、人の上に立つ者であることを直感的に理解した。そして礼節を弁えているということも。となれば、今回のもやはり大和が原因である。前回もふらふらと音沙汰なく訪れた。

「今日は何の用ですか京坂大和」

「名前の発音よくなつてゐるな。練習でもしました？」

「していません。衛宮士郎で慣れただけです」

「おれと先輩の名前似てないんだけな……。用事らしい用事はないんだ。寄つただけ」

「軽い気持ちで寄るような場所ではないでしょ……。位置からしても」

それはそうだ。大和の家から近いわけでもなく、この周囲に道路が整備されているわけでもない。車で森の近くまで行けたとしても、そこからここまで長い距離を歩かないといけない。明らかに寄り道の距離ではないのだ。

「■ ■ ■ ■ ■ ■」

「お、バーサーカーさんだ」

「バーサーカーというわりに、理性があるようですね」

会話が成立するバーサーカーの発言である。

「■ ■ ■ ■ ■ ■」

「寄り道だけど、イリヤさんは招く気なのかな」

「……その通りですが京坂大和。あなた今バーサーカーと会話していることは分からぬません？」

「ニュアンスが分かるぐらいだよ。イリヤさんほどは、バーサーカーのことは分からぬ」

「そうですか。いえそれでも十分おかしなことですが」

バーサーカーはいつも無言だ。マスターであるイリヤに対しても、短な声が漏れたり、行動で反応を示すことが多いというのに。今のはある種異常な現象だ。

呆れるセラをよそに、大和は持ってきた鞄の中をゴソゴソと漁る。はじめからここに寄るつもりだったのだから、手土産くらいは持参している。そのうちの1つを渡す相手が、巨岩のような肉体を持つ大英雄ヘラクレス。彼は狂化していることもあって、好きなものや嫌いなものがない。

そんな彼へのお土産とは。

「はいエネループ」

「は？」

「12本入りを買つてきたから、それでしばらくは持つでしょ」

「■■」

「は？……え、あの……バーサーカー？」

男の友情と言わんばかりの拳の重ね合い。モルガンは何も知らないのだから成り行きを見守るだけで、存在は違えど共にイリヤに忠誠を誓う者同士であるセラは、何も呑み込めない。

「どうかしたセラさん？ もしかしておれ何かやつちやいました？」

「なぜでしよう。無性に腹が立ちます」

ぐつと堪えているセラの視界には、エネループを手に入れたことに喜んでいる——ようく見える——ヘラクレスの姿も。

「ギュつて握つてるけど、あれ握り潰されないかな……」

「大丈夫ですよヤマト。そうしない程度の理性はあるようですから」「ならよかつた」

「はあ。そろそろご案内させていただきます。イリヤ様の下へ戻りますよバーサーカー」

仕事モードになれば何も恐れる必要がない。冷静に、肅々とやることをこなせばいい。

仕事人として見事に意識を切り替えたセラは、大和とモルガンを先導して城の中へ。バーサーカーもそれについて行き……入り口で体

を引っ掛けた。デカ過ぎて通れないらしい。

「■■■一ーー!!」

「あなたは靈体化しなさい!!」

「■■一!!」

「壊しちゃダメよ、バーサーカー」

壁を殴り壊そうとするヘラクレスを、セラは慌てて止める。それを拒みそうだったヘラクレスも、自身のマスターたるイリヤが現れたことで大人しくなつた。けれどもまだ靈体化はしない。イリヤにエネルギーを渡していないから。

「1週間ぶりかしら、ヤマト」

モルガンの視線が鋭利な刃と化す。それだけでなんとなく見当をつけたイリヤは、面倒臭そうに半眼になり、ひとまずヘラクレスの下へ。彼が右手だけを城内に伸ばしているから。

「余裕ないのね」

「……」

すれ違いざまにモルガンにだけ聞こえるように囁く。彼女の反応は待たずに、イリヤはヘラクレスの手の前まで歩いた。彼女がそこまで来ると、ヘラクレスも握っていたその手を開いていく。

その手の中にあるのは、当然ながら先程もらつたエネルギー。それはヘラクレスが、「はじめてのおつかい」で達成できなかつた買い物。なお大和は後でセラに請求するつもりでいる。領収書もちゃんとアインツベルン名義である。

「……ふふつ、やつと達成できたのね。偉いわバーサーカー。ありがとう」

イリヤのその言葉を受け、バーサーカーもようやく靈体化した。

「なんで来たのかしら？ しかもあなた達、飛んできたわよね？」

「ええ。ヤマトは浮遊ができるないので、それならば空というものを味わつてもらおうかと」

「それができるだけでもあなたの技量が覗えるわね。しかも転移まで」

「それをすべて把握しているあなたも、並の魔術師ではないようです

が？」

「そう。素直に受け取つておくわ」

静かに牽制し合う2人から離れた位置で、それをハラハラしながらセラが見守る。戦闘が向いていないセラにも、モルガンの並外れた力量を感じ取れるのだ。その横で一緒に控えているリーゼリットは、手を羽に見立ててぴよぴよと飛ぶ真似をしている。セラに腹をグーパンされた。

「イリヤさんにお土産あるんだけど、いる？」

「お土産？ 私欲しいもの特にないのだけど」

「藤村さんから預かってる昔の衛宮先輩のアルバムだけど、いらないなら返しとくか」

「いらないとは一言も言つてないでしよう？」

「反応早いよ」

そのアルバムは藤村大河が制作したものだ。彼女が撮った写真が多いが、彼女がまだ学生だった頃のものもある。藤村大河にとつて、宝石のような時間。その内の1つ。

つまり衛宮切嗣の生前の写真も混ざっているのだが、中身を見ていよい大和の知つたことではない。「イリヤちゃんに会いに行くの？これを貸すつて話になつてるから、ついでによろしく♪」とか言つて渡されたものだ。なお藤村も、衛宮切嗣とイリヤの関係を知らない。「部屋に行きましょう！ タイガから聞いてる話もあるんでしよう？」

「写真見ながら教えて！」

「イリヤさんつて衛宮先輩ほんと好きだよなあ」

「当然でしょ？ シロウは私の最後の家族なんだから！」

アルバムを両手で抱き抱えたイリヤが、踊るように軽い足取りで階段を登つていく。それが本当に嬉しそうで、笑顔が心底から溢れているのは、それを見た誰にでも伝わる。

見た目通りの幼さを感じさせる、無邪気さ。純粹さ。そして残忍さだつて併せ持つていて。いや、一般的な善悪をつけられないほどに、彼女は純粹だとも言える。幼い子どもが、小さい虫を理由もなく殺すのと同じだ。

「トネリコ?」

イリヤの後ろに続いて歩いていると、モルガンに袖を摘まれた。それは止まれという合図ではない。大和の気を引くためのもの。

「(彼女には、少し警戒しておいてください)」

「(そうなの? 怖いところはあるけど、純粋な人だし、読みやすいと思うけどな。衛宮先輩も、悪い人とは思ってないみたいだし)」

「(底無しのお人好しの意見は参考になりませんが?)」

「(それはたしかに)」

あの人人が心から悪だと断定するものどういうものだろうか。悪人だと断定する人間は、どういう人間だろうか。まつたく想像ができる。

そんな人間の言う「悪い子じやないとと思うんだ」を、どれだけ信用できると言うのか。

「(人間は成長し、変化できる。それは分かつてるので『あくまで今

の彼女は』という話ですが)」

どこまでも純粋な存在を知っている。

よく知っている。誰よりも理解している。

イリヤの生まれを知らずとも、その中身を見抜いて眉をひそめたとしても。それを連想させた。

「(少し、妖精に近い)」

モルガンが絶対に赦さないと決めた存在。そして大和がその危険性を理解できない存在。

大和はそれを思い浮かべているモルガンの手を取った。この世界には、彼女の知る妖精たちなどいない。地上からは姿を消し、星の内海に行つたと言われている。ならば、今はそんなことはいいのだと。知らぬが故に、そう動ける。

「(モルガンが言つたみたいに、人は変われる生き物だ。それに、衛宮先輩つてそこの影響力強いんだよ。だから大丈夫。モルガンは気にしなくていい)」

衛宮は理不尽も残忍も良しとしない。正義の味方になる男だから。「(それに……、その……。おれも頑張るから)」

「(ヤマト……)」

恥ずかしそうに、視線を合わせることなく大和が言う。そこに頼もしさを感じるには、まだ彼の度胸が足りない。

「(なにを頑張るのですか?)」

「(うえつ!? え…………つと……)」

ちよつと踏み込んだらテンパるこの少年に、何ができるのだろう。手を煩わされるだけかもしれない。

けれども今の彼なら、これはこれでありなのだ。可愛らしいから。そう思う気持ちを、モルガンは胸のうちにしまった。

8話目 モルガンとフリーマーケット

週末らしいことと言えば何だろう。家族や友人と出かける。バイクに奔走する。週末に休みがある人に「おファックですわ！」と言いながら出勤する。自由が増えるということは、それだけ人によつて生活様式が異なることになり、誰かが休む時には誰かが働いていないと回らない社会になる。

それは安定した国家運営を実現させる反動。資本社会の呼吸の証。町中を見てそれを肌で感じ取りつつ、モルガンは大和とある場所に向かっていた。

自由が広がった現代だからこそできることの1つ。賑わいを見せるその場所。フリーマーケットである。

「自由な市場、ですか」

「そう。使えるけどもう使わないものとか、再生利用ができるものを持ってきて、売買したり交換したりする場。物は大切にしようつな」

「ヤマトは何か欲しいものもあるのですか？」

「特には。掘り出し物でもあればいいなつていうのと、トネリコが楽しめたらしいなつて」

「そうですか」

一定範囲^ごことで場所が決まっているのだろう。それぞれがテントの下で、長テーブルを設置してその上に商品を置いている。各々で工夫が施されていて、客の数もそれなりに多い。イベント好きな日本人なら、興味本位や気まぐれでひとまず足を運びにくることだろう。自分の国とは徹底的に異なる統治の仕方。汎人類史が、長い歴史と過激な歴史の末にたどり着いた1つの結論。

「……トネリコにとつて、現代つて生きづらいか？」

「なぜ、そう思つたのですか？」

「いや……ほんやりとだけど、そつちのことも記憶にあるから。違う場所つて、思うことも多いんじゃないかなつて」

異聞
帶

「曖昧ですね」

「うつ」

「……たしかに日々違ひを感じていますが、あなたの心配には及びません。時代や思想、そこに生きる者たち。それらによつて、統治の方法は変わるものですから」

「それなら安心した」

いつぱいいつぱいだつた大和も、ある程度モルガンとの生活に慣れきたからこそ生まれた懸念。気づき、心配になつたこと。1つの国の為政者に、全く異なる在り方を見せつけているようなこの日々は、酷く残酷なんじやないかと、そう思つていた。

けれどそれは違つた。モルガンは「違うもの」としてはじめから見ていて、「こういうもの」として受け入れていた。もしかすれば、どこか使える制度もあるのではと、観察もしているかもしれない。

「久しいな少年。寄つていかなかね?」

「わお言峰神父。なんであなたがここに?」

「見ての通り、私もこのフリーマーケットの参加者でね。教会の資金運用に苦労しているというわけだ」

「何でもできそうな雰囲気あるのに」

「ふつ、私はそこまで、器用ではないとも。というか経営学修めてないのにいきなり教会1つを1人で運営できるわけないじやん」

「めっちゃ早口で本音が出ましたね」

「ヤマトこの者は?」

大和の人間関係1つ1つに目くじらを立てるなど、そんな無粋なことはしない。

モルガンにとつては初対面だから、説明がほしいだけだ。何より、こういう時は最初に紹介から入るものではないのか。今の流れでは、モルガンが割つて入るまで2人で会話を続けそうな勢いだつた。

「冬木市にある教会にいる言峰綺礼さん。通称麻婆神父」

「そんな通称がついていたとは」

教会以外での目撃箇所が、麻婆豆腐を食べているところしかないのでから必然である。

「それで神父さん。こつちがトネリコ」

「少年君は自己紹介のやり方を学校で教わるといい」

「あれ？」

上下関係が明確であれば、その場で最も立場の高い人間に紹介。それがなければ、相手方に身内を紹介し、次に身内に相手方を紹介だ。

モルガンが女王であることを考えれば、間違ってはいない。けれど彼女のこと隠しておきたいのなら、先に言峰に紹介するべきだった。今回なら無知で誤魔化せるが、次回以降はそうもいかない。

「ヤマトが世話をなったようですね」

「なに、職務を全うしたにすぎんよ」

モルガンと言峰が視線を交わし、言峰は不敵に小さく笑みを溢した。モルガンの真名までは分からずとも、ある程度掴めるものもあるらしい。

「京坂大和。私の下を訪れなかつたということは、そういうことかね？」

「そうですね。参加はしませんよ。巻き込まれたら話は別ですけど、そもそも令呪がないでしよう？」

大和は言峰に左手の甲を見せた。聖杯に選ばれたマスターであれば、そこに3画令呪が刻まれる。衛宮士郎は普段それを隠して、イヤなら堂々と晒している。その令呪を、大和は持っていない。だからこそ、大和自身がモルガンの召喚理由を把握していないのである。

大和の手を見て言峰は鼻を鳴らす。それならそれでいいのだ。イレギュラーな存在が、乱入してこないのでだから。そもそもイレギュラーはすでに身内にいる。増えては管理の苦勞もひとしおだ。

「ならばよいとも。少年、せつかく来たのだから1つどうかね？」

「これが言峰神父じやなかつたら買つてたんだけどなー」「失礼という言葉を知っているのかね？」

「神父さんには気になくていいものでしょ？」

清々しい答えた。高飛車な弟子を彷彿とさせる。

「それより神父さんこれ全部高くないですか？ 宝物展だよこれ」「どれも本物だ。知人の代わりに販売している」

「そつちのテーブルのが安く思えてくるトラップじやん」

言峰は、今日のフリーマーケットで2つの長机を確保していた。片側は10年来の付き合いである金ピカからパチつたもの。どれもが馬鹿げたほどに高い値段だ。そしてその隣。こちらは言峰の私物から出してきたもの。こちらもそこそこな値段を張られているが、宝物のせいで金銭感覚が狂い、安く見えるというわけだ。

「教会で見かけたやつもありますね。これ売れるんですか？」

「高齢者の信者が買つていつている。ありがたいことにな」

「詐欺師に思えてくるな」

「定価だとも。上乗せはしていない」

「ヤマト。これらの物は高いのですか？」

「うん」

「この値段ですよね？」

元から金銭感覚が狂っている彼女だ。金ピカ英靈の宝物ですら、高いとは思わない。

そんなニュアンスを聞き取った大和は、顔を引きつらせながらモルガンに問う。

「……な、何か惹かれるものでもあつたか？」

「いえそうではなく。この値段が高いと感じるラインなのだと」

「おれが惨めに思えてくるからやめて！」

「ふん、安心したまえ少年。君はああなるまいよ」

「へ？」

言峰がいるテントの対面。そこに構えられているテントの下で、長机に頃垂れている赤い悪魔の姿がそこにあつた。学校の話題の中心人物たるきらびやかな姿など、影も形もどこにもない。

「あの人の家つて金持ちでしたよね？」

「散財したのだろうよ。後見人として資産の紐は握っていたが、今一度にそれを手放してね。半年での有り様だ」

「ええええ……」

「ちなみに本人の主觀で値段が決められている。定価より高いぞ」

「転売詐欺じやん！」

「売れぬのも当然ですね。魔術師としての才はあるようですが、商才は皆無と」

ああはなりたくないなあと、大和は深いため息と共に呆れ。それを受けてモルガンは、大和をそさせないために金銭感覚のズレを埋めていこうと決める。自身の夫マスターに惨めな生活などさせられない。「さてさて、他の店も見に行くか」

「そうですね」

「後ほど、また来たまえ」

「無理やり買わせる気ですか？」

「まさか。実はまだ、物を全て揃えているわけではなくてね。ここに到着していない商品もある」

「それを買うかはともかく、次に何を並べるのかは、楽しみにしちゃますよ」

他の店を見て回るとは言つたものの、実は向かう先は決まつてい。る。先ほど遠坂の成れの果てを見た時に、ついでに周囲の店も見た。その中で1つ、気になつたものがあつたのだ。

そこに向かう道中、並んでいる商品も見て樂しみながら回る。モルガンが惹かれるものがあるか。彼女に似合いそうな何かはないか。それを密かに思いながら。

残念ながらそういうものは見当たらず、大和たちは目的地に着いた。

「ライダーさんも参加してたんですね」

「や——京坂ですか」

その名を発しかけた瞬間の殺氣。それで理解したライダーは呼び方を変えた。俊敏な反応である。敏捷Aランクは伊達じやない。

「ええ。今は席を外していますが、桜と一緒にです。不要なものの処分に丁度いいと」

「他に使ってくれる人がいるなら、そっちの方が気持ちいいですからね」

「そういうことです」

「で、なんで間桐先輩が自転車の籠にハマつてるわけ?」

置物のよう黙つて黄昏れていた間桐慎二が、話を振られたことで嫌そうな顔をする。溜まっている鬱憤もあつたようで、大和による刺激で破裂した。

「抜け出せないんだよ！ 僕の尻が嵌つてな！」

「先輩の尻つてそんな大ききじやないでしょ」

「お前が僕の尻を語るな！」

正論である。

「僕だつてこんな目に合うとは思わなかつたさ！ 今朝いきなり桜とライダーが部屋に来たと思つたら——」

『兄さん客寄せをしてもらつていいですか？』

「——とか言つて、僕の返事を待たずに自転車の籠に押し込んできたんだ！ 僕がこんな目に遭つてるのはお前のせいだからなライダー！」

「桜を後ろに乗せるのですから、あなたは前に入れるほかないでしょう」

「人を籠に入れるつて発想がおかしいんだよ！ お前なら往復できるだろ！ はあ、はあ。つたく、おかげで今日の僕はみんなのお笑い者さ。お前も笑えよ、京坂」

「ハハハハハ！ ズボン破けてパンツ見えてやんのー！」

「最低だ……！ 最低最悪の情報を叩き込みやがつたこの後輩！」

喋る相手が来たことで、不満をぶつけるように叫びまくつている間桐慎二だが、それはまさに逆効果であつた。なにせ彼が叫ぶほどに人の注目が集まり、その数だけ彼は覗き見えるパンツを晒しているのだから。籠の網越しであるため、変にアブノーマルである。

「おいライダー！ ギッタギタに裂いてやれ！」

「あなたのパンツズボンですか？ それともパンツパンツですか？」

「パンツしか選択肢にないじゃないか……！」

「何を騒いでるんだ慎二。離れていても聞こえてきたぞ」

味方がいないと軽く絶望した間桐慎二の下へ、友人であり正義の味方たる衛宮士郎が現れた。その手はイリヤと繋いでおり、アルトリアは藤村と食べ歩き中である。

「いいタイミングだ衛宮」

救世主を見たようにその顔は喜びに染まり、

「あ、わり。俺の知ってる友人じゃなかつたや」

「おい待て衛宮！」

一瞬で地に叩き落とされた。

「どうかおい！ なんでその手で子供の目を覆つてるんだよ！」

「いや、イリヤにはまだ早いというか……」

「僕は規制^{暎¹禁⁸}される存在とでも言いたいのか……!?」

「シロウ。私をレディとして扱ってくれるのは嬉しいけど、子供扱いするのはどうなのかしら？」

「子供扱いってわけじゃないでな……」

場の混沌がそれなりに広がったところで、やはり衛宮が対応することになった。困っていると知つて、友人を助けないわけがない。ライダーや桜が放置したのは、籠を壊す以外の手段を持ち合わせなかつたこと。そしてそれをやりたくなつたからだ。

衛宮士郎なら問題ない。解体し、元に戻すだろう。実は衛宮がここに来たのも、桜から連絡を受けたからである。その桜は凜の様子を見に行つているが。

「いや、面白いもの見れたり満足満足。トネリコ的には、今のマイナスかな？」

「いえ。あなたの本質は搖^うぎませんから」

「……これって褒められてる？」

「無論です。だからこそ私は、あなたの側に居続けるのです」

「…………ありがと」

大和がどういう人間なのか。それはとつぶに分かつていて、初めて知つた時から、彼のことは見抜いている。

それは見えるからであり、彼がモルガンに対して真摯に向き合うから。

自分との決定的な違いを感じつつも、それでも“いいな”と思えているのだ。

他にも回つて適当に時間を潰せたところで、大和はモルガンと一緒に再度言峰の下を訪れた。そこに行くだけで気付ける変化。それこそ、言峰の言つていた物が到着した証。大量のダンボールによつて築かれた山である。

「なんですかこのダンボールの山。ダンボールなんて誰も買いませんよ？」

「中身が持ち運びに不便なものでね。ダンボールがあつた方が便利だということだ」

「なおさら買わないのでは？」

「なに。私はこれを販売するつもりはない」

ならばなぜ大量に持つてきたのか。

「在庫処理に協力したまえ」

そういうことである。

大和とモルガンは半眼で言峰を見つめた。

「私が持つていても仕方のないものだ。欲するものが持つべきだと思わないかね？」

「中身が分かればね？」

「聖杯だとも

「……は？」

「聖杯。そういうのだ。贋作ではあるがね」

聞き取れなかつたのではない。理解が追いつかなかつたのだ。聖杯を配るはどういうことなのか。そもそも聖杯がなぜ顕現してい、て、ダンボールに敷き詰められているというのか。

「全てで48個。倉庫に置いていても場所を取るから困つている。贋作と言つたが、聖杯は聖杯だ。使い道はある。君も1つくらい持つても損はないのではないかね？」

大和も、モルガンも。聖杯にかける願いなど持つていない。それを持つても仕方がないのは、言峰と同じだ。

大和はモルガンと顔を見合させ、しばらく考えてから結論を出した。

「2個買つてもいいですか？」

「ふつ、構わんさ。——喜びたまえ少年。君の願いは、ようやく叶う」
言峰がダンボールを2つ手渡し、モルガンと大和がそれぞれ1個ず
つ持つ。それを持って、中にそれがあるのを感じて大和はいい笑顔を
浮かべた。

「自家製ポップコーンできそそうだな！」

世界一無駄な使われ方が決まった瞬間である。

9話目 モルガンと独占欲

聖杯を2個得たのはいいものの、用途が特にない。ポップコーンを作るにしても、いつたいどれほどの量を出してくるか不明だから中止。家で飾ろうかとも考えたが、置き場所に困るということで、結局聖杯はダンボールの中へ。

箱の中は、衝撃を和らげるために、大量の新聞紙が敷き詰められていた。そのおかげで傷1つない。聖杯がちょっとした衝撃程度で傷つくわけもないが。

その聖杯を1つ手に取って眺める。汚れだつて1つもない。どこをどう見ても、金色に輝いており、そこに反射して映る自分の顔が、何やら不要物に思えてくる。聖杯には何も映させず、ただ鎮座させていたらいいのだと。無言の説得力があつた。贋作ですら、そう思わせてくる。

「……聖杯つて純金かな？」

「売ろうとしていませんか？」

「一番現実的な使い道だと思う」

売つたらどれほどの金額になるのだろうか。その辺の質屋に入ってしまうと、本来の価値より低い値段で買い取られそうだ。一般人にとっては、聖杯などただの金の器。道理ではある。

そうなると、売るのはやはり魔術師相手がいいか。時計塔にいるロードにでも押し売りすれば、良い値段で買い取られること間違いない。贋作だけど。

「聖堂教会、でしたか。ここにある教会に48個もあるのはおかしな話ですが、それがおかしくないのであれば、世界中に聖杯があるのでは？」

「マックじやないんだから」

「ポップコーンかもしません」

「食べたいのか？」

モルガンは首を横に振った。そういうわけではないらしい。ポツ

「ピコーンと言えば、映画館以外でなかなかお目にかかるない商品だ。味の好みは人それぞれ。ポップコーン自体の好みもそれぞれ。

買うか買わないかも別れるが、大和は友人と映画を観に行くと割り勘で買う。ドリンクが二個セットでお得だから。そして友人が食べ尽くすというのが定番の流れである。

「今度映画を観に行くのもありか」

「現代の娯楽の一つでしたか。時期によつてラインナップが変わるのですしたね」

「そう。今やつてるやつは何かな……」

パソコンを起動させる。大和は魔術師の家系だ。家名の変遷はあれど、本家の歴史も長い。そうなると時代遅れな家具や機器が多くなりがちなところを、大和はそうつていらない。最先端に興味津々である。本家にいた頃、幼いときの友人にロ○クマンをやらせてもらつたことが原因だ。エア○マンは倒せなかつた。

そんなわけで、彼の家にはテレビもパソコンもある。ゲーム機もあるし、録画機器だつてある。扱いだつていたつて普通だ。赤い悪魔みたいに破壊したりなんてしない。

「ヤマトはどういうものが好みなのですか？ やはりロボットですか？」

「置きにいつてるようで当てにきたな？」

見事に正解である。変形とかすると大興奮する。

「今やつてるやつだと絶対観たいつてやつはないんだよなー。あ、振り返り上映なんてしてるんだ」

「スクリーンが後ろにあるんですか？」

「物理じやなくて。過去に放映されてたやつが、何個かピックアップされて上映されてるっぽい」

「なるほど。そちらにはヤマトの好みのものがありますか？」

「困つたことない。モルガンが選んでくれていいよ」

「……考えておきます。この機械の使い方も教えてください」

「いいよ。でも壊すなよ」

「振りですか？」

「振りじやないですか！」

パソコンまで壊されてしまうと洒落にならない。”家”から毎月お金の仕送りはあるが、まず食費が増えた。次に予定外の出費もあつた。モルガンの私服や靴、その流れで大和の私服も増えたり。何より一定額を貯金に回したい。

「物は大切につけな」

その心掛けも理解できる。モルガンはこの前、大和に家計簿を見させてもらつた。毎月仕送りで送り込まれる金額。それに対する毎月の出費額。

実は半分ほどは貯金に回しており、その影響で節約した日々を送っているのだ。モルガンは過去数ヶ月分を見てから、今月の出費額を見た。今は12月の半ばで、それなのに出費額はもう先月分に迫つている。

「あ、でも」

「？」

「モルガンに窮屈な思いはさせたくない。優先してるのはそっちだから

」

「私はサーヴァントですよ？」

「関係ない。せっかく現代に来たんだし、しかも戦う必要もない。なら満喫してもらいたいじゃん？」

「あなたは……本当に魔術師ですか？」

「あはは。まあ、おれも誰かさんに感化されたのかもね」

その誰かなど、聞くまでもなかつた。モルガンから見て異常だと感じる人間。人の形をした何か、とすら言ってしまう者。それに気づいている人間はほとんどいない。あの学校では、数年来の友人である間桐慎二くらいか。

そのくせして人への影響力を持つ。

(いえ、だからこそですか)

不気味なほどに真っ直ぐだから。1つのことに向かつて突き進み続ける人間だから、その言葉は真摯なもので、周りに影響を与えることもあるのだろう。

—— 実におもしろくない

自分の夫^{マスター}が、自分以外の人間によつて染められる。この事実は、モルガンが現界してから初めて「つまらない」と感じたものだ。

背の低い丸テーブルを挟んで向かい側。そこに座っている少年は、押し黙るモルガンを見て首を傾げている。そんな彼に、テーブルに沿つて近づいたモルガンは、彼の肩に指先を伸ばした。触れそうで、触れなくて。一度引っ込んだ指を、再度伸ばして。

(……っ)

意を決して触れる。彼の肩に。その袖を指で摘まんだ。

「モルガン……？」

彼女の行動の意図が読めず、少年は緊張して体を強張らせた。1LDKという空間で毎日を共にしているとはいえ、会つてからまだ10日も経っていない。親しみがあるのは、夢の中での交流があつたから。けれどそれは曖昧なもので、目を醒ませばいつも彼女の顔も、交流の中身も朧気だった。

そうであるからこそ、大和はまだ彼女に慣れないと慣れられるわけがない。ふとした仕草にドキッとするし、気を抜けば視線を彼女に奪われる。気を強く持たねば、会話の度に言葉を詰まらせることがある。

大和から見て、モルガンは魅力的な存在なのだ。凜々しく、美しい顔立ち。その堂々たる姿は大きく映り、時折見せる抜けた一面がかわいらしい。

「ヤマト」

その彼女が、今のどれにも当てはまらない表情で。それなのに、普段より強く視線を釘付けにしてくる。

軽く寄りかかるれて、彼女の重み^{存在}を触れられた肩に感じた。名前を呼んだその声は、何よりも綺麗な色で彼の耳をくすぐった。

「あなたは私のものです。あなたのすべてを、私は支配します」

「うん……？」

言葉の意味を考え、大和なりに咀嚼して、頷く。

「私には、支配すること以外の手段がありません。持ち合わせていま

せん

あつたかもしれないが、2000年もの時を経て喪った。

「であれば、あなたは私の色に染めます」

自分好みの人間にしたいわけじゃない。傀儡を作りたいなら、それこそホムンクルスを作ればいい。人形を作ればいい。

そうではなく、大和には大和の軸を持つてもらつて。それを保つた上で……。

「ヤマト？」

何も返さず、大和はモルガンの手をそつと放させて立ち上がる。

「つ……」

離れていく少年にモルガンは手を伸ばしかけ、躊躇いの末にその手を下ろした。

いつものことだ。何をどう転がしたとしても、自分の手には何も残らない。得られたものもこぼれ落ちていく。何を望んでいたのだろう。この時間だつて――

「モルガン」

――少年の声に思考を遮られる。名前を呼ばれただけなのに、その声に意識を向けさせられる。

戻ってきた彼の手には、1つのネックレスが乗っていた。青い宝石をあしらわれ、それがただの宝石ではないことを、モルガンは見抜いた。

「……君にとつては、無いも同然かもしれないけど、加護を込めてある。正直そつちは二の次で、単におれは、これをモルGANに贈りたい」その言葉に他意はなかつた。本当に、プレゼントしたいだけ。そのことにモルGANは僅かに目を見開く。

「せつかく、こうして出会えたんだからさ。何かできたらなつて思つてたんだ。ケーキとかでもよかつたかもしれないけど、12月だしクリスマスあるし。残せるものにしようつて思つて

「……いずれ私は、還るのですよ?」

「それはそれ。これはこれ。おれがやりたいからそうしたんだよ。難しかつたけどな。モルGANに気づかることなく用意するとなると、

他の人に買つてもらうしかない」

「なるほど。聖杯を入れていたダンボール」

「そう。神父さんがそこに紛れ込ませてくれてた。あの人こういうところは、しつかりこなしてくれるんだよ」

「性格破綻してそういうのに」と大変失礼なことを付け足しながら、大和はモルガンの前まで移動して目の高さを合わせた。

サプライズとしての贈り物。それは見事に成功している。モルガンはこれが用意されていたことに、ついぞ気づけなかつた。

「受け取つてくれる?」

きつかり3秒。躊躇うのでもなく揶揄うのでもなく。言葉にできない感情を抱いた。それが何かはわからなくて。思い出せなくてけれどそこに気持ち悪さはなくて。

それを優しく包み上げるように受け取つた。汎人類史の自分の記憶も持つモルGANにとつて、それは希少価値の高いものではない。大きさにしても、数にしても。それらのものに劣つている。

それなのに、これはそのどれよりも輝きを放ち。どれよりも重く。どれよりも価値のあるものだ。

「……ヤマト」

「うん?」

「これを私に付けてくれますか?」

「……うん。いいよ」

受け取つてもらえた。その事実が大和を笑顔にさせる。

モルGANに渡したネックレスを預かり、彼女の後ろへ。モルGANも美しく長い髪をまとめ、それが邪魔にならないように横にずらす。

「つ!」

息を呑んだ。彼女のうなじが、少年にとつて刺激が強いものだつたから。クラスメイトと話していた時は、その魅力が分からないとつていたのに。いざその時が来ると、グッとくるものがあつた。

知らない気持ちだつた。それが何かを大和は理解できず、胸の中でうずまく気持ちを、深呼吸1つで鎮めていく。

冷静さを取り戻して、彼女の首へネックレスを回す。付ける事自体

は簡単だ。クラスプを付けねばいいだけなのだから。

頭では分かっている。それだけだと。しかしそれがうまくいかない。緊張して、手が震えてしまう。下手に失敗し続けて、傷をつけたくもない。

「ヤマト」

優しい声色だった。それと共にモルガンは、片手を大和の手にそつと触れる。ひんやりしていて、艶のある手。触れられた瞬間、大和はピクッと身震いしたが、そこからは不思議と落ち着けた。彼女のこと

で緊張しているのに、彼女によつてそれが解けていく。

「よし……。できたよ、モルガン」

手を放して、彼女から1歩離れた。モルガンは胸元にあるそれを見つめ、次に部屋にある鏡の前へ。そこで確認してから、大和の方へと振り返る。

「どうですか？」

「とても似合つてると……そう思います」

贈つたものを付けてもらえていた。それだけでも感慨深いもので、胸の底から込み上げてくるものがあつた。

それを感じながら大和はベッドに腰掛け、後ろに手をついて天井を見上げる。モルガン相手に送る言葉は、他にもあつたのではないかと思つてしまふ。素で綺麗なのだ。正直言つて、アクセサリー類は余計なものになるんじやないと不安もあつた。

けれど彼女はつけてくれた。感情の起伏が乏しい彼女だが、反応を見る限り悪いものではない。そこで安心すると、さつきまでの距離を思い出して顔が熱くなる。

「顔が赤いですよ」

「うわっ！」

ひよっこりと視界いっぱいに映つた彼女の顔に驚き、大和は素つ頓狂な声と共にベッドに沈む。その反応にムツとしたのか、モルガンが覆い被さるように大和の上へ。少年の顔の横に手を置き、ジツと見つめる。

「モ、モルガンさん……？」

「何を怯えているのですか」

「いや……えつと……」

失礼な反応をしてしまった自覚もある。大和はぐるぐると視線を泳がせ、やがて彼女に贈ったネットクレスにそれが止まる。

「……ありがとうモルガン」

「？なぜあなたが礼を？」

「受け取つてくれたから。それが嬉しくて」

「……」

「俺にとつては、大事だつたから」

大和には見えないように顔を伏せて、そのままこつんと胸に頭を乗せた。
——覚えてない
知らな
い

(わたしは……)

胸のうちに灯る温もりを、青いムーンストーンが輝いて代弁した。

10話目 モルガンとクリスマス①

冬木市の冬は、雪が大量に積もつたり池が凍つたりすることはない。北陸や北海道のような豪雪地帯ではないのだ。逆にまったく雪が降らないのかというと、そういうわけでもない。多少は雪が降るし、数cmだけ積もあることもある。かき集めたら雪合戦できるね程度だ。

「去年は大量に降つたらしいんだけど、自然現象だからな。今年が例年通りならあんまり降らないかな」

「ヤマトは雪が降つてほしいのですか？」

「雪が降る方が体感的に暖かいって言うし。冬にしか見れないものだからな」

「ああ、寒さが苦手なのでしたね」

「まあね。だからこうして食材を大量に買つてるつてわけ」

普段ならマイバッグ1つで済ませる買い物を、今日は両手に大きめなビニール袋がある。モルガンにはマイバッグを持つてもらつている状態。合計で3袋というわけだ。昨日も同じ量の買い物をしていふため、これで冷蔵庫の中がいっぱいになる。

モルガンの術を使えば、買い物袋を家に先に送ることもできる。配達業者がいろんな意味で泣く手段だが、大和は当然それをさせない。周りから余計な疑いの目を持たれるのも面倒だから。

「先日からそうですが、普段より賑わっていますね。特に今日は皆浮足立つてている

「イブだからな」

「クリスマスの前日ということに何の意味が？」

「日本人はお祭りが好きだから。イブはそういうものだつて認識だけして楽しんでる」

町中に視線を向ければ、イルミネーションをしていたり、店の中や外にクリスマスツリーを設置している。それ違う子どもたちは、「サンタさんに何お願いした?」という話題で持ち切りだ。

「不思議なものですね」

「そうなるわな」

本来ならキリスト教の宗教的行事だ。日本はそれをガワだけ取り入れた。もちろん日本にだってキリスト教の信者はいるし、教会だって全国にある。聖堂教会だつてそこの一端だ。それなのに、日本で主流なのは、クリスマスイブにケーキを食べたり家族や恋人と過ごしたりすること。以上である。

これ自体は、日本では珍しいことではない。ハロウインもイースターもバレンタインもそうだ。「なんか名称のある日」をイベント日に変え、日本流を編み出す。それを不思議だと感じるのはおかしくない。

「ヤマトは何か予定を決めていましたか？」

「予定があるか」ではない。「予定があつたのか」をモルガンは聞いた。自身が召喚される前に、もしかしたらヤマトは誰かと予定を話し合っていたかもしれない。家族はないとしても、例えば友人。衛宮の家に遊びに行くつもりだつたのかもしれない。少なくともあの性格なら、大和に声をかけていそうだ。

「いや全然。衛宮先輩にはよかつたらどうだつて聞かれてたけど、それの断りの連絡は入れてある」

「やはり呼ばれていましたか」

「まあね。でも、トネリコがいるから。あつちに混ざつて賑やかなのも好きだけど、トネリコとゆつたりしようかなって」

「……よい判断です」

大和と並んで歩いていたモルガンは、少年がいない方へと顔を逸した。その頬に、僅かな熱を帯びさせて。

帰宅後、買ったものを冷蔵庫に入れながら、中身を整理。今日使う予定のものは、なるべく手前に。昨日以前に買っていたものも前にした。夕飯はそれらを元に作る予定だが、できればクリスマスっぽさを出したい。

「ケーキ用意すればクリスマスだな」

「安直ですね」

「元々ケーキは食べる予定だつたからセーフ！」

「私は構いませんが、ケーキは買つていませんよね？　予約もしないはずです」

そうなのだ。クリスマスケーキを、当日にケーキ屋に買いに行くなど愚の骨頂。ケーキ屋からすれば「お帰りください」案件である。召喚されてこの方、ほぼずっと大和と行動を共にしているモルガンが、それを知らないわけがない。

それでもケーキを食べるということは、大和が取る行動は1つだけである。

「作るから問題なし！」

「……作れるのですか？」

「うん。作るって言つても、デコレーションだけなんだけどな」

なにせそれ用の調理器具がない。贋作聖杯を代用するのもいいが、あの器を生地製造機やらクリーム製造機やらにするつもりはないのだ。変な事象が起きても困る。ダンボールで眠つてもらうしかない。

そんなわけで、やることはデコレーションだけである。衛宮が桜とケーキ作りをする予定らしく、その流れで生地も製作。そのうちの1つを、もうじき届けてもらう予定だ。ライダーあたりがそれをやつてくれるだろう。

「そんなわけで、おれたちがやるのは、生地にクリームを塗りつけたり、飾り付けをすること」

「クリームも出来上がっているものを？」

「そのつもりだつたけど、クリーム作りつてそこまで手間がかからないらっしゃい。保険として買つてるんだが、作るのに挑戦するのも有りだ」

「ヤマトは作りたいわけですね」

「見事に言い当てられた」

「材料を買ったのなら、それ以外ないでしよう」

「ははは、それもそうか」

料理には、微塵も興味がなかつた。そんな大和ではあるが、ひとり

暮らしが始めてから興味を持つた。ずっと何かを買っての生活では飽きてくるから。料理の奥深さを、衛宮によって教えられたから。

「それじゃあ準備するか」

「はい」

揃つてエプロンを付ける。はじめは1人分しかなかつたそれも、モルガンが来てからは2人分ある。エプロンだけではない。食器類だつて増えた。それ以外にも、家の中にある生活用品の種類が変わり、無かつたものが増えていた。

モルガンにとつても、料理は関心があるものだ。今はまだ大和の補助が必要だが、その成長もまた著しい。任される範囲が増え、いざれは1人での料理も可能になるのだろう。そんな彼女は、この時間を漠然と好きだと感じている。

誰かと一緒に何かをする。相手が笑顔になつてくれる。それだけでも、彼女にはこの上なく嬉救われるものしいものなのだ。

「モルガンもいることだし、クリーム作りに並行してイチゴも切つていいくぞ」

「ケーキに添えるのですね」

「そういうこと」

順番に手も洗つて、冷蔵庫からイチゴとクリーム作りに必要なものを大和が取り出す。その間にモルGANはまな板や包丁、ボウルといった調理器具を用意した。

「大きい方に氷水を用意して、その上に小さいボウルを置いてほしい」
大和の指揮の下、今日も2人での料理作りが始まつた。どつちが何をするのか。その分担も済ませた。クリームの方を大和が担当し、イチゴをモルGANが。そのうち来るであろう生地の受け取りも、モルGANの担当となつた。

——ピンポーン

そうやつて決まつた矢先。噂をすれば何とやらだ。

いざ始めようとしたところに水を差された形となり、モルGANは眉をぴくりと動かした。だが無視するわけもなく、大和に頼まれたともあつて玄関へ。

「セイバーですか。ライダーが来るかとヤマトと予想していましたが」

「手持ち無沙汰だったので。エプロンがとても似合っていますねトネリコ」

「当然です。私が着こなせぬものはありません。して、その袋に入っているものが生地ですね」

「はい。生地だつたものです」

「…………は？」

あまりにも堂々と言われたために、モルガンはその言葉の理解が遅れた。「だつたもの」とはどういうことか。生地とやらは溶けることがあるのだろうか。

そんなことを考えていたら、アルトリアのお腹からかわいく音が鳴った。空腹を鳴らすその音に、アルトリアは恥ずかしげに笑い、モルガンはそれすべてを理解した。

「食べたのですね？」

「…………はい。大変美味でした」

「誰が感想を言えと？　まつたく……セイバーあなたはどうしてそうなのですか！」

セイバーの顔を掴む。このまま消し飛ばしてやりたいが、それでは諸々と問題が出てくるから耐えた。だがその代わりに、手にはこれでもかと力を込めている。魔術による身体強化も入れてだ。

「いたたた！　いえ、私も大変申し訳なく思っています！　代わりにお小遣いを使って別の生地を買ってきますから！」

「なぜ先にそうちなかつたのです！」

「そのためには一旦帰る必要がありまして……。そうしたらシロウにバレてしましますから……」

「何を小さいことを気にしているのですか！　最優のサーヴァントと

「いたい、いたいいたい！　顔がパチパチします止めてくださいトネリコ……！」

これが本当に騎士王なのだろうか。こんな小娘相手に、汎人類史の

自分は負けたというのだろうか。そのことを思うと、こちら側の自分が不憫でしかない。その思いも混ぜると、ちょっとした魔術の行使も許される気がしてきた。というかもう使っている。

もちろんこれだけ騒いでいたら、キッチンにいる大和にも聞こえている。事情も把握した大和は、携帯電話を片手に衛宮へと電話しながら玄関へ。モルガンの肩にぽんと手を置いて止めさせた。

モルガンの手が離れても、アルトリアの頬がパチパチしていた。電気ネズミ状態だ。

「ヤマトは甘いです。この愚か者を相応に罰しないでどうするのです」

「結構怒つてゐるのな。……あー、なら先輩。それはおれたちにやらせてもらつていですか？」

モルガンと話しながら、衛宮とも電話で交渉。そちらは予想通り快諾されたので、大和は通話中の携帯電話をアルトリアに渡した。彼女がそれを耳に近づけた瞬間バチッと音が響いたが、通話できているのなら生きているのだろう。

「トネリコも楽しみにしてた？」

「……いえ」

人の家の玄関の前で正座し始めたアルトリアが、携帯電話を片手に眉を下げてゐる。その様子を見るだけで、衛宮が本氣で説教をしていることが伝わつてくる。

「ヤマトが楽しみにしていたことなので」

「……」

間違ひなく楽しみにしていた。材料をわざわざ買ったのだ。生地を自分で作るなり、自分で買うなりと他の方法も取れたが。そこは先輩の好意に甘えただけ。人格からして、まさか届かないだなんて思いもしなかつた。衛宮本人も困惑していたぐらいだ。

その衝撃はもちろんあった。ただ、京坂大和という人間はそこからの復帰が早い。切り替えが早い。それ故に「じゃあどう対処しようかな」とすぐに考える。結果、ショックの度合いは周りが思う以上に軽度となる。

それでも響くものがあるとすれば、これなのだろう。

「まあ、トネリコと2人でつて予定とは崩れたしな」

彼女と何かをするのは、ここ最近の楽しみだ。

「……同じですね」

「え？」

「私も……ヤマトと料理することが楽しみですから」

その気持ちは同じだつた。モルガンも抱いていることだつた。

少し恥じらつて、それでも言い切つた彼女の姿が。その声が。大和の頭をガツンと殴つた。衝撃は、こつちの方が強かつた。

「どうしました？」

「なんでもないです……」

顔が赤くなつて顔を逸した大和をモルガンが追撃する。変わらずかわいらしい反応だ。その原因が自分にあるということが、モルガンの胸を少しずつ満たしていく。

「そ、そうだトネリコ」

「はい？」

頬をつつこうかなと近づいていたモルガンが、だいぶ大和と距離を詰めていた。顔がほほ真ん前にあり、その美しき双眸や柔らかな唇に意識が向く。再度大和は顔を赤く染め、それに感化されたモルガンも半歩下がりながら視線を逸した。

「…………何を言いかけていたのですか？」

「あ、ああ……。その、衛宮先輩がまだケーキ作つてないらしくて、それをやらせてもらえることになつたんだ」

「そうですか。では、そちらにこれから向かうという話ですね」

「そう。準備ができたら行こうか」

「はい」

目の前で起きていたことには目もくれず、正座を続けているアルトリアは衛宮からの罰を言い渡されているのだった。

「『はんだけは抜かないでくださいシロおおお!!』

涙目の大絶叫である。

11話目 モルガンとクリスマス②

まずはアルトリアの弁明を聞こう。いくら彼女が腹ペコ王の名を持つているとしても、他人に渡す物を食べるなどそんな非常識なことはしない。ポンコツな部分が出始めているアルトリアでも、そこはさすがに一線を守っている。衛宮だつて彼女を信じていた。

そんな彼女が、どうして渡しに行くケーキの生地を食べるに至ったのか。それはとても彼女らしい行動だ。優しさを見せただけだ。

——兄弟らしき子ども2人が買い物をしていた

——その2人はクリスマスケーキのおつかいの帰りだつた
——2人でケーキの袋を持っていたら片方がコケてしまい、それにつられてもう1人も転倒

——その際にケーキもグツチャグチャ

「そこで私は、生地を渡すことになりました。帰つてから家族で飾り付けるのも楽しいと説いたのです」

「その流れからどうして生地を食べるにいたつたのさ……」

今の流れでは、食べる要素がどこにもなかつた。「本当は渡しただけ食べていいない」という展開はない。もしそうなら、モルガンの妖精眼がそれを見抜いているから。けれど彼女の眼によると、食べたことは事実なのだ。

「彼らは家族でもケーキを作るつもりだつたようです」

「渡した意味がなかつたパターンだな」

「ですが一度渡してしまつた手前、返してもらうのも気が引けます。相手は子供ですし」

「まあ……。それで？」

「3人でいただきました」

「今過程が飛んでなかつたか!?」

イリヤと藤村がこたつの中でぬくぬくと温まつてゐる目の前で、「私はつまみ食いをしました」と書かれたプレートをセイバーが首から下げてゐる。彼女は正座していて、目の前にはマスターである衛宮

が、視線を合わせて話を聞いていた。

「生地だけを食べても美味しいのでは？ という話が子どもたちの間で起っこり、その真相を確かめるために食べる運びとなつたのです」

「セイバーはその時に一緒に食べたと」

「分けてくれたので」

食べる子どもたちを見て、お腹を鳴らしたからである。

「こういう事情ですので、何卒……何卒ごはんを食べさせてください」「せつかくのイブなんだし、セイバーちゃんを許してあげたら？」

「俺はともかく、被害を受けたのは京坂たちだからな……」

衛宮から話を振られ、大和は手を止めて振り返った。モルガンもそれに合わせている。

「おれはいいですよ。こうして作らせてもらえてますし。トネリコは？」

「私は……」

「ご飯食べたいぞトネリコ！」

「……この小娘……！」

クリームを塗るのに使つていたパレットナイフをモルガンが射出。精確に額へと向かって飛ばされたそれを、アルトリアは真剣白刃取りで受け止める。クリームは両手にべつたりついた。

「危ないじゃないですか！」

「ヤマトあの者を排除する許可を！ 反省の色が見えません！」

「反省はしています！ 後悔はしていません！ 美味しかつたです！」

「この……！」

今にも飛びかかりそうなモルガンを、大和がその手を掴んで引き止めた。彼女たちの小競り合いがエスカレートすると、間違いなくこの屋敷が吹き飛んでしまう。迷惑をかけるし事件性があるとして警察が捜査を始めてしまう。「面倒事」への発展は避けたい。

とはいえる、アルトリアには相応の罰を与えるなくてはならない。でな

いと、モルガンの気が済まない。

「セイバーさんはデザート抜きつてどこで手を打とう。な？」

「……ヤマトがそう言うのでしたら」

「京坂。デザートが抜きということは、私はデザートが食べられないということですね？」

「え、うん。ご飯抜きよりマシでは？」

「もう、悩ましいですね」

「あ、ご飯かデザートかつて2択じゃないですよ。何も食べられないか、デザート抜きかの2択です」

「デザート抜きで！」

「決まりましたよ衛宮先輩」

「お、おう」

アルトリアはすでにデザートを食べているような状態だ。そのことを加味すれば、デザート抜きで許されたことは温情のある措置である。

アルトリアからパレットナイフを回収し、ケーキ作りへと戻る。モルガンはもちろんだが、大和も初挑戦の作業だ。サポートとして、間桐が見守っている。

「間桐つてお菓子作りとかするのか？」

「時々するかな。試合の日に持つていくこともあるし、甘いもの食べたくなっちゃう時もあるし」

「へへ。でもケーキってそんな頻繁には作らないだろ？」

「練習してた時期があるから、そのおかげ」

「練習してた時期……あー。先輩のたん——」

「余計なことは言わなくていいんだよ？」 京坂くん

につっこりと笑いながら間桐が強い圧をかけてくる。ジャブ程度で遊ぼうとしたらこの返しだ。大和は顔を引きつらせてその話題をやめた。

「女心はわからん……」

大和と間桐がそんなやり取りをしている隣で、モルガンは黙々とケーキにクリームを塗っていた。大和がモルガン、どちらかが1人でやるのはではなく、せつかくだから途中交代でやればいいと間桐が助言したのだ。大和が前半で、モルガンが後半。監修は間桐桜である。

「そういえばライダーさんは？」

「ライダーなら今ドライブしてるよ。イリヤさんの車を借りて」

「イリヤさん車あんの!? ああいや、あの城にいるならそれぐらいあるか……」

自分の名前を出されたことにイリヤが反応し、みかんを5段まで積んだところで台所へと目を向けた。

「私の車の話?」

「そうですそうです。なんかイメージつかなくて意外だなと。衛宮先輩より年上なら、免許持つてもおかしくはないんですけど」

「そうね。免許は持つてるわ。ふふつ、あとで見せてあげてもいいわよ? 私の車強いんだから」

「強いつて何」

「あれはたしかに、強い車ですね」

「でしょ?」

「だから強いつて何? 車に使う表現じゃないよね!?」

ライダーが帰つてくればわかるとのことで、細かな説明は省かれた。

「ヤマト。形を整えられたと思うのですが、どうでしようか?」

「うん? うおつ! すげえ!! 初めてだよな!」

「トネリコさんお上手ですね……。自信無くしそうです」

「? 写真の通りにしただけですが」

「初めての方でそれができる人はいないんです! ええ……トネリコさん姉さんタイプなんだ……」

間桐的にはあまりそのカテゴリには入つてほしくなかつた。むしろ、ぽんこつエピソードを聞いていた分、自分よりの人間だと思つていた。

本人は自覚していないが、間桐の料理の成長率だつて世間的に見れば異常である。ハイペースである。比べる相手が悪いだけ。といつても、彼女の姉に料理の腕はないが。悲惨なことになるが。「クリームを整えることはできましたが、ここからクリームで飾り付けるのは難しそうですね」

「やつてみるか?」

「向いているとは思いません」

「それで味が落ちるつてわけでもないんだから」

「……では」

パレットナイフでクリームを整えるのはまだいい。やり直しが通用するから。だが、クリームでの飾り付けとなると、ほぼ一発勝負である。

「やはり難しいですね」

2人に見守られながら一通りやつてみたモルガンが、小さく肩を落としながら呟いた。写真にあるものを真似ようとした。基本的に忠実にするのが、料理の極意だと大和に言われているから。

それをやろうとしたのだが、うまくはいかなつた。ケーキの横側で、波打つクリームを一周させようとしたが、それは途中で切れてしまっている。ツギハギの工程がまんま残り、ケーキの上で何ヶ所か盛り上げとしたクリームも、失敗して潰れている。イチゴ等でのカバーが、むしろ不格好に見えなくもない。

「おれは好きだぞ」

目を伏せたモルガンの横で、それでも大和は優しく笑った。

「こういうのって、作った人の頑張りが見えやすいからな」

「はい。というか、私が初めて作った時より上手なんですから自信を持つてください」

モルガンは大和と間桐に視線を向けて驚いた。そこには嘘も気遣いもなかつたから。大和の気持ちは本物で、モルガンが作ったことに喜んでいる。間桐にあるのも、純粹な嫉妬と喜びだ。モルガンのセンスへの嫉妬と、教える相手の潜在能力への喜び。

モルガンにとつての失敗を、この2人は本気で失敗だとは捉えていない。

「やつてくれてありがとう、トネリコ」

「いえ……」

『■■■■■——!!』

「ちょうどライダーたちも帰ってきたね」

「バーサーカーさんとドライブ行つてたのか。……バーサーカーさんが乗れる車あるのか？」

「ううん、違うよ京坂くん。バーサーカーとドライブじゃなくて、バーサーカーでドライブだよ」

「頭大丈夫か間桐？」

「こらバーサーカー！ 何時だと思つてるの！ 静かにしなさい！」

大和が間桐に腹パンされている傍らで、イリヤが縁側からヘラクレスを叱る。そのヘラクレスの代わりに、搭乗者であるライダーことメドウーサがイリヤに謝罪した。楽しいドライブになつたから、ついティンションがハイになつたのだと。

「どうやらあのバーサーカーは、変形機能を持つてゐるようですよヤマト」

「トネリコまで何言つて……変形しとる!!」

「ふふん。すごいでしょ？ あれが私の車。バーサーカー号よ！」

「かつけええ!! 名前以外はかつけえ！」

大興奮している大和は、イリヤにスネを蹴られた。モルガンが防御を張つたことで、蹴つた本人が涙目である。

「みんなこつちにいらつしゃーい！ ライダーさんも帰つてきたんだから、クリスマスパーティー始めるわよー！ ほら、セイバーちゃんもこのサンタ帽子被つて」

「あの、大河。このプレートは……」

「それは外しちゃ駄目」

「はい……」

バーサーカーは靈体化し、メドウーサは靴を脱いで家に上がる。広い衛宮家の食卓はいつも少人数で広々と使われていたのだが、今日のこの人数だとぴつたりだ。長方形の机で、長い左右に3人ずつ。藤村と衛宮が、短い辺にそれぞれ座つてゐる。なお大和は、モルガンとイリヤに挟まれてゐる。

「それじやあみんなコップ持つて。乾杯するわよー！」

音頭を取るのは決まつて藤村だ。便宜上彼女が最年長であることと、その手のことが向いてゐるから自然とそうなる。

今度はモルガンもアルトリアも遅れない。藤村の声に合わせて乾

杯した。離れている相手もいるため全員とはできないが、それはそれ。楽しければ何でもいいのだ。

「じゃんじゃん食べちゃいましょ！ セイバーちゃんも遠慮はしなくていいからね～」

「ありがとうございます大河！」

「でもデザートは食べちゃ駄目よ～」

「あう。……士郎！ デザートは食後に食べるものだと聞きました！ つまり今あるケーキはデザートでは――」

「駄目だぞ」

「かはつ！」

屁理屈も途中でぶつた切られた。それに見かねた衛宮は、自分の分のケーキを分けることに。甘い男である。

「ヤマトはケーキから食べるのですか？」

「トネリコと作つたやつだからな。ひとまず一口だけ」

生地を作つたのは衛宮と間桐だ。言うなれば、みんなで作つたケーキ。ケーキは大まかに分ければ、生地とクリームである。当然種類によつて変わるが、今回のケーキはそういうものだ。ショートケーキだ。

生地だけが良くて駄目。クリームだけが良くて駄目。どちらもが支え合つて、1つの品になる。その片翼を、大和とモルガンで担つた。

モルガンは大和がケーキを食べるのをじつと見つめていた。人知れず息を呑み、左手でスカートをぎゅっと掴む。

「美味しい」

「……！ 本当、ですか？」

疑う余地はない。その真偽なんて自身の“眼”で覗えている。それなのに、言葉を自然とか溢れていた。

1人で作ったわけじゃない。生地はそもそも関わっていないし、クリーム作りだつて大和との共同作業だ。何1つ、1人だけで作つたものはない。それなのに、その言葉が胸に染み込んでいく。その笑顔

に、ぐつと心を掴まる。

「改めて、一緒に作ってくれてありがとう」

「土郎に入るわよー」

空気を一切読まない声が聞こえてきた。玄関が開けられる音も、人が上がつてくる音も聞こえてくる。その音は2つで、1人は声からして女性だ。そしてそんな行動を取る衛宮の知り合いは、1人しか浮上してこない。

「遠坂？」

「アーチャーが妙にケーキ作るのを張り切っちゃつたから、どうせ人が集まつてんだろうなって思つてお裾分け」

「あ、ああ……」

ピシッとその場の空気が凍る音がした。藤村ですら箸を止めて固まり、間桐は黒い笑みを浮かべてその女性の肩を掴む。

「さ、桜？ どうしたの、なんか怖いわよ……？」

「ふふ、ふふふふ。姉さん。少し、あちらでお話しましょう？」

姉さんもとい遠坂凜が間桐に連行され、その様子に大和とモルガンは首を傾げた。この2人だけは、アーチャーの料理の腕を知らないから。

「何かまずかつたかね？」

連行されるマスターを見送り、アーチャーがリビングの様子を見ながら問い合わせた。それで的確に察せられたのならまだよかつたが、この男「何かやつちやつたな」ぐらいしか読み取れていない。女心が絡んでいるから。

そんなアーチャーもといエミヤに、アルトリアがため息をつきながら冷めた視線を向けた。それをエミヤは、これ幸いとアルトリアに説明を求める。

「アーチャー。あなたに人の心はないんですか？」

「まさか君にそんなことを言われる日が来るとは思わなかつたよ。セイバー」

宴もたけなわ。途中で不穏な空気が流れなくもなかつたが、その元凶たる1品をモルガンと大和の知らぬところで、アルトリアとヘラクレスが食すことで解決。大いに愉快な時間は流れ行き、モルガンは眠っている大和を連れて帰宅した。

夜遅くではない。藤村の入れ知恵の結果、大和は眠らされてモルガンにお持ち帰りされているのだ。なおその先は大和の家だが。

『イブつてね、大切な人と過ごしたいって人もいるのよ。今の日本だと結構主流なんだけど』

大和には聞こえない声量で、藤村がモルガンに言つたのはそういうことだ。大和は、「泊まつていつてもいいぞ」という衛宮の誘いを断つた。その最大の理由は、モルガンのことだ。今は周囲に、アルトリアにすら正しく認識されていないが、いつそれが解けるとも分からない。面倒事は避けたいと思うのは、大和らしい行動だ。

だが藤村がそんな理由を理解しているわけがない。パーティに参加するだけして、結局帰るのなら、そういうことだと藤村が解釈するのもおかしくないのだ。

『大和にとつてトネリコちゃんは、それだけ大切なんじゃないかしら』混乱の渦に叩き込まれた。考えが纏まらなくなつた。だからモルガンは、誰にも気づかれないように、イリヤすら気づけないほど慎重に大和に眠気をかけていった。

眠る前に帰ろうと促し、2人で帰路につく。途中で大和は眠りにつき、誰の目にも映つていなことを確認したモルガンは、大和を連れて家へ転移。靴と上着を脱がせたら、大和をベッドに寝かせた。

そうして今にいたる。

すやすやと眠る彼を見つめながら、彼女は思考をぐるぐると回していた。どれだけ考へても、一向に手がかりがない。陸地が見当たらぬい。

「ヤマト……」

眠る彼の頬に触れた。

それだけで、胸にある「何か」が揺れた気がした。数時間前までは

普通だつたのに、今は名前を呼ぶだけで胸が、少し苦しい。締め付けられる。

『トネリコちゃんにとつて、大和つてどんな子?』

暗がりの中、彼の顔に魅入る。

その唇に触れたいと過ぎり、それを脳が正しく認知して、その先まで考えそうになつた途端、ボンツと顔が一気に熱くなつた。

——わからな*い*
——わからな*い*
——わからな*い*

——わからな*い*
——ヤマトは……夫だ

本当に? 本当にそれだけだろうか?

——わたしにとつて、ヤマトは……

12話目 モルガンと娘

冬ともなれば朝は寒いものだ。夜の間に冷え込み、その冷気が朝にも残っている。地域によつては、日が昇つていようと関係ない。

幸いにも冬木市は豪雪地帯ではない。雪かきの必要もない。とはいえるが、冬は寒い季節だ。寒さが苦手な大和も、週末となれば布団から出るのも億劫に感じる。モルガンが来てからは改善されているが、それでも布団から出るのに気合を入れていた。

「起きましたかヤマト」

「もるがんはいつもやおきだな」

「眠そうですね」

「なんか、あたまがぼんやりする。かいみんだつたんだけどな」

「なんでだらうなと、眠たげに首を傾げる大和にモルガンは「そういう日もあるでしょう」と返す。心当たりが大きいにあるのだが、原因が自分だと分かつても、後遺症が残る類ではないとも分かつているから有耶無耶にした。モルガン自身は無自覚だが、それを言うことに躊躇いがあるようだ。

「ちよつとまつてな」

「はい」

「んくく！ よしつと！」

グッと体を伸ばすのと同時に、自分の魔術回路に魔力を走らせた。魔術回路は魔術師にとつて神経も同然。そこに魔力を走らせると、電気が走る感覚に似ている。それで大和は、強引に眠気を飛ばして意識をはつきりとさせた。

「ヤマト。貴方は私の夫マスターです」

「そうだな。どうした急に」

「逆に言えば、私は貴方の妻です」

「説明は抜きなのか」

「私たちの子どもができました」

「…………ん？」

だらだらと冷や汗を流しながら大和は記憶を掘り返し始める。モルガンとの夫婦関係は便宜上のはずだ。彼女がマスターのことを夫と呼ぶから、そういう関係と言うことに納得している。

だが断じて手を出していない。彼女で卒業した覚えはないし、彼女の操をもらった覚えもない。それは分かりきっていること。それなのに汗が止まらないのは、衛宮家でのクリスマスパーティー以降の記憶がないから。しかも今日は妙に頭が重い。

(…………え？　いやいやいや…………まじで？)

覚えていない。どうやつて帰宅したのかも。いつ寝たのかも。このダルさの理由も分からぬ。

「ヤマト？」

「ひゃい！」

「…………どうされたのですか？　それだけ汗も流して。風邪ですか？」

「風邪…………ではないぞ。うん。…………え、確認させてほしいモルガン」

「？　はい」

頭の中はまだぐちゃぐちゃ。何も整理できない。けれどいくら考えたって真相は不明。これは彼女に聞くしかない。なにせサーヴァントは体調を崩さない。毒とかは話が別だが、風邪はひかない。食事も睡眠も、極論無くていい。それがサーヴァントだ。

ならば、モルガンは絶対に覚えているはずだ。昨晩のことを。
「昨日の夜さ。先輩の家から帰つてから、何かした？」

何個か言葉が抜けている気もしなくはないが、支離滅裂なことは言つていない。文章として成り立つてゐる。

モルガンはその内容に目をぱちくりさせ、

「…………」

口元を隠して頬を染めながら視線を逸した。

(…………まじ、なのか…………？)

大和はベッドに背中から倒れて、天井を見つめた。何一つ覚えていないし、身に覚えがないことだ。何もなかつたと信じたい。

それなのにモルガンの反応はどうだ。大和と違つて昨晩のことを覚えているはずの彼女が、これまで1ミリも見せたことのない反応を

している。普段の凜々しい様子からは想像もできない反応で、大変かわいらしい姿なのだが、そう思えるほど大和は落ち着いていなかつた。混乱の渦に揉まれている。

「あの、ヤマト……」

「ごめんモルガン！」

「へ!？」

大和なら、この胸の内にある「何か」が分かるだろうか。それを聞こうと思つたモルガンを、しかし大和が勢い良く起き上がって抱き締めた。急な展開にモルガンも困惑し、すっぽりと彼の腕の中にいる。身じろぎできず、視線はあちこちに飛ぶ。

思つてたより力が強いんだとか、ほどほどに硬さのある体なんだなとか、彼の匂いがするなとか、これ結構好きかもとか。いろんなことが同時に頭の中で踊り狂つていて。

「やつちやつたのに全く覚えてないとか無責任なクズでごめん」

「い、いえヤマトは、そんなことないです」

「おれ、頼りない奴だと思うけど。できること少ないけど、でも必ず君を幸せにしてみせるから」

「え……」

「約束させてほしい」

背中に回された腕が、さらにぎゅっと力を込められた。苦しくない力加減なのに、胸が苦しい。何か言おうとしても、何もうまく発せられない。胸がいっぱいなのだ。

それでも、何か返したい。それに答えたい。
言葉にできないのなら、何か行動で――

「お母様私の着替えは～？」

――その声にモルガンと大和は体をビクッと跳ね上げて、反発する磁石の如く離れた。

モルガンは混乱の大和のせいですっかり忘れ、大和は何が何やらと再度混乱の深淵に叩き込まれた。

「あ？ 何見てんだよ」

「ヤマト。この子が私たちの娘の……ヤマト？」

バスタオル一枚で体を隠した少女が、娘なのだという。ピンクに近い赤い髪。恵まれた容姿。そして口の悪さ。

「そやはならんやろ……」

「何がだよ」

一晩のうちに娘がここまで成長していました。という信じ難い現実に大和の頭はキヤパオーバー。脳は処理を諦めてシャットダウンするのだつた。

意識を取り戻した大和は、ぼんやりと今の状態を把握する。寝ている状態だ。体が横になっている。首は少し高い位置だ。枕にしているものはとても柔らかい。こんな枕は知らないし、そんなクツショーンもなかつたはず。

「意識が戻りましたかヤマト」

真上からモルガンの声が聞こえた。視界に映るのは、天井ではなく豊かな胸もといモルガンの顔。それも視界に逆さまに見えていて、大和は今の自分の状態を把握した。

「何してるんですかねモルGANさん」

「ヤマトの意識を失わせた責任を取っています」

「ベッドでもよかつたのでは？」

「？ 並んで横になつている方がよかつたですか？」

「そういうことではなく！ 膝枕の必要はないよなつてこと！」

「どこか問題が？」

「恥ずかしい」

正直に言つて、大和は横に転がつてモルガンの膝から離脱。ちょっと名残惜しいなどと思つたりしたが、頭を振つてその邪心を追い払つた。

「そういえば、娘の幻覚を見た気がしたんだけど」「誰が幻覚だ」

「ん？……あれ？」

「お母様はなんでこんな奴を？」

「ヤマトが夫で、私が妻。^{マスター サーヴァント}それに基づいているに過ぎない」

自分の物言いに、胸中で靄が広がる。

「……お母様が認めてるなら。でも私はお前をお父様なんて呼ばないから！」

「なんだうこの、再婚相手に子供がいたみたいな状況」

「仮にお母様に相手がいたとして、別れるなんてことがあつたらそいつの目が腐つてゐただけだからな」

「わかる。おれだつたら手放さない」

「あは。案外分かつてんじやん」

モルガンを最大限に評価している2人は、通じるものがあつたらしい。もつとも、まだ互いにその一面しか知らないだけだから、とも言えるが。

その話題に少し照れたモルガンは、咳払いをして誤魔化し、話の主導権を握つた。自身の娘の説明がまだろくに行われていないからだ。「この子には、妖精騎士トリスタンの名をギフトしています」

「じゃあトリスタンつて呼べばいいのか？」

「いえ、その名は少々……」

「だよな。なんて呼べばいい？」

「スピネル。隠す必要があるなら、こつちの名前」

「なるほど。なんでうちにいるのかは分からんけど、よろしくなスピネル」

大和が手を差し出し、少女はその手とモルガンの顔を往復した。モルガンがこくりと頷いたため、少女は渋々といった様子で大和の手を握つた。

(こいつ、なんも疑わねえのな)

モルGANがいるから。彼女の娘だと言うのなら、初対面だろうと信用できると思つていいのだろう。警戒なんて一切しないし、何も仕掛ける様子がない。それをバカだとは思うけれど、悪い印象は抱かなかった。

「(この子の真名はバーヴアン・シーですが、少なくとも外でその名は呼ばないようにお願いします。ギフトを剥がさせるわけにはいかないのです)」

「わかつた。おれはそのままスピネルって呼び続ける。それでいいだろ?」

「(はい)」

「お母様の夫^{マスター}みたいだけど、名前で呼んでいい?」

「おれもこの年齢で父親とは呼ばれたくないしな」

「え……」

「お母様?」

戸惑いの声を上げたモルガンにスピネルは首を傾げた。どこか問題があつただろうかと。それは大和も同様で、2人の視線がモルガンに集まる。

当の本人は絶賛大いに迷っている最中である。葛藤中である。なにせ相手が愛する娘なのだ。その娘相手に、大和のことを名前で呼ぶなどは言いづらい。その理由を聞かれたとしても、答えづらいものだ。

けれども、たとえ愛娘が相手だとしても、呼んでほしくないという思いがあるのも事実。いつたいどうすればいいのか、モルガンは表情を無にして脳内会議を繰り広げている。

(ファミリーネームで呼ばせれば……。ですがそれだと2人の間に距離を感じる。でも名前で呼ばせるのは……かと言つてマスターと呼ばせるのも……)

脳内会議は白熱し、議論に議論を重ね、その末に1つの結論にたどり着いた。この間僅かに2秒。

「いや、なんでもない。好きにするといい」

「じゃあヤマトって呼ぶわね」

びくりと頬が動く。自身の手を強く握った。

そうなる自分にも、どこか嫌気が差していた。娘相手に、そう思つてしまふ自分に。

「そういうやその服モルガンのだよな?」

「そうなの！　お母様が着させてくれて。どう？」

「綺麗だけど、……ちょっと違う気もするな」

「は？」

「スピネルは綺麗だぞ」

ストレートな物言いに、少女は髪を指先でくるくる回す。大和がお世辞で言つたわけでもないから、照れくさいのだ。

「でも服はモルガンのやつだから、スピネルにはスピネルに合う服があると思うんだ」

「ふん。それがあればの話だけど」

「だから探しに行こうぜ。3人で」

「お母様と!?」

「今おれ弾いたな？」

大和のツッコミは無視して、スピネルはモルガンの様子を窺つた。本当に一緒に行けるのだろうかと。期待と不安を混ぜ合わせた目で見つめた。

モルガンの答えは決まっている。返答はすぐだつた。

「構わん。それぐらい付き合える程度に、こちらでは争うことがない」「やつた！！　お母様いつ行く？　今からとかどう？」

「そう急くなスピネル。ヤマトの朝食が終わつてからだ」

「早く食え！」

「わかりやすい関係だな」

この2人の関係は良好だ。スピネルはモルGANのことが大好きだし、モルGANもスピネルのことが大好き。實にわかりやすい。

それなのに、大和には引っかかるものがあった。それはモルGANの口調だ。大和と話す時と、スピネルと話す時で全く異なる。スピネルが相手の方が、固い口調なのだ。

「（なんでスピネルにはその口調なの？）」

それを大和はモルGANに单刀直入に聞いた。聞かれるとは思つていたのか、モルGANは驚くことなく大和に視線を向けた。

「（どう接したらいいのかわからなくて……）」

「（不器用か）」

けれどもそれは仕方のないことだ。異聞帯でのモルガンの苦悩と、その末に生まれた妖精騎士トリスタン。その経緯と関係、そして周囲の環境。それらを考えれば、モルガンの口調が固いものになるのは必然だ。

許す気も救う気もなく、信用ならない妖精たちが周囲にいたのだから。そしてそれは、バーヴアン・シーを護るための措置でもあった。「（肩の力を抜けばいいよ。こつちに妖精たちはいないんだし、おれもフォローするから）

「……はい」

わかりやすく良好で、わかりにくく不器用な親子関係。それが大和から見たこの親子の関係なのだった。

13話目 モルガンと娘とお出かけ

奇妙な気分だつた。3人で出かけるのはいい。そこは何も問題ない。日本では大変珍しい、というか世界的にも珍しい部類の髪色の、「美」がつく女性2人と一緒にいる。その事実に、慣れてきていた大和の感覚が再度狂つた。

しかも、スピネルがモルガンのことを「お母様」と呼ぶのだ。大和にとつて追い打ちだつた。スピネルがそう呼んで、モルガンは大和を「夫^{マスター}」と呼ぶ。そのくせして、客観的に見ればスピネルと大和が同列だ。落ち着きを見せるモルGANが2人の保護者に見える。

事実とのこのギャップが、大和を奇妙な気分に陥れていた。

そんなことを露とも知らず——知つても変わらないだろうが——スピネルが大和の隣へと駆け寄る。3人で広がつて歩くのは迷惑だから、道を把握している大和が先頭、モルGANとスピネルがその後ろをついて歩いていた。

「ねえ、この町本当に聖杯戦争してるの？」

「なんで？」

「お母様から聞いたけど、昨日パーティーをしたのでしょうか？　しかもそこに、セイバー、アーチャー、ライダー、バーサーカーがいたつて。それで何も起きないなんて、頭が湧いてるか戦争していないかのどつちかじやん」

「あー。今休戦状態らしいからな。監督役がそうしてゐる
「なんだそれ」

呆れたスピネルが、あからさまにため息をついた。モルGAN同様、彼女もイレギュラーだ。呼ばれるはずのない英靈。モルGANは聖杯に何も求めないために、聖杯戦争に興味を示していない。けれど、どうやらスピネルは興味があつたらしい。

理由は違えど、大和もモルGANも参加させる気はサラサラない。「神父さんが言うには『隠蔽のための資金が足りてないのに戦争されたらもう無理じゃん』だとか。あとは隠蔽理由によく使われてたガス

会社が破産してたりとかな

「だつせー。どうしようもなくだつせー」

そこは激しく同意である。聖杯戦争ともあらば、冬木にある教会に優先して資金を送り込みそうなものを、聖堂教会はそうしていない。

そもそも隠蔽先の会社が潰れたのだって、理由として使い過ぎたからだ。それだけ不祥事が起きれば、市民からの反感を買う。破産に追い込まれるのも当然だ。他のスケープゴートもあるはずだが、言峰神父は休戦させている。

「現代は神秘が遠のいてるからな。その秘匿に躍起にならないといけないし、そうなると隠れ蓑が消えた時に困るつてわけ」

「ふーん？ それで魔術の使用をお母様にも控えさせてるの？」

「それもあるけど、面倒事を避けたくてな。幸い、聖杯戦争が休戦状態だから大半の心配事はないんだが」

「巻き込まれようと勝てばいいだけだし、お母様が負けるわけないだろ」

「そういう問題じやないんだよ。冬木の聖杯は7体の英靈を選んだだけだ。各クラスに合わせてな。キヤスターが英靈召喚したからズレてるけど、そこは大した問題じやない」

「問題だろ」

「キヤスターは魔術師の英靈だから、理論上可能でそれを実践しただけ。でも……」

「でもなんだよ。勿体ぶんな

バシバシとスピネルから腕を叩かれるが、それを流しながら大和はモルガンに念話を送る。

「（スピネルの前でもトネリコでいいのか？）

「（……あ）

「そう。スピネルにとつてモルガンはモルガンだ。母親であり、その名はモルガン。救世主トネリコではない。」

モルガンも、自分の娘が召喚されるとは思つていなかつた。だからトネリコの名を使つていたのだが、現実はこれである。召喚されてしまつた。

数秒悩んだ末に、仕方ないかとモルガンは頷いた。スピネル——バーヴアン・シー——が召喚されたが、それ以外に異聞帯の存在はない。少なくともまだ観測されていない。特に、あの妖精たちがいない。それならば、事情を説明して納得してもらえばいいだろう。

「おい

「悪い悪い。ほら、トネリコが召喚されただろう？ 今はスピネルもだ

「は？ トネリコ？」

目が細くなつたスピネルに、大和は声を小さくして説明した。聖杯戦争を警戒して、真名がバレないように偽名を使つてているのだと。少女がスピネルと名乗つてているのと近い理由だ。

「あー、そういう

隠さなくたつていいのに。お母様なら真名が知られたところで負けるわけないのに。そんな思いをアリアアリと目で語つてているスピネルに大和は苦笑した。本当に大好きなのだと、会つて半日すら経つていないのでそれが伝わつてくるから。

「親子でお揃いになつていいじやん

「お母様と……！ それもそうね！」

「（チョロくね？）

「（ですから心配になるのです）」

困つた様子のモルガンだつたが、その口調は穏やかなものだつた。今の理由で喜んでくれることが、嬉しいらしい。親というものは、子供の笑顔が好きというのもあるのだろう。スピネルは明らかに機嫌が良くなつてているのだから。

「ヤマト！ 早く服を買いに行きましょ！ あと靴もな！」

服を買いに行く予定だったのだが、靴も買いたいというスピネルの発言で行く先が変更。一同は、より多くの店があるデパートメントストアまで足を運んだ。そこに行くと当然人も多くなるのだが、今日はまだマシな方だ。

「お母様が服を買った店は？」

「違う建物だけど？」

「同じ店に案内しろっての！」

「でもあつちに行くと、靴屋が全然ないぞ」

「……ちつ。なら靴を先に買って、それからまた移動な！」

「そう急くなよ。こつちにはトネリコと全然来てなかつたし、スピネルも一緒に見て回るのもいいんじゃないか？」

「……お母様は？」

「今日はこちらで見てみるのもよいな。こちらの方が家から遠い。私たちはともかく、ヤマトの疲れが溜まるのだから」

「そこまで体力ないわけじゃないからな？」

さつきの今で、スピネル相手にモルガンの口調が変わるわけがない。そう簡単にできるのであれば、とつぐにそうしているだろう。これは時間がかかるだろうなと認識を改め、大和は自分の立ち位置を決めた。

いや、それは元から決まつてはいた。モルガンに対してのスタンスは変わらない。だから、決めたのはスピネルとの関係だ。距離感だ。大和は自分の役割を片時も忘れたことなんてない。自分で決めたことは、最後まで全うするのだ。

「スピネルはどういう靴が好きなんだ？」

「ヒールのあるやつ。あれ考えた奴天才だろ。賞賛されるべき偉人だろ」

「ははっ、なるほどな」

「てか、むしろなんでお母様にヤマトがそれを買ってないの？ 本当にお母様のこと想つてんの？」

「……ごめんなさい」

「スピネル。あまりヤマトを責めないよう。私も納得してのことだ」

「……なにそれ」

スピネルはつまらなさそうに呟いて、足早に店の中に入つていった。

「申し訳ありませんヤマト……」

「いや、スピネルの言うことも尤もだ。この際だし、モルガンも靴を選んでみたらどうだ？」

「ですが……それでは……」

「ははっ。スピネルが増えたことでもうパーだよ。家計の方は計算し直すから、ひとまずは気にせずにスピネルと選んでみてくれ」

スピネルは経済事情を知らない。だから、モルガンがスニーカーを履いていることが気に食わなかつた。もつと相応しい靴があるから。もつと魅力を引き出せる靴があるからだ。それを知つてはいるはずなのに、大和がそうしなかつた。モルガンも大和を庇つた。それがスピネルの機嫌を損ねる。今日はアップダウンが激しくなりそうだ。

大和は決断した。貯蓄に回す資金を使わないといけなくなつたのなら、一旦そのことを忘れてしまおうと。スピネルの言い分は尤もなのだから。かわいい子も、綺麗な人も、着飾つたほうが絶対に良い。なるほどスピネルは、とても女の子らしい子のようだ。

「スピネル。何か目を引くものはあつたか？」

「お母様。ううん、まだ見始めたばかりだし」

「そうか。では…………共に回るか」

「…………え？」

ぴたつと体の動きを止めたスピネルが、目を丸くしてモルガンの方を見る。彼女は一瞬だけ視線を逸らしたが、すぐにそれを戻した。真っ直ぐにスピネルを見るために。

「私とでは不服か？」

「そんなことない！…………そんなことないわ。……いいの？　私がお母様の時間奪つちゃつてもいいの？　きっと長くなる。これだけ多いのだし、靴に夢中になっちゃうかもしれないわ」

「それでいい。私の時間を、お前にやると言つたのだ」

「…………！」

はつきりと、そう告げた。誰でもないモルガン自身の口で。それは彼女からの歩み寄り。異聞帶でも、合わせ鏡を渡されたり、魔術を教わつたり、娘として引き取られたが、こういう時間はなかつた。向こうでのことが不服だつたわけじやない。不満なんてない。けれども、

立場の都合もあつて、親子らしい時間なんてなかつたから。

「あ……えつ……」

言葉がうまく出ない。どうしたらいいのか分からぬ。スピネルは目を泳がせて、モルガンの手を取ろうかと悩んで、自分の手を僅かに動かしては戻すのを繰り返す。

それはモルガンも同じで、言つたはいいがこの後どうしようと悩んでいた。はつきりとは言われていないが、スピネルの反応から拒まれてはいないことが分かる。大和に言われた通り、一緒に靴を見ることができそうだ。けれど、手を取つてもいいのだろうか。どうにも確証が得られない。こういう時間を、スピネルと過ごせたことがないから。

「何してんだか」

「あつ」

その沈黙を、様子を見守つていた大和が破る。両手を使つて、モルガンとスピネルの手を掴んで2人の手を触れさせる。

そうなつてしまえば後は簡単で、2人は互いにたぐり合うように手を動かして、ようやく重ねあつた。

どこか感慨深く、それでいて照れくさそうな反応をどちらもが浮かべて。

「おれはちやつとお金卸してくるから、戻つてくるまでに靴を選べたら念話してくれ」

「わかりました」

「そんなすぐ決まるわけないじやん。靴選びは本気なんだから」

「うん。いくらでも時間をかけていい。店はここ以外にもあるから、この店で決める必要もないぞ」

「うつそ、他にも同じ規模の店があんの?」

「あるんだなーこれが。だからこそ、こつちにまで来たわけだし。ついでにここパンフも取つてくるわ」

「ええ。お願ひしますヤマト」

「それじゃあまた後で」

親子2人の時間を作つてやりとか、邪魔したくないとか、そういう

傲慢な考えはない。2人には2人の時間が必要だなとは思つてはいるが、即それを実行するのは荒療治もいいところだ。下手したら逆効果である。

モルガンならよっぽどのことはないだろうと、信じられるところがある。……そう、信じ切れないのだ。不安があるのだ。なにせ彼女が、スピネルを相手にした途端不器用になるのだから。

(スピネルがだいぶ靴好きみたいだし、それに合わせて教えてもらつたりしどけば、それで大丈夫だと思うけど)

その考え方、大和はモルガンに言わなかつた。アドバイスに似たそれを。

なにせこれは、2人の問題だから。大和は事情をほとんど把握していないのだ。関係を良い方向に持つていけそうなことは思いついても、それが本当に正しいのかは不明。家庭の事情というやつは、外から見て分かるほど簡単ではない。

(おれも、2人と話をしておいた方が良さそうだな)

もし、仮に。起き得るのかは不明だが。あのモルガンから相談を受けることがあつた時に、的外れなことは言いたくない。そのためにも、2人のことをより知る必要がある。逆もまた然りだ。スピネルと話す時も同様である。助けになりたい。

それと、一番考えたくないことで、そうなつてほしくないことだが。自分の居場所が無くなるのは避けたい。

(一応家主だしな)

不安材料が増えた気もしなくはないが、それに合わせて楽しみも増えた。解消するほどに、樂しめる時間が増えていくだろう。

そんなことを考えながら、お金を引き出すためにATMがある場所に到着し、

「(ヤマト……スピネルが消えました……)」

「(なんでや……)」

ショックを受けているモルガンから届いた念話に愕然とした。

14話目 モルガンと親子①

夢のような時間だと、本気でそう思つた。だつて、お母様と一緒に買い物ができるのだから。

ずっと職務をしていて、ずっとあの玉座にいて、ずっとつまらないあの妖精たちを支配していたお母様。私を娘として引き取つてくれて、お母様しか使えなかつた魔術を私に教えてくれた。妖精騎士トリスタンを着名してもくれたお母様^{ギフト}。

そのお母様を、どうやつたら喜ばせることができるのか分からない。私にとつての『楽しいこと』は、お母様に褒めてもらえること。認めてもらえること。その手段は、残虐と言われるような行い。ここでの倫理観つてやつで言えば『悪いこと』。

それをしたら、お母様は褒めてくれた。それをうまくできなかつたら、お母様を落胆させてた。

だからきつと、それ以外のことに乗しみを見出すのは、お母様を困らせること。認めてもらえないこと。そう思つてたから、どつちの手段も取ることにした。

残虐なことも、私の楽しみも。

靴の研究のために、クソ妖精どもの足を切り飛ばしたりしてた。部屋に持つて帰つて、並べて、一流の靴つてやつを追い求める。それが私のもう1つの『楽しいこと』。目標。……夢つてやつ。私だけの、理想の一足。

『こちらでは無闇に人を傷つけることを禁じる』

ヤマトが私を見て意識をふつ飛ばしてゐ間——大変失礼なことだつたけどお母様が膝枕するから何もできなかつた——そんなことを言われた。訳がわからなかつた。だつて、お母様はこれまで「そうしろ」と言つてきたのに。

でも時間が経てばそれを理解できた。ヤマトが戦闘が起きることを避けてるって、ヤマトと話してて分かつたから。それなら仕方ない。お母様の決定もあるし、従う。

残された私の『楽しいこと』は、靴のことだけになつた。勉強して、研究して、理想の一足を作る。そのための努力だけが、『楽しいこと』。

それを、その時間をお母様と共有できる。その事に、何とも言い表せない気持ちが浮き上がつてた。

『靴つて本当にいろんなあるわね。ドレス用じやないのにヒールがあるやつもある』

『同じ形でもデザインが異なる。細かな需要に合わせているのか』

『あ、お母様その靴はね——』

与えられている現代の知識に、靴のことなんてない。そんな細かなところまでは補完されないし、してほしいとも思わない。だつて、それは私の努力じやない。私の力じやない。

これだけは譲れない。譲らない。私は、私の夢のために自分で進んでいくんだ。

だから、自分が持つている知識。それを使つての解釈、分析。そして考察。それらで、お母様に靴のことを教えてあげる。間違つてたら嫌だけど、間違えない自信がある。

『お母様もヒールのある靴なんてどうかしら?』

『それも悪くない。が、服の系統に合わせたい』

『それもそうね』

手に持つていた見ていた靴を棚に戻して、お母様と移動。そうやつて少しづつ店を回つていたら、お母様が興味を示す靴があつた。

それは私にとつて意外なことで、お母様がその靴を手に取るのを静かに見てた。何か聞かれたら、頑張つて答えよう。お母様のために私ができることを、頑張ろう。

『この靴なら——』

『つ!!』

息を呑んだ。見えているものが、どんどん遠くなつていく感覚に陥つた。

ねえ、なんで。

なんでなお母様。

どうしてお母様は——!!

□□□

モルガンからの連絡を受けた大和は、やることをすぐさま済ませて館内を走っていた。途中でここパンフレットを取るのも忘れずに、人の間を縫うように、可能な限り急いで走った。

走ることは向いていない。運動が苦手なわけではないが、体育会系というわけでもない。だから人とぶつかりかけるのも何度かあつた。それでも足を止めず、緩めずにひた走り、店に着いた時には肩で息をしていた。

「ヤマト……！」

大きく肩を上下している大和にモルガンが駆け寄る。眉間に眉を寄せていて、これまで見たことがないほどに弱々しく感じられる。彼女の弱点は、やはりスピネルなのだ。そうなるほどに、氷のようだと思わせる彼女が愛する娘が、あの妖精だ。

「私としたことが……。こちらでは合わせ鏡をまだ渡していません。これでは呼び戻すこともできませんし、どうすれば……！」

「落ち着こうトネリコ。状況をおれにも掴ませてくれ」

「……そう、ですね。見苦しいところをお見せしました」

「全然。それだけスピネルのことが大切なんだろ？」

「はい」

深呼吸して焦る気持ちを抑え込んだモルガンが、大和に経緯を説明する。一緒に靴を見ていたのだが、目を離した途端にいなくなつたのだと。

「子どもじやないんだから……」

「私たちの娘ですよ」

「そういう意味ではなく。……トネリコがそうなるくらいに、気に入る靴があつたのか？」

「それは……はい。そうです」

彼女が唯一手に取つて靴を見ていたのは、スピネルがいなくなる直前。たつた一足を見ていただけで、その一瞬で、スピネルはトネリコ

に気づかれることなく姿を消したようだ。

「一瞬どころか、結構それを見てたわよ彼女」

「へ？ うわお、キャスターさん。なんでここに？ ストーカーですか？」

「違うわよ失礼ね！ 宗一郎様と来てたのよ」

「その葛木先生はどこに？」

「呼んだか京坂」

「うわ！ 急に後ろから話しかけないでくださいよ！ まつたく気づけなかつたし！」

「済まない。癖でな」

「癖で気配殺さないでくれます？」

そんなことができる時点では、まつたくもつて一般人ではないのだが。常人からかけ離れていたりするのだが、残念ながらこの葛木宗一郎の力

テゴリーは一般人である。そして高校の先生である。

葛木は表情が微動だにしない。喜怒哀楽が消えてるのではと生徒間で言われるし、欲をすべて切り捨てた超人だとか言われたりしている。新入生から怖がられるのは、毎年の恒例行事でもある。とはいえる誠実な人間として、上級生からは慕われている。あるいは、慣れた生徒がそうなるのか。

「その者と共にいた少女なら、あちら側に走つていつたぞ」

わざわざ店の外にまで出た葛木が方向を指差す。どうやらどつちに行つたのかを見てくれていたらしい。追いかけなかつたのは、見知らぬ人間に追いかけられるという状況を作り出さないためだ。常識もしつかりと持ち合わせている。

「もしさまた見かけることがあれば、その時に連絡しよう

「ありがとうございます葛木先生！ 行こうトネリコ」

モルガンの手を取つて駆け出す。館内は走るなど背後から葛木に釘を刺され、大和は走るのをやめて競歩へ。少しでも早く移動しようとし、モルガンは競歩に慣れていないかと思い至つてペースをさらに落とす。

「方向はわかつても場所まではな……。せめてこの館内にいてくれた

らしいんだけど

「……おそらくは中にはいると思います。あの子は日の光が苦手ですか
ら」

「まじで？ うーん、連れ出したのはまづかつたか」

「避けるほどではありますんから、そこまで気にしないでください。
それに、人間の活動は日中が大半なのですから」

「そりなんだよなー。その辺も、あとで本人に聞いてみるかな」

手を引きながら歩く大和の背をぼんやり眺める。出会つて間もないスピネルのために、こうやつて率先して行動できる彼の背を。

「なぜ

「ん？」

「なぜヤマトはそう動けるのですか？ スピネルとは会つてまだ数時
間ですよ」

「それ関係ある？」

「え……？」

「どうしてそんなことを言うのだろうと、不思議そうにする大和にモ
ルガンは面食らつた。

「時間なんて関係ない。一緒にいた奴がいなくなつたから探すんだ。
それに、おれたちの娘だからな」

「……ヤマト……」

そこに損得なんてない。利害だつて関係ない。そつちのほうが良
さそうなんて考えもない。

そうしようと決めたからそういう。大和は今、それだけの理由
で動いていた。

それはモルガンだつてそうするだろう。いや、モルガンの方が強い
気持ちでそうする。スピネルが相手なら、娘が相手なら、結果がマイ
ナスに作用するのだとしても、絶対に見捨てない。

「スピネルってどんな子なんだ？ 当たり前だけどおれは全然知らな
いからさ。トネリコの口から、それを教えてほしい」

歩くことはやめず、スピネルの搜索を続けながら、大和はそれを今
聞くこととした。本人と話して、本人の人柄を知ることも大切だろ

う。それでも、他者からの視点だつて重要だ。

何よりも、スピネルが最も好意的であるモルガンの視点。彼女から見えるスピネルという存在。その見え方は知らないといけない。家主としても。目的のためにも。

「……真名は言いましたね。バーヴアン・シーだと」

念話だ。異聞帯出身の少女の話をするのだから、それは必要な措置だ。

「（うん。名前だけじゃまったく分からんが）」

「（汎人類史のバーヴアン・シーは知らなくとも構いません。ノイズとなるかもしれませんから）」

異聞帯は当然ながら別の世界だ。そつちのことを純粹に飲み込みたいのなら、それに類似するこつちの情報を持つていかないほうがいいかもしれない。

「（精霊は人間と違つて繁殖しません。性行為など無用です）」

「（じやあ数が少ないので？）」

「（そういうわけでもありませんが、その辺りの説明は省きます）」「長くなるし、スピネルの搜索に関係しないから。

「（妖精は死しても、次代へと生まれ変わります）」

「（……はあ？）」

「（そういうものだと受け入れてください）」

「（了解）」

メカニズムを抜きに、とりあえずその概要をそのまま受け入れる。

「（生まれ変わると言つても、限度はあるのです。魂がすり減れば、その代での死が正真正銘の死です。消えます）」

そこでようやく、人と同じラインの死らしい。

「（スピネル……バーヴアン・シーは、ずっと他の妖精たちの慰み者でした）」

「（慰み者？）」

「（他の妖精が笑えば嬉しいと感じる。たとえどれほど傷つけられようとも）

そこに怒気が込められているのは明白だった。モルガンにとつて、

許せないことだつた。相手がスピネルもとい、バーヴアン・シーだから。

「(何をされてもです。焼かれようと手足を斬られようと騙されようと、道具として扱われ、壊れたからと言つてごみ同然に捨てられても。それでも妖精が笑うのなら嬉しいことだと。そう考えてしまう子なのです)」

騙されやすいどころではない。チョロいとは大和も感じていたが、これほどとは思わなかつた。モルガンが取り乱すのも領ける。「(だから私は、あの子にギフトを贈つたのです。トリスタンの名を付け、『反転』させた。そうしないと、あの子を他の妖精に容赦をしない性格にしないと守れないから)」

「(それで今のお性格か)」

「(はい。バーヴアン・シーに次はありません。最後なのです。けれど私はあの子に生きてほしい。最後の一度でいいから、あの子が幸福に生きる姿を見ていたい)」

そのため、残忍な性格にさせた。非道にさせた。そうしないとバーヴアン・シーが生きられないから。

それを間違いだとは思わない。それ以外ないと確信して選んだ。妖精たちを許す気などないから。バーヴアン・シーのためなら、他がどうなるうと構わないと思った。

大和と繋いでいる手を強く掴む。取りこぼしてしまつたものを追いかけるように。

その手の力を感じながら、大和は思つた。良い悪いで語れるものではないなと。妖精は気まぐれで残忍だと聞いている。ならば、バーヴアン・シーにそうする妖精たちも、そうだつたのだろう。仕方のないことだとは言いたくない。けれど、そういうものだつたと言うしかない。

その上で、大和は1つのことを確信した。

モルガンの手を握り返し、彼女に微笑む。

「そうなるように、おれも頑張るよ。スピネルを見つけて、連れて帰つて、3人で笑つていられるように。スピネルの幸せが、トネリコの幸

せでもあるみたいだしな

だからさ、と繋げる。モルガンが話す前に。

「もつと正直になれよ。スピネルに打ち明ければいいんだ。どれだけ好きなのかを。どれだけ愛してるのかって。こっちに妖精なんていない。警戒する相手なんていない。なら、話せるだろ？」

「それは…………そう、なのですが……。恥ずかしい」

「かわいいかよ」

反射的に出てしまった言葉に大和が気づくのは、モルガンが頬を赤くしてそっぽを向くのと同時だった。

変に気まずい空気が流れ、それを打破する話題を大和は探す。何かないかと右へ左へ視線を泳がせ、視界に映つたもので浮かんだ話題を使うことに。

「そ、そうだトネリコ。結局どんな靴が気になつたんだ？ キヤスターさんとトネリコの話の食い違い的に、だいぶ夢中だつたみたいだけど」

横目にちらりと様子を見ながら言うと、靴の話題でモルガンがビクリと肩を震わせた。何かまずかつただろうかと大和は首を傾げる。

口を開こうとしては閉じて、やがてモルガンは口元を手で隠してまたそっぽを向いた。今度は耳まで赤くなつた彼女から、か細い声が発せられる。

「……言えるわけないじゃないですか。ヤマトのばか」

15話目 モルガンと親子②

スピネルを探すのは容易ではない。なにせ少女にとつて初めてのデパートであり、この冬木市 자체が初めての場所だ。

モルガンは少女が日の光を苦手にしていると言つた。だからといつて、絶対に避けないといけないわけではないとも。あくまで、無意識のうちに避けようとする。その程度のものらしい。

ならば、その気になれば外に出られる。ここに来ている事自体が、その証拠もある。

「外に出てたらいよいよ探し切れないな。館内放送でもしてもらうか？」

「……あの子はきっと、それに従わないでしよう？」

「想像できるなー」

館内放送をしてもらつたとしても、無視してどこかに行きそうだ。今だつて、スピネルとはぐれたわけではない。スピネルが意図的にいなくなつたのだ。その理由は、大和にもモルガンにも予測できない。「こつち方面に靴屋はないんだよな。……フードコートはあるけど」「セイバーではないのですから」

「ははつ、たしかに」

「ですが……あの子が行きそうな所に見当がつかないのも歯がゆいですね」

「……そうだな」

今になつて実感する。バーヴアン・シーのことを、本当の意味で知つていたわけではないのだと。何も分かつていない。どうやつて生きさせるのか、それしか考えていなかつたのだから。

「そこまで思い詰めるなよ。これから知つていけばいい。それをできる時間と余裕が、こつちにはあるんだから」

けれど、異聞帶ではなかつたものが、こちら側ではある。せつかく2人とも召喚されたのだから、それを活かさない手はない。

たとえ還る日が来るのだとしても。ここでの日々を忘れてしまう

可能性があつても。

「ヤマト。急に踏み込んだり距離を詰めてしまうと、警戒される可能性はありますか？」

それはそうと、話をするにしても、少女が身構えてしまうのではないだろうか。

そこまではいかなくとも、戸惑わせる可能性がある。さつきもそうだった。目を丸くしていた。

「その懸念はもつともだな。でも、いざれは踏み込まないといけないことじやん？ それに、トネリコは言葉にできてないことが多いっぽいし」

「そうですか？」

「スピネル相手には、足りてないと思う」

言葉が足りない印象などなかつた。モルガンはものをはつきりと言ふから。けれどどうだろう。スピネルが相手になつた途端、モルガンは言葉よりも行動で示しているように見える。

本人は接し方に困つているようだが、むしろ行動 자체は何も問題ない。その見え方さえできてしまえば、彼女が娘のことを愛していることが、これでもかと分かつてくる。過保護にさえ感じるほどだ。それが当の娘にイマイチ伝わっていないのは、言葉が足りていなかから。少なくとも大和はそう感じた。

「気持ちつてさ、言葉にしないと伝わらないことが多いんだ。行動だけだと、相手の見方に委ねてしまうから」

それを言うのは、モルガンに言うのは、残酷であると同時に、響きにくいくことなのだろう。

何千年間も、妖精を助けるために尽力し続けた。育ててくれた一族を滅ぼされても、魔女だと蔑まれ、迫害されようとも。それでも抗い続け、妖精を救おうとした。それでも、どれだけ努力を積み重ねても、妖精たちの気まぐれでそれを無に還された。最後の希望^{ウサ}を殺された。ロンディニウムを滅ぼされた。

話し合いなんて無意味だ。理解なんてしてくれない。言葉をどれだけ重ねようとも、その言葉は気まぐれという風であつさりと吹き

飛ばされる。

それを思い知られ、絶望し、恐怖と支配で国を1つにしたのが、異聞帶のモルガンだ。その彼女に「言葉を重ねろ」と大和は言う。

「……そんなもの……！」

たとえそれが大和の言葉であつたとしても、それに納得はできない。賛同できない。

スピネルは、バーヴアン・シーは他の妖精とは違うと分かつていても、根本はやはり妖精なのだ。その在り方は変わらない。変えられない。人間で言うところの、性根というやつだ。

それを変えるのは難しい。モルガンは誰よりもそれを知っている。ギフトという強引な手段を使つたとしても、それは仮初なのだ。だから、言い聞かせようとしてひどく苦労した。長い時間を要した。残酷で残忍な妖精騎士トリスタンとするまで、時間はかかった。言葉だけでは、どうにもならないから。

「そんなものでもだよ。言葉だけではもちろん薄っぺらい。行動が伴わない」と説得力がない」

「知っています。ですが、それでも届かないのです。何も変わらなかつた」

「だから言葉を尽くすことはやめたんだよね？」

「はい」

「でも……、いや、そうだな。まずはおれがスピネルと話してみるよ。第三者だから分かることもあるだろうし」

まだモルガンの話しか聞いていない。スピネルからの話を聞いていないのに、何が正しいかなんて分からぬ。正直に、率直に話せばいいとは思っているが、的はずれなことを言つたらそれ違う。

モルガンが多くを語れないのなら、ピンポイントに必要なことを話させればいい。そのための仲介役ぐらい、大和は進んで買って出るつもりだ。

「なんにせよまずは再会だな。会わないことには何もできない」

「そうなりますね。……捜索ではなく再会ですか？」

言葉の綾かと思ったが、引っかかった部分だから聞き返した。モル

ガンのその反応に、大和はぐくりと頷く。ポケットから携帯電話を取り出して、それを揺らした。

「間桐に協力してもらつてな。外に出てる場合を考えたら、人手がいるだろ？」

その頃のスピネルは「——

「い——やあ——!!」

絶叫しながらデパートの外を全力疾走していた。人の域を超えた英靈としての全力疾走である。少女の敏捷はAランク。この全力疾走は速度で言うと、時速60kmを優に超える。人にぶつかれば人身事故だ。人間ボーリングだ。高齢者じゃなくとも死ぬ。

けれどそこは心配ない。少女はちゃんと車道を走っている。ぶつかるものがあるとすれば、それは車両だ。無論、ぶつかればの話であり、少女は車両を華麗に避けながら走っているので万に一つもないのだが。

「なぜ逃げるのですか。敵意はありませんよ」「信じられねえよ！ なんだそのデカブツ！」

「これはレンタカーです」

「嘘つけ!!」

「■■■■——!!」

「吠えてんじやねえか!! それバーサーカーだろ！」

「レンタルバーーサーカー。略してレンタカーです。……ふふつ」

「うまくねえからな?」

戦車以上の怪物を乗り回すライダー。これに追いかけられて逃げない者はいない。スピネルの判断は何もおかしくはなかつた。

あくまでバーサーカーは車両モード。身軽に車を躲すことができるのでなら、相手を振り切ることができる。そう思っていた時期もあつたらしい。だが悲しいかな、このレンタカーは跳躍可能である。

速度も同じ。振り切ることなどできず、かと言つて追いつかれるわけでもない。

（なんでこいつら追いかけてくるんだよ……！）

それは大和が間桐にお願いして、ライダーにスピネルを探してほしいと言つたからだ。彼女の俊敏さなら、広範囲を短時間で探れると思つたから。

しかしスピネルはそんなこと知らない。突如現れたライダー with Bを警戒し、逃亡を始めたことでチエイススタートである。

「桜？ ……ええ、分かりました」

突如入つたマスターからの指示。ライダーはそれに忠実に従う。レンタカーの操縦は片手で、空いた手に鎖を出現させ、それをスピネルの横に投擲。

「は!? 休戦状態って話じゃなかつたのかよ……！」

反撃しようかと一度振り返り、歯ぎしりしてから進路を変えて逃亡を続行。反撃くらい許されるだろうが、スピネルはそうしなかつた。モルガンの指示があるのと、大和をあまり困らせたくないなかつたから。心地よいのだ。あの隣は。

「ヤマトは一発殴る」

それはそれとして、休戦状態つて説明してきた大和は殴ろう。あのライダーは、全然攻撃してきたから。

「■■■■■■——!!」

「まさかバーサーカーまで……！」

その咆哮に意識を向けないわけにはいかない。バーサーカーは狂化されたサーヴァントだ。理性なんてない。理性がないということは、何をしてくるか分からぬということ。追われている状態なら、その咆哮が警報にもなる。

「……なにしてんだあれ」

二足歩行に戻つたバーサーカーが、槍投げみたいな姿勢で助走を取つてゐる。何か投げてくるのだろう。その何かは、バーサーカーの右手の中。妙に見覚えがあるというか、今日見たばかりの紫の髪がそこに見える。

「■■!!」

「正気じやねえだろ!!」

バー サーカーである。

「くそっ！」

あの巨躯から投げられた槍という名のライダーが、気をつけの姿勢を保つてスピネルへと飛んでいる。驚異的な体幹であるが、そんなことを評価している余裕はスピネルはない。射線外へと緊急回避し、そのままそっちの方向へと走る。その際にバーサーカーにも目を配つておいたが、彼は何やらビルをよじ登っていた。

「キングコングか……？」

親子揃つて、妙な知識があるらしい。

その後もライダーとの追いかけっこをしていたスピネルだが、それは少女にとつて予想外の形で終わりを迎えた。

ビルをよじ登つて以降姿を消したバーサーカーが、スピネルの前方にあるビルの上に現れた。また何かしてくるのかと、警戒しながら睨みつけて氣づく。またもや誰かしらを掴んでいることを。そして今度は英靈ではない。

「……は？　いやいや…………何しようとして……？」

見たことある少年だ。スピネルがこちらに来て初めて出会った少年だ。その彼がバーサーカーにがつしり掴まれていて、緩やかに投げ捨てられた。

「ばつ……！」

なんで捕まつてるんだとか。お母様はどうしたんだとか。思考が搔き乱されるのも関係ない。待てと言つたつて止まらない。落下が始まっている。

考えるよりも先に体を動かした。変則的であれ、あれでも一応はスピネルのマスターということになつていて。そうではなくとも、彼を助けられるのに何もしなかつたらそれこそモルガンに叱られる。失望させてしまう。

いや、そんなことは関係ない。漠然と、だが確信を抱いて足を動かす。そうしないとまずいのだと。

必死に走った。スピネルなら間に合う距離だ。ライダーのことも、バー サーカーのことも頭から捨て去つて、その目には大和だけを映す。

「——！」

大和が何か言っているがそれは耳に届かない。

スピネルは走り抜け、跳躍し、逆さになつて落下している大和を撲まえた。

「いや／＼助かつた！　ありがとうスピネル！」

「なんか余裕そうね。もしかして私が助けるって信じてたとか言う？　だとしたら馬鹿よ。こんなのは、お母様のためなんだから」

「同じじやん」

「違うわよ！　過程が違うの！　ワンクツショーン挟んでるでしょ。それに、もし私が見捨てたらどうするつもり？」

「その時は私が助けた」

「お母様……」

やつぱりいたようだ。姿が見えなかつたのは、靈体化していたからだろう。
「ひとまずスピネル。手を放してくれないか？　頭に血が上りそうだ」

今も逆さになつている。スピネルは大和の足を掴んでそのまま着地したからだ。彼女の中の葛藤の結果が、見事に現れている。

「あとこれだとスカートのなかあつ!?」

「死ね！　この変態死んじやえ！　助けるんじやなかつた！」

「これは庇えませんよヤマト。……見たくなるのものなのですか？」

手放された直後にスピネルに蹴られている大和を、さすがにモルガンも擁護できない。

「チラリズムと言いますか……いやそれは置いといて

「なに流そとしてんの変態ブタ野郎」

「いやそれを言うとずっとあの状態にしてたスピネルが見せたがりと
いうか、痴女ということに嘘ですごめんなさい」

今度はモルガンに抓られた。

落下の理由はスピネルを自ら来させるため。見つけても逃げていくのなら、こつちのやり方にすればいけそうだなど。なんとも安直な賭けである。しかも分が悪い。スピネル本人に委ねる作戦なのだから。打算だって、無いに近い。

それが成功したのは、ライダーとバーサーカーのおかげだ。この英霊たちが、スピネルを追いかけ回したことで、少女の思考する余裕を削つていつたから。

「まさか外にいるとは思わなかつたけどな」

「……気づいたら外にいたのよ」

「そつか」

そここの追及はせず、大和は屋上にいるヘラクレスに手を振つた。無事だということ、協力のお礼を籠めて。

「スピネル」

「……お母様……」

気まずそうに視線を逸した。それはまさに、悪いことを自覚している子どもの姿そのもの。彼女の前では、この子はただの女の子になるようだ。

叱られると、そう身構えている少女にモルガンは何もしない。行動では、何も示さない。それは異聞帯にいた時と同じだ。変わらない。一方的な施しだけ。

「私に、お前の時間をくれないか」

「……」

「……謝罪と、これからのために」

「え……。お母様……何を言つて？」

「私はお前を分かつていなかつた。いなくなつた理由も、見当が今もついていない」

そこを言及されてスピネルは息を呑んだ。その理由 자체は自覚している。ちゃんと説明できる。けれど、それを言うのはとても恥ずかしかつた。プライドが邪魔をする。

「私がお前にどうしてほしいかを話す。だから……いや、お前はお前の話せる時に、私に話してほしい」

それでいいかという、モルガンからの提案だつた。そしてそれは、スピネルへのお願ひでもあつた。

今までにそんなことはなかつた。こうしろという指示があつただけ。

果たしてスピネルは、困惑の末にそれに頷き、そしてモルガンの親バカが加速した。

16話目 モルガン親子と年末年始

年の終わり。大晦日。日本人が浮き足立つ日の1つ。

この日を終えれば新年。それぞれの思いを胸に、落ち着きを無くす若者は少なくない。

「お年玉つてのがあるらしいわね」

「?」

カーペットが敷かれているリビングで寝転がっているスピネルが、テレビを眺めながら足をぱたぱたと動かしつつそれを口にした。いつたいどこでそんな文化を覚えてきたのかと聞いてみたいところだが、おそらく間桐桜から聞いたのだろう。

スピネルが召喚されてから約1週間。少女の貴重な女友達は彼女だけだから。

「あれつてお小遣いとどう違うの?」

「あ、そつちか」

「そつちかつて何よ」

「お年玉、お年玉な」

寝転んだ状態で肘をついていたスピネルは、それを解いて軽く振り向いた。露骨に追及を避けた大和に目を細めるも、彼はそちらを見ずに考える。

違ひつてたしかに何だろうなと唸る大和を横目に、スピネルの側に腰を下ろしたモルガンはそつと少女のスカートを直した。足を動かしていたせいか、太ももまで見えていた状態だったのだ。大和が視線を泳がせていたのもそのせいだ。

「なんだつけな。たしか新年の祝いとして渡すとかだつたかな」

「……それだけ?」

「たぶんそれだけ。目上から目下に渡すつてのと、今じや子どもに渡すのが風習になつてるのが特徴つてとこかな。お小遣いとの違いとなると……金額?」

「えへ、そんだけだとつまんねー」

「ばつか。日本全国の子どもたちはこれを楽しみにしてるんだからな！」

「ヤマトも？」

「おれは別に。うちの”家”はそんな風習ない」

「ふうん？」

家柄は良い方だ。世間的に見ても、大和は一応良家の坊っちゃんということになる。冬木市ではその家の名は知られていないため、こちらでは一般人として過ごせている。

良家なのに、日本の風習となつていてお年玉を貰つていない。それは周りの人間が聞けば驚くことだろう。だがここには、日本の文化をよく知らないモルガンとスピネルしかいない。「そういう家もあるんだな。魔術師の家系だからかな」ぐらいにしか捉えていない。

「それなら私が貰つてあげるわ」

「おつと？」

「イブンカリカイつてやつ？ なんでもいいけど、ヤマトも正月気分つてやつを味わえるでしょ？」

「その流れにしてお年玉が欲しいだけだろ」

「違うからな！ ヤマトに正月っぽいことさせるだけだからな！」

「えつ、優しいのなスピネル」

「は……はあ？」

「だつて、おれに正月らしいことをさせてくれるんだろう？ スピネルが優しい証拠じやん」

「なつ……！ うう……お母様あ！」

「はいはい」

予想していなかつた展開で褒められ、スピネルは顔を朱に染めてモルガンへと抱きつく。それをモルガンは、嬉しそうにして受け止めてスピネルの頭を撫でる。

「お年玉は用意しつくよ。それなりの靴が買える程度には」

「……！」

「いいのですかヤマト？」

「これぐらいならまあ、なんとかなるだろ。親の役割だしな」

「親の……。では少し出掛けできますね」

「宝くじ当てに行く気だろ。それはしなくていいからな?」

先に制されたモルガンは、つまらなさそうに大和を見つめる。母親らしいことをしたいという欲求が、ここ一週間ほど続いているからだ。その実態は親バカも親バカで、学校では周りを振り回す大和がブレーク役になつていてるほどだ。

「お年玉は明日。今日は大晦日だし、ゆつくりしようぜ」

「オオミソカであることつて何かねーの?」

「うーん、大掃除とか。夜に年越しそば食べるとか」

「大掃除ねー」

モルガンに腕を回されたままのスピネルが、部屋の中をきよろきよろ見渡してため息をついた。

「どこも掃除されてんだよな」

「モルガンのおかげでな」

「バーヴアン・シーが手伝ってくれるおかげです」

「それもあるな」

誇らしげに言い切るモルガンに大和も同意し、そんな2人を見てからバーヴアン・シーは胸を張った。なんだかんだで大和も甘い。

「そういうえば年越しそばつて何? そばと何が違うわけ?」

「大晦日に食べるか食べないか」

「つまんねー。てかこの流れさつきやつた!」

「そばはあとで作るけど、具材は家庭ごとに違うつてな」

「へへ。……暇だし私が作るわ」

「料理できたのか」

「できるわよ。そばは知らないから、レシピは欲しいけど

「やだこの子レシピまで言及してる。予想以上にしつかり者!」

「私のことナメ過ぎじやない?」

「バーヴアン・シー、包丁の扱いには気をつけなさい。振り下ろさないよう」

「お母様まで!? てかそんなことするの牙の奴らみたいな野蛮人だけでしょ」

「野蛮……」

「あく……スピネル。先輩から貰つたレシピを冷蔵庫に貼つてあるから、それを参考してくれ。欲しい食材があつたらメモしといて。その時に買い物に行こう」

「ん、りよーかい」

モルガンからぴょんと離れたバーヴアン・シーが台所に向かい、それを見守りながら大和はモルガンの側に行つた。娘の放つた何気ない一言が、深々と刺さつているようだ。

「わたしは……やばん……やばんな、ははおや……」

「そんなことはないだろ。失敗は誰にでもあるし。スピネルが言つたのは、ずっとそうやつて料理する奴のこと。牙の奴らつてのがどうかはおれは知らんけどな。それより、モルGANもスピネルと一緒に作つてみたらどうだ?」

「……そうですね。野蛮ではない証明をしてきます」

「根に持つタイプなんだな……」

そうしてモルGANも台所に行き、バーヴアン・シーと具材の話を進める。食材自体は買い込んでいるため、その中から選んで組み合わせることにしたらしい。

数時間後には、2人がエプロンをつけて並んで料理を始めた。

「(緊急事態ですヤマト)」

「(なにが?)」

「(バーヴアン・シーが私より料理上手です。母としての威厳が……)」

「(…………そつかく)」「

大晦日が終われば当然来るのはお正月。そしてお正月と言えば初詣だ。日の光が苦手なスピネルのことを考慮し、大和は日付の変更直後に家を出ることを提案。その時間からでもそれなりに人の数が多いものの、日が昇つてから神社に訪れるよりも、夜のほうがスピネルの機嫌がいい。

夜道を3人で歩いていると、大和の袖をスピネルが引つ張った。気になつたものがあるようだ。

「なにあの服」

「晴れ着だな。日本の民族衣装つてことになるのかな。昔からある伝統的な服だよ」

「ふーん？ 悪くないじやん」

「着たいのか？」

「無理なのは分かつてる。家にそんな服はないし」

「先輩の家でも、2人のサイズに合うやつはないだろうしな……。この時間じやレンタルもできない。ごめんな」

「今度で許してやる」

「ありがとう」

お札を言うと顔を逸らされた。純粹な感謝というものに、慣れていないらしい。

そうやつて歩き続ければ神社にも到着する。夜中でも一部の屋台はやつているようで、香ばしい匂いが右からも左からも漂つてくる。スピネルはそれらを見ながら歩き、大和とモルガンでその左右を固める。

「右側から行くかな」

「そうですね。人の流れもそうなつてているようですし」

人の流れに合わせた上で、右に寄つて歩けばそちらの屋台を見て回れる。反対側は帰りに寄つていけばいい。その気遣いに気づいているのかいないのか。スピネルは一つ一つ見ながら進んでいく。

「気になるものがあれば買うからな」

「全部」

「勘弁してください」

「だと思つたぜ」

「店主これの中サイズを」

「お母様早い！」

「すごい別嬪さんだな。おまけしとくよ」

モルガンが買ったのはベビーカステラだ。これなら3人で分けながら食べられる。そう判断したのだろう。中サイズで買ったのに、おまけのおかげで量は大と変わらない。

「柔らかくほんのりと甘い。これは美味ですね」

「気に入ったのなら何よりだよ」

1つ食べたモルガンが、スピネルに袋を渡して感想を言う。ひよつとしたらこのお母様、残りすべてを娘に渡すつもりではなかろうか。そう思っている大和に、モルガンはふわりと頬を緩めた。

「ヤマトも1つどうですか？」

「ん。ああ、ありがとう。……トネリコさん？」

モルガンがその手に持つているベビーカステラを受け取ろうとした大和だつたが、差し出した手にモルガンは乗せてくれない。首を傾げる大和の口に、モルガンはその手を伸ばした。食べさせようとしているのだ。俗に言う「あーん」というやつである。外なのに。

「私では食べてくれませんか？」

「いただきます」

眉を下げてそんなことを言われれば断れない。大和は自らベビーカステラを口に含めた。その際にモルガンの指も口に含めたが、傷つけないように噛まずにベビーカステラだけ回収する。

モルガンは起きたことに目を丸めていた。予想外だつた。思考が追いつかず、というよりも停止し、手をだらりと下げて大和の口元を見ていた。

「何してんだこいつ。バカなのか？　バカだつたな！」

「痛い！」

頬を染めるモルガンの横でスピネルが大和のスネを蹴り、その光景を目の前で見せられた店主は缶ビールをひと缶開けた。

参拝するときにベビーカステラを持ちながらというのは、日本人としては気が引ける。そのため大和は食べ切つてから参拝することを提案し、モルガンとスピネルがそれを承諾。腰を掛けられる場所まで移動し、大和とスピネルが並んで座つた。モルGANはおしごることが気になつたようで、それを買いに行つてゐる。

「お母様1人にしていいのかよ」

「スピネルを1人にさせる方が心配だとさ」

「……そ。ねえ」

「ん？」

「スピネルって言葉……石なんだつてね」

ベビーカスティラが入っている袋を見下ろしながら、スピネルがぽつぽつと言葉を溢していく。

「ルビートていう宝石の偽物。紛い物。どう頑張つたって、キラキラした宝石にはなれないもの。……滑稽ね。私、そんな名前を喜んで使つてたなんて。……ヤマト、知つてたんでしょ？ 意地悪よね」

「それはその側面にしか過ぎないぞ」

大和は立ち上がり、少女の隣から正面に移つた。赤く、愛らしい髪を撫でると、少女が反発するように顔を上げる。睨まれるも、大和は普段と変わらない様子で笑う。

それは、少女からしたら嘲笑つているように見えるだろうか。そうではないと、頭では思つても。

「スピネルはたしかに宝石じやない。クリスタルだ。人々が勘違いして、宝石として扱つてたから、発覚した時には大混乱だつただろうな。イギリス王室の冠に使われてたの、実はルビージやなくてスピネルだつたし」

ただあるだけで問題を生んだ。周りの勘違いのせいで。

「宝石を求めてた人からしたら、スピネルは無価値になるんだろう。でもスピネルって、人気があるんだぞ？」

「嘘よ。偽物なんか誰が求めるの？」

「スピネルもパワーストーンなんだよ。効果は何個があるけどな」

『目標に向かつて頑張る人をサポートする』、『思考を明晰にさせる』、『勝利と成功の護符』、『向上心を養う』などなど。

それらを挙げながら、大和はその場に屈んでスピネルの頬に手を伸ばした。心優しいスピネル。自己評価が低いスピネル。それでも努力ができるスピネルに。少女を肯定するため、大和は言葉を紡いでいく。

「ぴつたりだとおれは思うぞ。だつてお前は、自分の夢のために頑張れる存在なんだから。研究だつて欠かさない。熱心に取り組んでる。スピネルそのものじやないか」

「でも私は大成できない。どれだけ磨いたって、スピネルは宝石になれないのよ！」

「本当に宝石になりたいのか？」

「当たり前でしょ！」

「誰にでも認められる存在になりたいのか？ それとも、トネリコに認められる存在になりたいのか？」

「つ！」

「その答えは、もう出てるだろ？」

紙袋を、くしやりと握った。

「トネリコにとつてスピネルは間違いなく宝石だ。ルビーやダイヤモンドでは足元にも及ばないほどに、価値のあるものだ」

「……そうかな。ううん、お母様は愛してくれるのだものね。……ねえ、ヤマトも？」

「家族だからな」

「……カッコつけようとして、恥ずかしがつてんのバレバレなんだけど？」

「言うなよ！ 余計に恥ずかしくなつてきたじゃねえか！」

「……くつ、キヤハハハ！ 似合わないことするからよ！ でもありがとう」

調子を取り戻したようなので、大和は立ち上がり頭を搔きながらよしとした。スピネルが追撃して煽つてくるのを、頭を少し荒く撫でることで黙らせる。乱れはすぐに直せる程度だ。

そうして時間を潰していると、モルガンが無事に帰つてきた。何もなければ念話も来ないわけだが、それはそれで不安になるというものの。大和はほつと息をつく。

「おしるこを買つてきました」

「食べてきたの間違いだろ。口の横についてるぞ」

「……取つてください」

「あんな……」

ポケットティッシュを取り出して、ついていた汚れを取る。それができたところで、モルガンがぽすんと大和の胸に軽く体を預けた。そ

れが見えていないスピネルは、残っているベビーカステラを食べながら「ヤマトなんかやらかしたかな」とか決めつけて見ていく。

そのスピネルに聞こえない程度の声量で、モルガンは大和に話しかけた。

「最近、貴方といると調子が狂うことがあります」

「え、それはごめん」

「悪い意味ではありません。むしろ……ええ。とても気持ちの良いものですね」

大和は言葉が詰まり、モルガンはその目を見つめて微笑んだ。

「ですから、これからも私の隣にいてください。我が夫マスター」

17話目 モルガンと娘の絆

商店街と言えば福引き。福引きと言えば温泉旅行券！

「なんか当たったけど、温泉ってなに？」

そんなこんなで、大和とモルガンとスピネルは温泉旅行に來ていた。電車でガタゴト揺られて移動し、最寄り駅からは送迎車。知識としてはあっても、体験するのは話が別。スピネルはそれを楽しみ、モルガンはそんな娘を見て目を細めていた。

「ご家族で旅行ですか？」

「まあ、そうですね」

「カラフルな家族ですねえ。多国籍ってやつですか？」

「そうですね」

「うーん……うん。深くは聞かないでおきます。家族旅行を満喫してください

ください」

「ははは、ありがとうございます」

スピネルがモルガンをお母様と呼ぶから、モルガンが親だということは分かる。併まいからしても、彼女は大人だ。運転手と会話をしている大和のことは、長男だと思つたらしい。つまり、シングルマザーだと判断したのだ。シングルマザーの苦労を運転手は理解できない。何が地雷になるかも分からぬ。それを避けたのは的確な判断だった。

旅館へと到着すると、スピネルが車から勢い良く出る。手を空に押し上げながらぐつと身体を伸ばし、後から降りてきたモルGANの手を引いて早速散歩へ。

旅館の位置は山の中腹辺りだ。周辺一帯が敷地のようで、車道とは別に、歩行者用の山道も整えられている。見晴らしもよく、そう遠くない場所に海も見える。冬の今では無理だが、夏には海水浴客が訪れるらしい。

「(チェックインは済ませとくから、ゆっくりしてきて)」

「（すみませんヤマト）」「

取り残された大和は当然その手の手続きをするし、全員分の荷物持ちにもなる。荷物と言つても1泊分だけ。そう多くはないのである。

チエックインを済ませたら、女中に部屋へと案内される。夕飯や風呂、部屋のことを一通り説明を受ければ、鍵が渡されて女中は受付へと戻つていった。旅館なのだから当然和風である。部屋には畳が敷かれており、部屋の真ん中には座椅子と机。4人部屋なので、部屋もそれなりに広い。大和は荷物を置き、上着を脱いで暖房を入れた。

（これは周辺の簡易地図か）

周りの飲食店やコンビニなど、旅行客には嬉しい情報だけが記された地図。寄る場所があるだろうかとぼんやり考えながら、モルガンたちが部屋に来るまで大和はそれを眺めた。

「先に寬いでやがる……！」

「そりやあな。2人のお茶も淹れるから、上着脱いで寛げー」

「部屋の確認が先だろ」

「わりと見ての通りだが？」

「狭いな！」

「大部屋だバカ！」

失礼なことを言うスピネルに、大和は煎餅を投げつけた。それをキヤツチしたスピネルが、その場で開けてそれを食べる。欠片が床に落ちないようにちゃんと手を添えて。

この部屋は——当然だが——隠し部屋も無ければ仕掛けもない。部屋の玄関のすぐ近くにある扉を開ければ、トイレと洗面台。玄関には靴箱があり、部屋に上がつてすぐ右にはハンガーラック。あとは襖があるくらいで、部屋の大部分は見てわかる大部屋。

日本人にとつては珍しくもない。大和にとつては、慣れ親しんだ空気感の部屋だ。しかしそれは日本人にとつて。国外の人間にはカルチャーショックな空間だ。

「変な床ね」

「畳な」

「このスライド式のドアは……なんだ物入れか」

「そういうもんだよ」

「こちらの戸は、なるほど窓はこちらでしたか」

「トネリコもか」

親子2人で部屋の中を見て回った後、モルガンとスピネルは並んで座椅子に座る。これも体験したことがない椅子だ。2人とも座り方に戸惑う。大和は胡座をかいているが、そうするわけにもいかない。思考の末、2人はそれぞれの座り方で座つた。スピネルは足を伸ばし、モルガンは正座だ。

大和が淹れたお茶を飲む。旅館側で用意されていたお茶だ。お湯を沸かし、茶葉を使つて作られたもの。

「家のと違うのね」

「ここのは緑茶みたいだな。お茶にも種類があるんだよ。スーパーとかコンビニでもいろいろあるだろ?」

「あれつて商品の名前の違いだと思つてた。味が結構変わるものなのね」

「葉の発酵や蒸す時間などで変わる、といったところですか」

「飲んだだけでそこまで分かるか? トネリコは時々鋭いよな」

分析等はお手の物である。ただし魔術が関わらない機械は無理だが。

部屋に置いてあつた簡易地図を取り出す。どう過ごすかを話し合つて決めるためだ。スピネルは身を乗り出してそれに食いつき、モルガンは姿勢を変えずに見ている。

「2人はどう過ごしたい? ここでゆつくりするのもいいけど

「夕飯と朝食は付いているのでしたね」

「そつ。先に風呂を済ませて、その間に夕飯の準備してくれるらしい」「無駄がなくいいですね」

「じゃあどこかに食べに行くのつて明日のお昼だけか」

「そうなるな」

商店街で当てたのは今日の午前中。乗り継ぎの途中でお昼は済ませているため、これからどこかで食べるという選択肢はなかつた。なお腹ペこ王は食べ歩きの最中である。

それならこれを見たつて仕方ないと、スピネルは座椅子の背もたれに体を預けた。何せどこか遊びそうな場所が、ほとんど無かつたらだ。田舎の運命である。

「今日はここで過ごしましよう。明日の朝食後に散策で」

「異議なーし」

「了解。じゃあこれは一旦閉まつておくか」

「夕飯の時間は19時からですか。入浴を先に済ませるにしても、まだ時間は余りますね」

「この旅館に何か遊べそうなものあつたつけな」

「あ！ タツキユ一ってのがあるつて聞いたわ！ ね、お母様！」

「そうですね。自由に遊びに興じていいのだとか」

思い出したらそれをやりたくなつたようで、スピネルはお茶を一気飲みして立ち上がる。

「早く行きましょ！ 他の人間に取られちゃう！」

「その場合は時間制だらうから急がなくても……」

「早く行きましょうヤマト。他の者が来ても勝負して蹴散らせばよいのです」

「なんでそんな好戦的なの？ ていうか何時間やる気!?」

「あ～言えばこう言うんだから。あは、もしかしてヤマト。負けるから嫌なのかしら？ 初心者に負けるのは、なけなしのプライド（笑）が傷つくものね。でもこれ不戦敗になるわよね。負・け・犬♡」

「煽りがかわいいな～スピネルは」

「は？ マゾなの？」

「とても可愛らしかつたですよバーヴアン・シー。今の言葉と動きを映像に残したいのでもう1回」

「お母様！」

押された結果、写真と動画の2つでの撮影会が開かれた。顔を真つ赤にしたスピネルが記録に残されたのは言うまでもない。

「はあ～、温泉つて気持ちいいわねお母様」

「そうですね」

「家と違つて浴槽も広いし！ 夜だから何も見えないけど、ロテンブロも良いアイディアだわ！」

「景色はそれでも、空を見上げれば星が見えますね」

「そうね」

入浴の時間になり、卓球でかいた汗を流して今は湯船に浸かっている。温泉には温泉のマナーというものがあり、脱衣所にそれが書かれていたが、その前に大和から説明も受けていた。郷に入つては郷に従え、ということで2人はそれを守り、髪もお湯に浸からないように髪ゴムで縛っている。なお髪ゴムは受付で借りられた。

「それにしても、初心者相手に本気で勝ちに来るなんて、ヤマトもがつつき過ぎだわ」

「手を抜いたら文句を言われるから、だそうですよ。それに接戦だったのだから良いではないですか。楽しめたのでしょうか？」

「それはそうだけど……。負けるのは性に合わないわ。お母様は初めてなのに圧勝してたし」

「当然でしょう。勝負なら私は負けません」

言い切るその姿がかっこいい。実際にモルガンは負けていないのだから、その発言の説得力も強い。

憧れだ。バーヴアン・シーにとって、その姿は敬愛すべきものであり、憧れるものである。自分とは違うなど実感して、湯船の中に口元まで沈めた。

「次勝てばよいのです。生きていれば次がある。そうでしょう？」

その言葉に小さく、ゆっくりと頷いた。次とはいつだろう。明日だろうか。それとももつと先だろうか。そもそも、そんな機会は来るのだろうか。……来るのだろう。望めばくる。バーヴアン・シーはそれを理解できている。京坂大和は、自分の願いにも応えてくれる人間だと。

けれど、叶わないものだつてあるのだ。母親を相手に敵わないものもある。

何一つ衰えを見せない綺麗な肌。ブリテンで1番の容姿。何より

も綺麗な髪も、瞳も。自分にはない魅力で、届かない魅力。

「まつたく、どうしてお前はそう考えるのですか」

「お母様？」

考えを口にしていたのだろうか。それは分からず、考える暇もくれない。モルガンの濡れた手が頬を撫でた。

「お前にはお前の魅力があるでしよう？ ウエーブの髪は私にない魅力。その心の温かさを映した髪も、私にない魅力。何より、お前の心はブリテンの誰よりも美しいものだと。私は知っています」

その髪を先ほど洗つてあげた。愛おしい髪を、丁寧に、大切に。美しい髪だと心から思いながら。

それはきっと、バーヴアン・シーも思ったのだろう。モルガンの髪を洗つた時に。だから、自分のことを下げてそう考えてしまつたのだ。

「バーヴアン・シー。お前は私の娘ですから、自信を持ちなさい。お前も悩殺ボディというやつなのですよ」

「お母様急に頭悪くならないで」

バーヴアン・シーの感動が消し飛んだ。

「……魅力ではあるのですが……、体目当ての低俗な者が近づきかないですね。ヤマトも危惧していましたし。バーヴアン・シーやはりお前に男はまだ早いと思います。もしも、もしもですが。気になった男がいれば私とヤマトの前に連れてきなさい」

「お母様飛躍し過ぎよ」

そんな相手が、現れたらいいなと頭の片隅で思う。今の自分には思い当たる相手がいないけれど。違う何処かの自分なら、見つけられるかもしない。

「……バーヴアン・シー」

「なあにお母様」

「お前は今…………幸せですか？」

湯船の中にある段差に腰掛け、上腹部から上を湯の外に出したモルガンが聞いた。その問い合わせに対する彼女の思いは、間で表れていることだろう。

そしてそれは、バーヴアン・シーでも掴めたものだつた。

バーヴアン・シーは沿槽の縁に頭を乗せ、夜空を見上げながら振り返る。召喚されてから間もない。1週間と少ししか過ぎしていない。その日々は、どうだつただろうか。曲がりなりにも、不幸などではない。友達だつてできた。決して、虚しい日々などではない。

「……そうね。そう、なんだと思う。……正直、お母様といられたら十分。お母様と話ができる、一緒に何かできる。それだけでも、満たされていくの」

体を起こし、モルガンと同じように腰掛けて、視線の高さを合わせる。

「そこには、ヤマトがいて桜もいる。得られなかつたものが、自然と得られた。だからねお母様」

真つ直ぐに言える。笑顔と一緒に。

「私は今とつても幸せだわ」

目を見開き、すぐに優しく細めた。

その言葉が、少女の笑顔が、モルガンの胸を満たしていく。ずっと見たかつたものだ。ずっと聞きたかつたものだ。それが今、ようやく叶つたのだ。それは何にも言い表せられるものではなく、何にも代えがたいものだ。

「そうか」

ただ一言。それを言葉にするのが限界。

そんなモルガンに、バーヴアン・シーは笑みの意味を変えて言葉をかける。

「お母様、ヤマトはどうなの？」

ピクリと肩が震え、どういう意味なのかとその目が問うていた。バーヴアン・シーはそれを、意地悪そうに受け止める。

「ヤマトが好きなんですよ？」

「え…………な、何を言つているのですかバーヴアン・シー!? わ、わたしが…………や、ヤマトのことを…………?」

「うつそ自覚無かつたのお母様……。あれだけ分かりやすかつたのに!? 鞄見てたときもヤマトがどう見るか気にしてたじやない!」

「落ち着きなさい落ち着くのですバーヴアン・シー」

「お母様が落ち着いて!? 今話しかけてるそれ岩よ!?!」

温泉で温まり火照っていた体が、さらに赤く染まっていく。特にその顔は顕著なもので、視線があちこちに動いていた。

（お母様かつつわ。さすがお母様だぜ!）

「あ、あのですねバーヴアン・シー。私とヤマトは」

「夫婦でしょ?」

「はうつ!」

今までとの意味合いが違つて聞こえてくる。モルガンは見事に翻弄されていた。とても汎人類史の自分の記憶と知識を受け取った人物とは思えない。

「お母様」

モルガンの目の前までザブザブと湯船を横切つたバーヴアン・シーが、彼女の手を掴んで真っ直ぐその目を見た。いつもは冷酷で凜々しい目。今は見る影もない。

「お母様のおかげで、私は生きられる土台を貰えたわ。今の幸せも、お母様がいてくれたから。私は、十分にお母様からいっぱいのものを貰つてる」

もつと愛されたいという気持ちはある。それは消えない。消えることがない。

だけど、今はそれ以上のものがあるから。

「だから今度は、お母様個人の幸せ。それが叶つてほしい」

「バーヴアン……シー……

「幸せになつて、お母様」

18話目 1LDKの女王モルガン

風呂を済ませ、食事も済ませて部屋に戻ると布団が敷かれていた。利用人数分、つまり3人分並べられており、いわゆる川の字になつている。スピネルが娘と言つても、この子実は身長が170cmある。モルガンと同じだ。大和が一番身長が高いと言つても、その差は約3cm。あまり変わらない。

そんなわけで、スピネルを真ん中にしようとも川の字らしくはない。どこで寝たいという希望もない。その結果、モルGANが真ん中となり、その左右で大和とスピネルが寝ると決まった。

「ヤマト起きてますか？」

「うん。まだ起きてるよ」

「少し、歩きませんか？」

他の客が寝静まつた頃合い。スピネルもすやすやと寝息を立てた頃に、モルGANは大和と部屋の外に出ることにした。穏やかに眠つている愛娘の頭をそつと撫で、館内着の上から上着を羽織る。

今は利用客が寝静まる時間。深夜なわけで、廊下の灯りも最低限だけ。映画館が通路や段を示すために床に僅かな灯りを点けるように、この旅館でも今は床に灯りが灯つている。天井にあるものは、一定間隔に僅かな光を灯すだけだ。頼りになるのは、それらよりも月の光である。

そんな廊下を2人で歩く。珍しくモルGANが前を歩き、大和はその背を追う。2人の時ならいつもは並んで歩くというのに。

(この胸の高鳴りも……そういうこと、なんですよね)

意識すると、ほんのりと顔に熱が帯びてくる。実は今だけではない。風呂から上がった後に大和と合流した時、視線を合わせられなかつた。食事中にはなんとかそこを治せたが、今度は逆に彼に視線を向け過ぎた。意識すればするほど、極端になつて調整が効かない。

廊下を進んで小さな広間へ。そこは小さな憩いの場。バー、カウンターもあり、営業時間なら子供向けのジュースからビールまで取り

扱っている。その広間にあるガラス張りの壁。京都の和風庭園ほどではなくとも、和を意識した中庭を見られる場所。今は月明かりに照らされ、日中とは異なる装いを見せる。

そこに面して設置された2つの長椅子。そのうちの1つにモルガンは座り、ぽんぽんと自分の隣を叩いた。それに従い大和もそこに座る。

モルガンは見慣れない中庭を眺め、大和は星空を見上げた。互いに見慣れているものは違うものだ。

「……いいのか？」

何分経過しただろうか。測つてはいなかつたが、10分ほどだろうか。その間互いに何も言わず、静かにそこにいた。モルガンから話があると思つていたから、大和も黙つていたのだが、彼女が切り出さないから声を発した。

モルガンとしては、どう切り出そうか迷つていたのだが。どうやら本人が思つていた以上に時間が経つていたらしい。

その曖昧な質問は何のことを言つているのか。誰にも分からなさうなその問いを、しかしモルガンは不思議と理解した。

「そうですね」

体を横に傾ける。すぐに肩と肩が触れ合つた。特に身長差もないものだから、彼の肩に頭を当てることも乗せることもできない。やろうとする逆にしんどい。ちょっと憧れてたものだから、彼の身長がまだ伸びることを期待しよう。

触れ合う肩を意識して、距離の無くなつた隙間をさらに埋めるように、モルガンは大和の手に自分の手を乗せる。重ねて、指も絡めた。「私はヤマトに、甘えさせてもらいました」

目を閉じればすぐに浮かぶ。彼の笑顔が、共に過ごした日々が。まだ1ヶ月も経つていらないのに。もつと長い時間。それこそずっと、彼と過ごしていた気になる。それぐらい、充実した毎日だ。

「ヤマトは優しいですね。魔女である私に、これほどのものをくれたのですから」

「どうだかな。おれは、そうしようと決めて動いてただけだよ」

記憶は、曖昧だ。戻つてきているものもある。それは他人事のように思えて、けれど大事なものだと心が理解している。情報の波はとめどなく、そして不定期的に押し寄せてくる。

その波とは関係なく、分かりきつていることはあるのだ。はつきりとしていて、それが原動力になつていて。

熱くて、温かくて、儂い。

「おれはさ」

立ち上がりつて、手を引っ張る。それで立ち上がりつた彼女の腰に、空いている手を回して引き寄せた。

「や、ヤマト……？」

熱っぽい表情で戸惑う彼女を可愛らしく思う。

それ以上に、愛おしく感じる。

「君のことが好きなんだモルガン」
トネリコ

その想いを言い切つた。解き放つた。

顔が熱くなるのを自覚する。鼓動が耳元で鳴つていて煩い。彼女に聞こえるだろうか。きっと聞こえているだろう。

カツコつけようにも、格好がつかない。けれどそんなもの、もうどうでもいいのだ。大きな見栄なんていらない。小さなプライドもいらない。大事なことは、言葉と行動で示すから。

握っている手も離して、彼女の背に手を回す。逃さないように、手放さないように、失わないように。熱い想いも、大きく速く鳴る鼓動も、彼女に伝えててしまえばいい。

そうだ。伝えなければいけないのだ。

こうして抱き寄せてようやく理解思出せたできた。

彼女は偉大であつても決して大きくない。女性的で柔らかく、折れてしまいそうな、細くて華奢な体。それもこの腕の中につっぽり取まる程度の。

それなのにその身一つで、ブリテンという大きなものを背負つてゐる。妖精たちに理解されずとも、孤高であろうとも。『夢』を叶えたいという、誰しもが抱く思いを胸に秘めて。

そんな彼女だから——ではない。使命も背負うものも関係ない。

彼女がモルガンだから。この想いが募り続けるのだ。
「——愛してる。モルガン、君を、心から愛してる」

身長差なんてほんとない。こうやつて抱きしめられてしまえば、彼の声は耳元から聞こえてくる。その声に、ビクリと体を震わせた。くすぐつたくて身をよじり、恥ずかしくて離れようとし、嬉しくて蕩けそうになる。

優しい彼。私の幸せを想つてくれる初めての異性。

その彼の熱も、想いも、何もかも伝えられる。注ぎ込まれて、沈んでいく。落ちていく。

——知つていた

私はこの想いを、胸に抱えているものを以前感じていたのです。私が絶望に落とされるより以前。救世主として、トネリコとして生きていた数千年。私は夢の中でヤマトと会っていた。

夢なら、時間も空間も関係ない。世界ですら、夢の中なら超えられる。だつて夢の世界は、ありもしないものを組み合わせられるから。ヤマトはわたしをただの女の子だと思っていた。わざわざ教える必要もないから、わたしも、夢の中では救世主なんて辞めました。休んでいる時に見る夢なのですから。

次第にそれを、わたしは気に入りました。

だつて、醜いものを見なくていい。辛いものを見なくていい。しないことは何もなくて、そこには自分とヤマトしかいなかつたから。お話をするだけで良かつた。それだけでも救われて、ただの女の子として接してくれる彼に、次第に心を惹かれたのは、必然だつたのでしょうか。

彼と過ごせば気持ちが上を向く。彼の笑顔で頑張れる。

そうだつたのに、結果は結びつかなかつたから。合わせる顔もないなんて思つて、夢を見るともやめて。恐怖で支配する女王になつた

のです。

それなのに彼は、わたし私を思おもい続けてくれた。

「君は頑張つたから。ほんとうに、誰にも負けなくて、誰にも真似できないぐらい頑張つたから」

彼は作った。私が女王の肩書きすら置ける場所を。それがここ。彼が生み出した固有結界であり妖精領域。彼1人の力ではないでしようけれど、彼が核なのは間違いない。

私が、肩の力を抜けるように。穏やかな時間を過ごせるように。多少なりとも、私の記憶にも靄がかかつっていました。それ以上に、ヤマトは自分の記憶を忘れさせていたのでしよう。異聞帶のことを私に意識させず、自身も意識しないために。自分の性格を理解していわけですね。不器用で、優しい人。

「偽善だよ。これはおれの傲慢だ。そして我儘だ。君に報いがないのは嫌だつて。何よりも、君と過ごしたいつて。それでおれは、君を夢から引き寄せた」

そんなことはありません。貴方の行いを、私は傲慢だと思わない。そのおかげで、私はここにいられるのですから。

それにその我儘のおかげで、私はこの想いを知ることができた。

「思い出した時には、これを言うつて決めてた」

思い出すという行為は、こことの綻びのきつかけ。ヤマトが用意してくれた世界の、幕引きの合図。

「おつかれさまモルガントネリコ。それと、おれと出会ってくれてありがとう」

「……あ」

それは、ついぞ言われなかつた労いの言葉。上辺だけのものではない言葉。その感謝も、そのされ方もなかつた。

震える手でヤマトの服を掴む。シワになるぐらい強く。でもそれでは足りなくて、抑えられなくて。両腕をその背に回した。

胸が熱くなり、込み上げてくるものがあつて。それを抑えられたのか、ダメだったのか、わたし私には分かりません。

「や、マト……」

きつと声は、震えています。

なんとか発せられましたが、それが最後の引き金。溢れ出るもののは、すべてわたしの気持ち。

腕の力を強めて。多くの言葉の中から手繰り寄せてそれを絞り出します。

「ありがとう」

思えば、その言葉をまったく使っていませんでした。さすがに0回ということは、ないと……思うのですが。

1回では言い足りません。けれど何回言つても足りません。

心地よく、幸せな夢を私にくれた。そのためだけに、彼はきっと、大きな負担を背負うはずなのに。

……彼はこれを自分の我儘だと言います。それなら、私も我儘を押し付けてもいいのかもしません。

「ヤマト。今度は、妖精國に来てくませんか？ 私の國に、いつか来てくれますか？ 貴方がいれば私は——」

「行くよ。必ず」

その即答が。力強い肯定が、この上なく嬉しい。

ですが、本当に話すべきはそれではない。これで満ちるものもありますが、これではない。

そうです。バーヴアン・シーにも背を押されました。彼の気持ちも伝えられた。

ですから、私も応えねばならないのです。救世主でもなく女王でもない。ただのモルガンを見て愛してくれる彼に。

「あ……」

言おうとした。その言葉を思い浮かべた。その瞬間体が熱くなつて、恥ずかしさでどうにかなりそうです。

単語にしてたつたの2文字。言葉にして5文字か6文字。ただそれだけなのに、それだけのものが言えない。言葉が詰まつて、胸が張り裂けそうになる。

どうして、どうしてその言葉をヤマトは言えたのですか。彼を見れば分かるのでしょうか。

そう思つて彼を見ても、当然ながら分かりません。分かるのは、ど

うしようもなく私が彼に惹かれていること。愛おしくて、彼の目に吸い込まれてしまいそうで。

ああ、結局私はそういう女なのですね。

でも仕方ありません。だつて私は、魔女なのですから。

以前にヤマトに指摘されたように、言葉が足りず、行動で示すのです。

「……んつ」

「つ!？」

それは刹那でした。そしてそれは永久でした。

私の想いも、彼の愛も。重ねて、伝えて、溶け合わせて。分かち合つても、足りなくて求める。

愛おしい人にしか、彼にしかしません。彼にしかあげません。でも、やつぱり言葉でも伝えたい。今なら伝えられます。今なら、きっと私も笑えます。彼になら、それができるのです。

だつて彼は――

「ヤマト。私も貴方を愛しています」

――私の夫なのですから。